

2016年度 活動報告書

Tokai University Student Project Center Activity Report

 東海大学チャレンジセンター



チャレンジセンター10周年を迎えて 2016年度チャレンジセンター活動報告書の発行にあたり



チャレンジセンター長
現代教養センター次長
木村英樹

2006年に発足したチャレンジセンターは、皆様のご理解とご支援を受けながら実践的な教育活動を継続し、おかげさまで2016年度に10周年を迎えることができました。本来であれば、創立10周年記念イベント等を企画すべきところであったかもしれませんが、2016年4月に起きた熊本地震が与えた本学園への被害が甚大であったことから実施を見送り、特別プロジェクト「熊本復興支援プロジェクト」の立ち上げ、ならびに被災地支援活動を優先させていただくことにいたしました。

開設以来、大学の社会的責任(USR)活動の一環として、所属するすべてのプロジェクトにおいて、社会貢献的内容を含む大きな活動(でかちゃれ)を展開してまいりました。この中でチャレンジセンターは、「自ら考える力」「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」に代表される社会的実践力を身につけた学生を育成し、輩出することに努めてまいりました。これらの実績は、文部科学省「地(知)の拠点整備事業」として採択を受けて始まった地域連携事業である「To-Collaboプログラム」につながったといえます。また、プロジェクト活動を通じた学び(PBL)をはじめとする、アクティブラーニングの手法を採り入れたチャレンジセンター科目が開講され、大勢の学生が受講してきました。

2016年度からは、「総合教育センター」と統合して新設された、「現代教養センター」の中に「チャレンジセンター」は移行されました。そして、2018年度に実施されるカリキュラム改訂では、チャレンジセンター科目のエッセンスを反映する形で、全学必修の発展教養科目(パブリック・アチーブメント型科目)として「シティズンシップ」「ボランティア」「地域理解」「国際理解」の4科目を新設し、開講していくという壮大な計

画を実行することとなりました。また、社会的実践力副専攻の改訂でも、社会との関わりを重視した人材育成に力が置かれます。今後は、これらの新しい授業科目とプロジェクト活動の両輪を軸で結びつけ、社会的実践力を育成する新しい体制を、できるだけ速やかに確立していくことが求められています。

今日では、社会的実践力を組織的に育成する先駆的な部署として、学内から認識されるとともに、学外からも注目される存在となりました。元気づけられるような学生の姿をTVや雑誌などを通じて、チャレンジセンタープロジェクトで活躍する元気な学生たちの姿を見た方々も多いのではないのでしょうか?10年にわたる様々な学生たちの取り組みによって、東海大学ブランドを高めることに多少なりとも貢献できたのではないかと考えております。しかしながら、プロジェクト活動を支援するアドバイザーやコーディネーターといったヒューマンリソースの確保は、依然として難航する状況が続き、すべてが順調であるとはいえません。また、学生の社会的活動を極め、高いレベルにまで昇華させるには、地域住民、行政、企業、各種団体などと連携し、信頼関係を深めていけるようなスペシャリストの確保とその育成が必要であります。これからもFDやSD活動を深化させ、教職員側のスキルアップを予断無く推進し、学生たちにより良い教育環境が与えられるよう努力する所存であります。

最後に、阿蘇キャンパスの「阿蘇援農コミュニティプロジェクト」に参加していた脇志朋弥さんを、熊本地震で失ったことは痛恨の念に堪えません。この場をお借りして、謹んで哀悼の意を表します。

2017年3月

| | |
|--|--|
| チャレンジセンター10周年を迎えて 2016年度チャレンジセンター活動報告書の発行にあたり | 1 |
| チャレンジセンター教育プログラムの取り組み | 3 |
| チャレンジセンター10年のあゆみ | 5 |
| チャレンジプロジェクト活動報告 | 7 |
| 《特別プロジェクト》 【湘南キャンパス】 | 熊本復興支援プロジェクト 7 ライトパワープロジェクト 9 Tokai International Communication Club 11 サイエンスコミュニケーター 13 3.11生活復興支援プロジェクト 15 キャンパスストリートプロジェクト 16 病院ボランティアプロジェクト 17 Tokai Formula Club 18 東海大学学生ロケットプロジェクト 18 スポーツ社会貢献プロジェクト 19 DAN DAN DANCE & SPORTS プロジェクト 20 環境キャラバン隊 21 |
| 【高輪キャンパス】 【熊本キャンパス】 | Takanawa共育プロジェクト 22 先端技術コミュニティACOT 23 Action Marketing プロジェクト 24 メカトロマイスタープロジェクト 25 熊本地域プロデュースプロジェクト 25 |
| 【阿蘇キャンパス】 | 阿蘇援農コミュニティプロジェクト 26 あにまるれすきゅープロジェクト 27 |
| 【阿蘇・湘南キャンパス】 【札幌キャンパス】 | 阿蘇は箱舟プロジェクト 27 札幌ボランティアプロジェクト(旧 福祉除雪プロジェクト) 28 |
| ユニークプロジェクト活動報告 | 29 |
| 【湘南キャンパス】 | Egyptian Project(旧 International Cultural Properties Project) 29 ポリヘドロン工作隊 29 Tokai Dream Space Team 30 |
| 【代々木キャンパス】 【清水キャンパス】 | よよさんぼ 30 ワンダフル・マリニアニマルズ 30 三保活性化プロジェクト 30 |
| 【阿蘇キャンパス】 | 阿蘇復興への道 30 |
| プロジェクト学生の声 | 31 |
| チャレンジセンターの活動 | 33 |
| 学生への研修(リーダー研修会、広報講習会) | 34 |
| チャレンジセンター支援体制・運営体制 | 35 |
| プロジェクトコーディネーター・アドバイザー | 37 |
| チャレンジセンター開講科目 | 39 |
| FD研究会 | 41 |
| PROG・ルーブリックによる参加学生の評価 | 42 |
| To-Collaboプログラムの取り組み | 43 |
| メディア掲載一覧 | 44 |
| チャレンジプロジェクト協力団体・協力者一覧 | 45 |
| チャレンジセンター長賞、チャレンジプロジェクト学科別参加人数 | 46 |
| 広報媒体(ポスター・チラシ・パネル・広報誌) | 47 |
| チャレンジプロジェクト活動一覧 | 49 |

チャレンジセンター教育プログラムの取り組み

チャレンジセンターが育む社会に必要とされる実践力 ～社会の課題に応じた多様なプロジェクト活動を通じて～

2016年度 開始間もなく東海大学熊本・阿蘇の両キャンパスは熊本地震により大きな被害を受け、特に南阿蘇村に立地する阿蘇キャンパスの被害は甚大であり3名もの学生の尊い命が犠牲となる、いたましい出来事がありました。阿蘇キャンパスでは、大学施設のみならず道路や橋などのインフラの復旧といった大きな課題を抱えており、同キャンパスでの授業は2018年度以降も熊本キャンパスにおける実施が延長され、また、阿蘇キャンパスの安全性を確保した上で使用可能な部分を再整備し、フィールドでの実習を中心とした専門教育を実施することになりました。

こうした熊本の事態に、震災直後より湘南キャンパスにおいてチャレンジプロジェクトメンバーを中心とした有志学生による「熊本・阿蘇キャンパスの学生支援」を目的とした募金活動の実施を皮切りに、本学学生の力で熊本復興に貢献するための特別プロジェクト『熊本復興支援プロジェクト』をチャレンジセンターに緊急に立ち上げるなど、今年度は、設立10年の間に本センターが展開してきた多様なプロジェクト活動の実績が活かせ、各キャンパスにおいて自発的な被災地支援が行われた1年となりました。

これまで本学は、『熊本復興支援プロジェクト』の他にも、社会の緊急を要する課題解決に貢献すべく『特別プロジェクト』をチャレンジセンターにおいて立ち上げ、大学の社会的責任(USR: University Social Responsibility)を果たしてまいりました。2006年には、外国人児童の就学環境改善を訴えた『日本縦断キャラバン隊』、2007年には、『障害者自立支援法』施行に伴う『障害者自立支援プロジェクト』、2011年に東日本大震災で壊滅的な被害を受けた大船渡・石巻の復興を支援する『3.11生活復興支援プロジェクト』などセンター開設以来計4件の特別プロジェクトを実施しています。

大学は専門教育や研究に加え、社会人として生き抜く能力を得るための多様な体験の場として、その役割を拡大させています。本センターが情勢の緊急性に応じて特別プロジェクトを発足させ続けていること、チャレンジプロジェクトの応募要件に「社会貢献活動を含む取り組みであること」を課していることも、学生時代に社会の課題を体感する中で自身の強み・弱みを発見し、本学より一人でも多くの「自ら考える力・集い力・挑み力・成し遂げ力」を培った人材を輩出することがより良い社会づくりに寄与できると考えているからです。

学生がこの4つの力を身につけるために、チャレンジセンターではプロジェクトの体験(実践)とともにプロジェクトマネジメントを学ぶ「チャレンジセンター科目」(理論)を開講しています。この実践と理論の学びの連動が、本センターの教育プログラムの特徴となっています。2016年度は、先述の特別プロジェクト1件に加え、チャレンジプロジェクト20件、ユニークプロジェクト23件、7キャンパス1,865名の学生が活動し、6キャンパスにおいて6,282名(うちジャーナリズム科目1,652名)がチャレンジセンター科目を履修しました。

本センターのプログラムは、プロジェクトを教員が専門的な立場から指導するプロジェクトアドバイザー、職員が様々な課題の相談役を務めるプロジェクトコーディネーターを担当し教職協働で学生の成長支援に携わっている点も特徴的です。また、各プロジェクトが昨年度の活動を振り返りプロジェクトに不足しているスキルを定め、次年度に向上させる分野を明確化する『学びのテーマ』の設定とそれらが学んでいるかを確認する『振り返りシート』の実施をはじめ、チャレンジプロジェクト中間・最終報告会の開催、各メンバーが今年度どのような活動を行い社会に貢献したかを記録する報告書の提出など、本センターが定めたこれら要件を修了することで、年間を通じプログラムに取り組めるようになっていきます。そして、本学のスケールメリットを活かせるよう、プロジェクトのメンバー構成に学部・学科・学年の横断を課していることから、学生らがface to faceで活動の進捗や今後の計画について話し合うためのミーティングの回数も要件とされています。

こうした取り組みを基盤にチャレンジセンターでは、今後も学生たちの社会的実践力の体得を支援するとともに、本センターの多様なリソースを社会に還元することで本学のUSRを果たす一翼を担ってまいります。

最後に、2016年度、各キャンパスで展開した熊本復興を目的とした本センターの活動には、熊本県を拠点とするボランティア団体の皆さまをはじめ、復興に尽力される地域の皆さま、募金活動にご協力いただいた全国の皆さまなど、多大なるご支援をいただきました。ここにお礼を申し上げますとともに、これからもチャレンジプロジェクトの取り組みにご協力、ご理解を賜りますようお願い申し上げます。

■チャレンジセンターの教育プログラム

プロジェクト活動 (P7～)

学部・学科・学年の枠をこえ、「地域活性」「社会貢献」「国際交流」「ものづくり」「環境・動植物保護」など多様な分野で活動。直面する様々な課題を乗り越える体験を通じて社会的実践力を培います。

チャレンジプロジェクト

- ◆ 学生が自由な発想で企画・立案した年間を通じたプロジェクト活動
- ◆ 大学職員によるプロジェクトコーディネーター、教員によるプロジェクトアドバイザーを配置
- ◆ メンバーが複数学科に横断して構成されていること
- ◆ 参加人数が50名以上であること(湘南キャンパス以外は30名以上)

プロジェクト修了認定

チャレンジプロジェクトが以下の条件(抜粋)を満たし、プロジェクトコーディネーターによって1年間の活躍が評価されたプロジェクトメンバーに授与されます。

- 1 コーディネーターによる推薦**
1年間のプロジェクトに積極的に参加し、また、その成果に貢献し「自ら考える力」「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」を身につけたと認められる学生を推薦
 - 2 チームとしての条件**
◆ プロジェクト協議会へのプロジェクトリーダーの出席 ◆ 全体・幹部ミーティングの実施 ◆ 中間報告会(10月)および最終報告会(2月)での発表(P33参照) ◆ 建学祭での発表 ◆ 応募要件のプロジェクトを実施するメンバー数を満たしていること 他5項目
 - 3 個人としての条件**
◆ 振り返りシートの提出※1 ◆ 中間報告会・最終報告会への出席 ◆ 参加報告書の提出・当該年度7月1日現在プロジェクトに所属し、活動期間が9ヶ月以上であること 他2項目
- ※1 振り返りシート:プロジェクトメンバーは、各企画終了後に省察会を開催し、プロジェクトが設定した「学びのテーマ」を踏まえ活動を実施出来たかを振り返るシートを作成します(年3回)

ユニークプロジェクト

- ◆ 将来的にチャレンジプロジェクトとして発展することを目的とした萌芽的位置づけのプロジェクト
- ◆ 少人数のグループ(10名以上)で構成
- ◆ 学生からの希望があり、かつ、人員が配置出来る場合はコーディネーターとアドバイザーを配置

・プロジェクトコーディネーター(職員)
・プロジェクトアドバイザー(教員)
による支援体制 ※詳細はP35～38

理論 ⇄ 実践

チャレンジセンター開講科目 (P39～)

社会的実践力科目とジャーナリズム実践教育科目からなり、総合大学としての多様性を活かし、学部・学科単独ではできない、社会とのつながりの中で実践的な教育を行っています。

社会に通用する実践力

社会的
実践力科目

時代を生きる情報力

ジャーナリズム
実践教育科目

社会的実践力を身につけ、
高い専門性で社会に貢献できる人材

自ら考える力 集い力 挑み力 成し遂げ力

常に未来を見据え、自らが
取り組むべき課題を探求する力

多様な人々の力を結集する力

困難かつ大きな課題に
勇気をもって挑戦する力

失敗や挫折を乗り越えて
目標を実現していく力

チャレンジセンター10年のあゆみ

チャレンジセンター設立は、「大学職員による大学改革」を旗印に学長のもと約50名の若手職員が集められ、教員および管理職を除いた検討グループ「ブランド21」が組織されたことが端を発しています。その検討グループで交わされた自由なディスカッションの中から、現在、本学の教育の基盤の一つとなっている「東海大学が育成する力」の原型にあたる「集い力・挑み力・成し遂げ力」が発想され、それらの力を学生が体得し社会に必要とされる人材と成れるよう、学生主体の多様なプロジェクトと、ワークを多く含んだアクティブラーニング型授業を開講する場としてチャレンジセンター設立の構想が生まれました。

チャレンジセンターは、「ブランド21」メンバーでもあった職員5名で構成されたチャレンジセンター準備室を経て、2006年4月、湘南キャンパスに設置されました。チャレンジセンター所長 大塚滋教授(法学部法律学科)、次長 梶井龍太郎教授(教養学部芸術学科)、チャレンジセンター推進室長 木村英樹教授(工学部電気電子工学科)のもと、準備室からの職員に加え、大学企画3件、学生企画8件のプロジェクト約750名の学生とともにスタートいたしました。

毎年、第1回目のプロジェクト協議会で各プロジェクトリーダーに配布される「チャレンジセンター運営マニュアル」は、初年度の協議会に参加したリーダーと本センター職員がマニュアルの項目と内容について議論を積み重ねながら作成しました。当時のリーダーは立ち上がったばかりのプロジェクト活動を推進させるほか、生まれたばかりの本センターのプロジェクト運営についても検討することとなり、予期しなかった未開の作業に不安な思いを抱えていたことでしょ。こうしたプロジェクトリーダーたちの様々な試行錯誤が、現在の本センター運営の基盤となっております。振り返れば懐かしいエピソードとして思い出されます。

発足当時は、総合大学である本学の特色が反映され、本センターが学生を公募する「大学企画プロジェクト」と学生より活動計画が応募される「学生企画プロジェクト」の2種類がありました。2008年の3大学(東海大学・九州東海大学・北海道東海大学)統合からは、両プロジェクトを「チャレンジプロジェクト」と活動形態を一本化するともに、全キャンパスにおいてプロジェクトが展開できるはこびとなりました。2013年度末に旭川キャンパス、2014年度末に沼津キャンパスが閉鎖となりましたが、2016年度現在も全キャンパス(8キャンパス)において、学部・学科・学年・キャンパスの枠をこえたチャレンジおよびユニークプロジェクトの活動が行われています。この発足より10年の間に約188件のチャレンジプロジェクトが立ち上がり、約11,600名の学生が活動を実施しました。

本センターでは、前述のとおり、プロジェクト(実践)とチャレンジセンター科目(理論)で生じる学びの循環により、学生に社会的実践力を体得させるPBL(Project Based Learning)型教育を実践しています。多くの大学のPBLは20名程度の人数で行われていますが、本センターのPBLは、応募要件としてプロジェクトの構成員が他学部他学科に横断していること、そして50名以上(湘南以外は30名以上)で構成されていることを設立時より義務づけています。つまり、プロジェクトを応募する以前に、自ら立ち上げたプロジェクトの計画を多くの学生に説明し、共感してもらい、仲間になってもらうというプロセスを経なければならず、その仲間集めの時点でPBLがスタートしていることが本プログラムの最もユニークな点です。現代の大学生はコミュニケーションを避ける傾向があるとされている中で、50名もの仲間を集めることは大変な気苦労が伴います。毎年、学生たちは応募時に直面する仲間集めの壁を克服でき

よう、様々なPRの工夫をこらしており、2008年からは湘南キャンパスにおいてプロジェクトの枠をこえてメンバーが集結して自主的にチームを作り、チャレンジプロジェクトを紹介するためのガイダンスを演出しています。こうした仲間集めのプロセスがプロジェクトの目的意識を深めると共に、メンバーの社会的実践力を強化する要因の一つとなっています。

チャレンジセンターは学内外の方々より「チャレセン」と略称で呼ばれているほか、「でかちゃれ」という愛称で呼んでいただけていることもあります。「でかちゃれ」とは「でっかいチャレンジ」を学生に行ってほしい、そんな学生時代しか発想できない「でかい」ことをサポートしたい、という設立時の本センター教職員の思いが込められています。スタイリッシュとは言えない「でかちゃれ」マークのデザインに使用を躊躇する教職員や学生もいましたが、プロジェクトメンバーの社会に貢献したい、社会で活躍したい、という小さな思いが、時に多様な組織やステークホルダーを巻き込み「でかちゃれ」に発展してきた10年となりました。

特に文系理系の学部が共存する湘南キャンパスでは、文系の学生がものづくり系のプロジェクトに参加したり、理系の学生が音楽系のプロジェクトに参加してオペラを披露したり、本学に入学すれば所属学科の専門教育だけでは出会えない仲間や体験をチャレンジセンターで得ることでき、本センターは他大学には無い本学の強みとしてもその役割を果たしてきました。

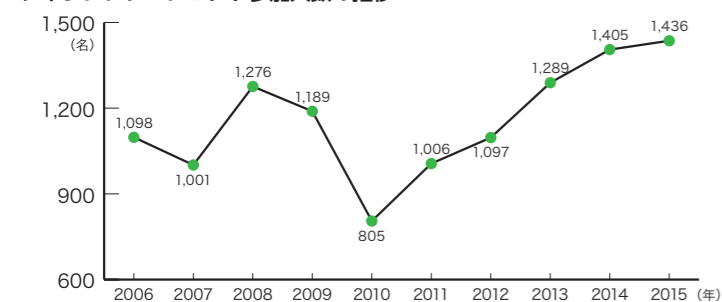
本文冒頭で紹介した若手職員によるワーキンググループ「ブランド21」はチャレンジセンターの設立をもってその役割を終えましたが、大学職員が大学改革を検討・実践する教育の担い手としての思いは、多様な部署から構成されたチャレンジプロジェクトコーディネーターによる学生支援の中に息づいています。そして教員からなるプロジェクトアドバイザーと連携し教職協働のもと本センター独自の教育プログラムを推進してまいりました。

2006年には文部科学省の現代GP「東海大学USR型モデルの創出・実践—多様なヒューマンリソースをマッチングして実践する地域活性化プロジェクト—」が採択され、そして2013年には「COC:地(知)の拠点整備事業」として、本センターのこれまでのプロジェクトと科目が基盤となった「To-Collaboプログラム」に参画しました。計画内容は異なりますが、いずれの取り組みも本学の多様なリソースを社会に還元し、地域の活性化に寄与することを目的としています。こうした2件の事業の取り組みと、8キャンパスで展開してきた学生主体のプロジェクト活動により、現在では、学内外より様々な協力要請のお声がかかるセンターに成長し、社会の課題を学生の自由な発想で改善していく本学と地域を接続する部署としても機能しています。

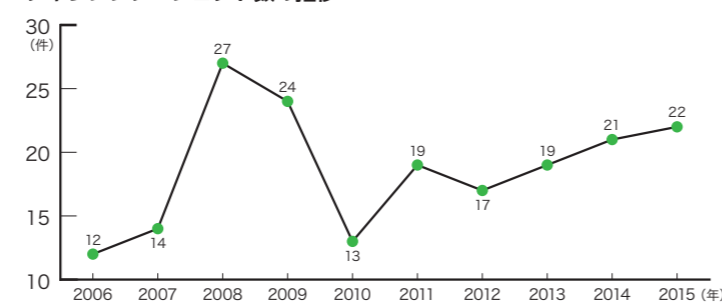
これからの10年における大学の役割は、社会の少子高齢化がさらに深刻化するうえ、教育の無料化はもはや珍しいことではなくなり、さらにAI技術の目覚ましい発展などにより、想像もせぬような大きな変革期を迎えるでしょう。2026年には、本学が育成する「自ら考える力・集い力・挑み力・成し遂げ力」の4つの力は、どのように学生たちに受け入れられ、また学生主体のプロジェクトの質はどのように発展し、本センターの教育プログラムはどのように変化していくのでしょうか。いずれにしても、社会情勢を見極め、柔軟に検証を加えながら、多様な活動体験を通じて社会に貢献できる人材を輩出する、という本センターの社会的責任(USR)の役割は変わることなく次の10年も学生の成長を多角的に支援し続けてまいります。

データで見るチャレンジセンターの10年

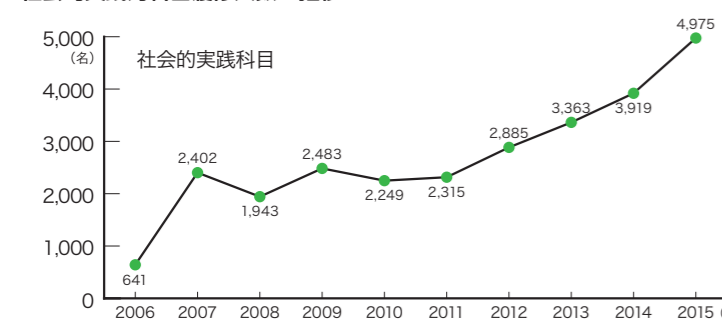
チャレンジプロジェクト参加人数の推移



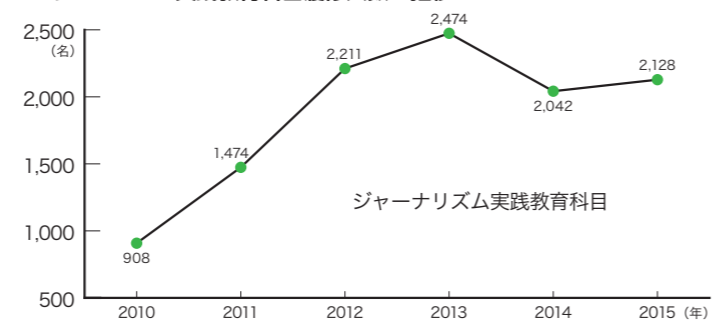
チャレンジプロジェクト数の推移



社会的実践科目履修人数の推移



ジャーナリズム実践教育科目履修人数の推移



| | | |
|-------|-----|---|
| 2006年 | 4月 | 「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」を育成するチャレンジセンターを設立(チャレンジセンター科目を開講) |
| | 5月 | 学生企画プロジェクト8件、大学企画プロジェクト3件が採択され、プロジェクト活動が始動 |
| | 8月 | 文部科学省 現代GP「東海大学発USR型モデルの創出・実践—多様なヒューマンリソースをマッチングして実践する地域活性化プロジェクト—」が採択 |
| | 8月 | 「日本縦断キャラバン隊」(北ルート)が札幌キャンパスから高輪キャンパスまでを「在日外国人就学環境改善」をテーマに活動 |
| | 10月 | 「第1回チャレンジセンターセミナー」を開催(2016年度までに17回開催) |
| | 12月 | チャレンジセンターSNS「でかちゃれ」およびナレッジマネジメントシステム「ナレッジチャレンジ」開設 |
| 2007年 | 3月 | シンポジウム「USR—社会貢献を通じた大学と社会の新たな連携」を開催 |
| | 10月 | 「障害者自立支援法」の施行に伴い「社会福祉法人かながわ共同会・秦野精華園」と協働する「障害者自立支援プロジェクト」発足 |
| 2008年 | 4月 | 大学企画・学生企画プロジェクトの区分が廃止され、「チャレンジプロジェクト」に一本化される |
| | 4月 | 「ジャーナリズム実践教育コース」および「観光学副専攻」(2009年度に観光学部開設に伴い移行)の開講 |
| | 5月 | 新たに九州～湘南キャンパスまでを「環境問題」をテーマに活動する「日本縦断キャラバン隊」(南ルート)を新たに発足。廃食用油でも走行する「天ちゃん号」を使用 |
| 2009年 | 9月 | 日本縦断キャラバン隊(現:環境キャラバン隊)が「コカ・コーラ教育賞」を受賞 |
| | 10月 | ライトパワープロジェクトがオーストラリア大陸を縦断するソーラーカー世界大会「World Solar Challenge(Global Green Challenge)」で優勝 |
| 2010年 | 3月 | チャレンジセンター所長賞を創設(現:チャレンジセンター長賞) |
| | 9月 | キャンパスストリートプロジェクト、ひらつかピーチハウスプロジェクトが「グッドデザイン賞」を受賞 |
| | 9月 | Tokai Formula Club が「全日本フォーミュラ大会」で5位入賞 |
| 2011年 | 4月 | 特別プロジェクトとして「3.11生活復興支援プロジェクト」が始動 |
| | 10月 | ライトパワープロジェクトがソーラーカー世界大会「World Solar Challenge」で2連覇 |
| | 10月 | 福祉除雪プロジェクト(現:札幌ボランティアプロジェクト)が北海道主催の「北海道福祉のまちづくり賞」を受賞 |
| 2012年 | 2月 | 「プロジェクトリーダー研修会」を初実施 |
| | 11月 | 先端技術コミュニティACOTが「ETロボコンチャンピオンシップ大会(全国大会)」に初出場 |
| 2013年 | 4月 | チャレンジセンターの教育目標を「自ら考える力」「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」の4つの力に変更 |
| | 4月 | ライトパワープロジェクトがアメリカ大使館(東京都港区)でジョン・ケリー国務長官らと、対話イベントを通じて交流 |
| | 4月 | ライトパワープロジェクトのソーラーカー『2011年型Tokai Challenger』が株式会社タカラトミー「トミカ」シリーズとして商品化 |
| | 9月 | 文部科学省大学COC事業「To-Collaboプログラムによる全国運動型地域連携の提案」の計画・立案に参画 |
| 2014年 | 1月 | 病院ボランティアプロジェクトが一般財団法人学生サポートセンター「学生ボランティア団体支援」に採択 |
| | 7月 | チャレンジプロジェクト参加者がのべ1万人を突破 |
| | 8月 | 東海大学学生ロケットプロジェクトが「能代宇宙イベント」の3部門で最優秀賞を受賞 |
| | 11月 | 病院ボランティアプロジェクトが公益財団法人ソロボチミスト「学生ボランティア賞」を受賞 |
| 2015年 | 2月 | チャレンジセンターの公式Facebookサイトを開設 |
| 2016年 | 2月 | Beijo Me Ligaが生活クラブ事業連合生活共同組合連合会「キララ賞(かながわ若者生き生き大賞)」を受賞 |



2006/チャレンジセンターを設立



2008/日本縦断キャラバン隊(南ルート)発足



2009/World Solar Challengeで優勝



2010/所長賞を創設



2011/3.11生活復興支援プロジェクト始動



2012/プロジェクトリーダー研修会



2013/授業風景



2014/能代宇宙イベントの3部門で最優秀賞を受賞



2016/キララ賞受賞

チャレンジプロジェクト活動報告

熊本復興支援プロジェクト

特別プロジェクト 湘南 代々木 伊勢原 清水 札幌 社会貢献

| | | | | | | | | | |
|------------|-------|-----|---------|----|--------|------|------|--------------------|----------|
| プロジェクトリーダー | 津田哲平 | 文学部 | 心理・社会学科 | 4年 | サブリーダー | 塚田龍洋 | 体育学部 | スポーツ・レジャー・マネジメント学科 | 4年 |
| サブリーダー | 加藤めぐみ | 工学部 | 材料科学科 | 3年 | 広報リーダー | 深澤僚 | 工学部 | 応用科学科 | 3年 |
| 会計 | 沢見潤一 | 法学部 | 法律学科 | 3年 | | | | | 参加人数 51名 |

4月16日に発生し、大きな被害をもたらした熊本地震。南阿蘇村に立地していた阿蘇キャンパスには特に甚大な被害が及び、地震直後から、地域の皆様や多くの関係者の皆様に、学生の救護、救援活動でご尽力を賜りました。さらに、国内外の多くの方々から学生支援や教育環境復興のための浄財が、温かい励ましやお見舞いの言葉と共に本学に寄せられました。このような本学の復興を願う様々なあたたかいご支援・ご声援に少しでもお応えたく、また、2つのキャンパスが長きにわたり立地する熊本の地のある事に対し学生の方で復興を支援する特別プロジェクト「熊本復興支援プロジェクト」を6月に発足させました。本プロジェクトは、夏期休暇期間にあたる8月21日～9月17日までの4週間にわたって被災地へ赴き、湘南・代々木・伊勢原・清水・札幌キャンパスの学生ら51名、引率教職員14名の総勢65名が、一週間ごとに4班を編成し、さらに各班を2チームに分けて、多様な復興支援に取り組みました。また、2班の活動週からは、毎週火曜日に熊本・阿蘇キャンパスのチャレンジプロジェクトメンバーおよび有志学生のべ21名が加わって共に活動を行い、活動期間中の毎週水曜日夜刻より行われた懇親会において交流しました。

8月21日～9月17日 ※移動日を含む

被災地ボランティア活動を実施

■ 熊本県益城郡益城町・阿蘇郡西原村・阿蘇郡南阿蘇村・阿蘇市

第1班14名は、二手に分かれて活動を開始。Aチームは地震で泉源を失い、再開のめどが立っていない村営温泉施設「長陽憩いの家」の“復興ミュージアム”化に向けた活動に参画。Bチームは、連日朝から活動拠点である熊本市内の崇城大学ボランティアビレッジを訪ね、全国から集ったボランティアとともに行動しました。

第2班11名は、バラ園「はな阿蘇美」(熊本県阿蘇市)において、イチゴ用ベンチの解体作業を実施。また、熊本県益城町安永地区の家主が自費解体した民家の片付けや、益城町東無田地域の農家ででのビニールハウス設営、台風の接近に伴う畑の台風対策などを行いました。

第3班12名は、「はな阿蘇美」において、解体作業や整頓作業を実施。また上益城郡益城町内の農家ででのプランターの移動作業や、民家で家具の運搬、トラックへ瓦の積み込み作業、上益城郡御船町内の農家ででのビニールハウスの解体作業、阿蘇郡西原村の落花生農家や田んぼでの除草作業などを実施しました。

第4班14名は、全員で南阿蘇村にある「木之内農園」を訪問。地震の影響で水が出ず、作物を育てられなくなったビニールハウスの撤去作業に取り組みました。後半は、益城町にある大豆畑で草刈りに取り組みました。



8月21日～9月17日 ※移動日を含む

被災地ボランティア活動を実施

■ 熊本県益城郡益城町・阿蘇郡西原村・阿蘇郡南阿蘇村・阿蘇市

第1班14名は、二手に分かれて活動を開始。Aチームは地震で泉源を失い、再開のめどが立っていない村営温泉施設「長陽憩いの家」の“復興ミュージアム”化に向けた活動に参画。Bチームは、連日朝から活動拠点である熊本市内の崇城大学ボランティアビレッジを訪ね、全国から集ったボランティアとともに行動しました。

第2班11名は、バラ園「はな阿蘇美」(熊本県阿蘇市)において、イチゴ用ベンチの解体作業を実施。また、熊本県益城町安永地区の家主が自費解体した民家の片付けや、益城町東無田地域の農家ででのビニールハウス設営、台風の接近に伴う畑の台風対策などを行いました。

第3班12名は、「はな阿蘇美」において、解体作業や整頓作業を実施。また上益城郡益城町内の農家ででのプランターの移動作業や、民家で家具の運搬、トラックへ瓦の積み込み作業、上益城郡御船町内の農家ででのビニールハウスの解体作業、阿蘇郡西原村の落花生農家や田んぼでの除草作業などを実施しました。

第4班14名は、全員で南阿蘇村にある「木之内農園」を訪問。地震の影響で水が出ず、作物を育てられなくなったビニールハウスの撤去作業に取り組みました。後半は、益城町にある大豆畑で草刈りに取り組みました。

| | | | | |
|-----------------------|-------|--------|--------------------|----|
| 第1班 8月21～27日 | | | | |
| 班長 | 石ヶ森光司 | 法学部 | 法律学科 | 3年 |
| 副班長 | 加藤勉 | 文学部 | アジア文学科 | 2年 |
| 広報担当 | 塚田龍洋 | 体育学部 | スポーツ・レジャー・マネジメント学科 | 4年 |
| 第2班 8月28日～9月3日 | | | | |
| 班長 | 加藤めぐみ | 工学部 | 材料科学科 | 3年 |
| 副班長 | 望月康佑 | 文学部 | コミュニケーション学専攻博士課程 | 2年 |
| 広報担当 | 深澤僚 | 工学部 | 応用科学科 | 3年 |
| | 作田瞬 | 工学部 | 航空宇宙学科航空宇宙専攻 | 2年 |
| 第3班 9月4～10日 | | | | |
| 班長 | 江田千佳 | 体育学部 | 生涯スポーツ学科 | 4年 |
| 副班長 | 津田哲平 | 文学部 | 心理・社会学科 | 4年 |
| 広報担当 | 春原崇宏 | 法学部 | 法律学科 | 3年 |
| | 大槻貴史 | 工学部 | 土木工学科 | 3年 |
| 第4班 9月11～17日 | | | | |
| 班長 | 沢見潤一 | 法学部 | 法律学科 | 3年 |
| 副班長 | 永井和樹 | 法学部 | 政治学科 | 3年 |
| 広報担当 | 両角拓真 | 政治経済学部 | 法律学科 | 2年 |

8月5日

「全体会議」を実施

■ 湘南キャンパス15号館

現地では熊本・阿蘇両キャンパスの学生、教職員や県内でボランティア活動を展開している団体と協力し、さまざまな活動に取り組んでいく必要があります。本会議では、被災地でのボランティア活動に向けた心構えや被災者との触れ合いの際に気をつけなければならないポイントなどについて、専門家や現代教養センターの田島祥講師らが講義。グループワークを通じて活発に意見を交わしながら活動に備えました。メンバーの石ヶ森光司さんは、「地震発生直後から役に立てないかと考えていました。現地の人たちと交流し情報を集めながら活動を展開していきたい」と語りました。



9月26日

「振り返り会」を実施

■ 湘南キャンパス12号館

各班の活動内容について発表するとともに“やりたかったけどできなかったこと”や“これからできそうなこと”について、意見を交わしました。学生たちからは、「現地の人と触れ合う機会が少なく、もっと話したかった」といった反省の言葉が出た一方、「関東にいてもSNSなどを通じた情報発信はできる。熊本にもっとボランティアや観光で行ってもらえるような情報を伝えたい」「建学祭に出展してアピールしよう」といった今後の展望も語られました。メンバーの後藤孝弘さん(法学部法律学科3年次生)は、「本学の学生だからこそできるような、“でっかいこと”を実現できるように、次の一歩を踏み出したい」と語りました。



12月19～22日

「熊本復興へ～私たちに出来ること～」を開催

■ 東海大学サテライトオフィス

熊本の現状を多くの人たちに知ってもらうことを目的として、写真と映像の展示会を開催。活動をまとめたポスターの掲示や、活動を通じて連携したNPO法人エコファーマーズセンター、メンバーが勤める観光スポット・お土産などを紹介しました。12月22日には報告会を実施し、地域住民の皆さんや学生、教職員ら約15名が参加。メンバーの安藤晴佳さん(文学部心理・社会学科1年次生)と須藤冬莉さん(文学部心理・社会学科1年次生)の2名が司会進行を務め、プロジェクトの趣旨や熊本地震の詳細、メンバーが参加したきっかけについて語りました。



本プロジェクト以外の復興支援

4月18～29日

湘南キャンパス

3.11生活復興支援プロジェクトをはじめ、学生有志による募金活動を実施



3.11生活復興支援プロジェクトをはじめとするプロジェクトメンバーや学生会、体育会ラグビー部員たちが、「平成28年熊本地震」で被災した本学熊本・阿蘇キャンパスの学生支援を目的とし、義援金を募る活動を行いました。本活動は、毎日、1時間開始前、昼休み、放課後の時間帯に実施され、本学学生・教職員などより多大な協力のもと義援金総額は891,668円となりました。集まった義援金は、熊本・阿蘇キャンパスの学生支援のため、有効に使われています。

6月12日

葛西橋周辺・荒川河川敷(東京都)

プロジェクトメンバーが「第6回 大学対校! ゴミ拾い甲子園」に参加



株式会社クリエイティブPRが運営する本イベントは、12大学約150名の大学生がチームを組み、1時間30分かけて河川に落ちたペットボトルや空き缶など、収集したゴミの量を競い合いました。本センターからはライトパワープロジェクト、環境キャラバン隊、サイエンスコミュニケーション、病院ボランティアプロジェクト、Takanawa共育プロジェクトのメンバー計60名が参加し3位となりました。また、協賛のディップ株式会社から参加者の活動時間を時給として換算した合計金額を、本学熊本地震義援金に寄付していただきました。

8月12日

湘南キャンパス

横浜市立大学から義援金が贈られました



同じ年代の学生を少しでも助けたいとの思いから、約20名が1週間かけて集めたもので、横浜市立大学の職員とボランティア支援室の学生スタッフが湘南キャンパスを訪れ、木村英樹センター長に目録と同大の学生から寄せられた応援メッセージを手渡しました。当日は、木村センター長のほか、3.11生活復興支援プロジェクトのリーダー武田宗一郎さん(工学部建築学科2年次生)とも懇談。木村センター長が現地の状況や熊本での復興支援活動の概要を説明しました。

ライトパワープロジェクト

湘南

ものづくり

省エネルギー技術を利用したものづくり

達成目標 大会に出場し最高の記録を樹立するとともに、社会に貢献する活動を展開する

学びのテーマ チームの一員として責任ある行動を学ぶ

| | | | | |
|------------|-------|-----|--------------|-----------|
| プロジェクトリーダー | 伊藤参里 | 工学部 | 機械工学科 | 3年 |
| サブリーダー | 七海沙也加 | 工学部 | 航空宇宙学科航空宇宙専攻 | 2年 |
| サブリーダー | 近藤岳 | 工学部 | 機械工学科 | 2年 |
| 広報リーダー | 森美里 | 工学部 | 航空宇宙学科航空宇宙専攻 | 3年 |
| 会計 | 相良玲那 | 工学部 | 動力機械工学科 | 2年 |
| | | | | 参加人数 126名 |

9月24日～10月1日

ソーラーカーチーム

「サソール・ソーラー・チャレンジ」で準優勝

■ 南アフリカ共和国

南アフリカで開催された「サソール・ソーラー・チャレンジ」は5回目の開催となるソーラーカーの国際レースで、本学は3回連続で優勝していました。今回、本学は4回目の出場で、ドライバー3名を含めた16名の学生と各種サポートにあたる教職員3名の計19名のメンバーで参戦しました。レースに挑んだ車両は、2015年にオーストラリアで開催された「ブリヂストン・ワールド・ソーラー・チャレンジ2015」への出場に合わせて開発した「2015年型Tokai Challenger」。予選では全チームでトップとなり、ポールポジションで本選をスタートしました。本選では、同国北部のプレトリアをスタート後、ブルームフォンテンやポートエリザベスなど7都市を経由しながら8日間をかけて約2,000km先のゴール地点・南部の都市ケープタウンを目指して総走行距離を競います。コース途中には、一日ごとに「ループ」と呼ばれる1周23～74kmの周回コースが用意されており、ゴール地点に17時30分までに到着することができれば、このループを何度でも周回することが可能。優勝を狙うには、その時々のソーラーパネルの発電量から最適な速度を算出し、ループで最大限の走行距離を積み上げることが重要な戦略となります。大会1日目には633kmを計測、2日目以降も順調に走行距離を積み重ね、8日間で総走行距離4,544.2kmを突破。オランダのデルフト工科大学に次いで準優勝という結果になりました。木村英樹総監督は「今回の大会には多くの学生に経験を積ませる意味合いもあったので、満足とは言えないまでも、一定の評価は与えられると思います。2017年度のオーストラリア大会に向けて、優勝できる車体とチームを用意したいと考えております」と語りました。



2016年 3月13日・9月17日 人力飛行機チーム

「HPA (Human-Powered Aircraft) 交流会」を開催

■ 湘南キャンパス1号館・2号館・国立大学法人 電気通信大学(東京都調布市)

“人力飛行機の製作技術の向上や人力飛行機界全体の活性化”を目的に、毎年9月と3月に開催。3月は37チーム約500名が参加し、人力飛行機に関する講演会と製作技術やチーム運営などの班に分かれた交流会、立食形式の親睦会を湘南キャンパスで実施。9月には本チームから33名が参加し、「HPASim」というバーチャルリアリティ技術を用いたパイロットのトレーニングソフト開発についての聴講や情報交換、技術交流を行いました。



11月1日 ソーラーカーチーム

「リポビタンD」の新CMIに出演

CMでは、大正製薬株式会社「リポビタンD」のイメージキャラクターであるサッカー選手の三浦知良さんが、チャレンジを続ける学生たちを訪問。将来の夢やチームの未来を語る学生たちを激励しました。学生たちは、「多くの人にソーラーカーの魅力やエコの大切さを知ってもらうきっかけになれば」と語っていました。CMは湘南キャンパスで撮影が行われ、15秒と30秒の2種類。また首都圏の鉄道内でも、同様な内容のポスターが掲出されました。



11月8日 ソーラーカーチーム

カザフスタン共和国大統領がソーラーカーを見学

■ 高輪キャンパス1号館

カザフスタン共和国のナザルバエフ大統領が東海大学名誉博士(工学)の学位を授与されました。授与式に合わせソーラーカーを展示。カザフスタンのメディアが押し寄せる中で、日本の技術の結晶であるソーラーカーに高い関心を持って見学されました。スピーチの中で、「首都アスタナで未来のエネルギーをテーマに開催される国際博覧会に、ソーラーカーを招待したい」というお言葉をいただきました。



11月6日

人力飛行機チーム

「パナソニックエボルタチャレンジ2016」で活躍

■ 琵琶湖(滋賀県)

本チャレンジは、人力飛行機チーム(TUMPA)が製作した機体で琵琶湖上を10km以上飛行し、「一次電池(乾電池)で固定翼飛行機が飛んだ最長距離」のギネス世界記録の取得を目指したものです。プロジェクトメンバーは6月から設計を開始。これまで人力飛行機で培ってきた技術を生かしつつ、効率および安定性が高い機体を製作。これにパナソニック株式会社製の乾電池エボルタ640本と電気モーターを組み合わせて電気飛行機とし、10月からは毎週末にテストフライトを重ねてきました。当日、メンバーは未明から機体の組立作業を開始。機体の最終整備を進め、5時過ぎにはギネス認定委員および電気技術者による最終チェックも終わってフライトの準備を完了させました。5時半からは、セレモニーも実施。多くの報道陣と市民らが見守る中、リーダーの東海林聡史さん(工学部動力機械工学科3年次生)とパイロットの鷹栖啓将さん(工学部航空宇宙学科3年次生)がチャレンジへの決意を語りました。その後、6時21分の日の出を待って、



鷹栖さんがコックピットに乗り込みチャレンジを開始。6時37分に、最も難易度が高いとされていた離陸に見事成功しました。その後も、乾電池エボルタは快調に電力を供給し、安定した水平飛行を続けました。しかしながら、予期せぬ突風で右主翼がねじれ、折れたことでバランスを失い3,531m地点で着水。今回の記録達成はなりません。リーダーの東海林さんは、「多くの皆さんの期待に応えられず申し訳ない気持ちでいっぱいです。しかし今日飛び立てたことは、チームの歴史の中でも大きな価値になると考えています。こうした機会をつくってくれた多くの方々、応援してくれた皆さんに心から感謝します。10km飛び続けられなかったのは、今のチームの力がここまでだったのだとも思いますが、今はあきらめたくないという気持ちでいっぱいです。もう一度チャンスがいただけるなら、ぜひ何らかの形で再挑戦したい」と語りました。この挑戦は、TVや雑誌など多くのメディアにも紹介されました。



8月11日 人力飛行機チーム

「2016年度ものづくり教室」を開催

■ 湘南キャンパス12号館第1会議室・17号館ネクサスホール・高間原第2グラウンド

“手作り飛行機の工作を通して子どもたちにもものづくりの楽しさを知ってもらう”ことを目的に、秦野市立広畑・大根・鶴巻小学校、平塚市立みずほ小学校の児童59名とその保護者64名、総勢123名が参加しました。はじめにプロジェクトの活動を人力飛行機のテストフライトの動画を上映しながら説明しました。続いて手投げ飛行機を製作。1,000×700mmのケント紙を使った巨大紙飛行機の製作教室も実施しました。



通年

地域イベントに出展

- ◇6月29日～7月1日 「PVJapan2016」にブースを出展 パシフィック横浜(神奈川県横浜市)
- ◇8月11～15日 「新東名ハイウェイ・モーターショー Produced by KURUMAG.」に初出展 NEOPASA清水(静岡県静岡市)
- ◇9月10日 「みんなであつなぐ元気が出るドリームサイエンス 2016 in Shimizu」に出展 本学付属翔洋高等学校・中等部(静岡県静岡市)
- ◇9月11日 「第8回伊勢自フェスタ 2016」に初出展 伊勢原自動車学校(神奈川県伊勢原市)
- ◇10月20～22日 「テクノフェア」に出展 パシフィック横浜(神奈川県横浜市)
- ◇10月29・30日 「平工祭」に出展 神奈川県立平塚工科大学(神奈川県平塚市)



PVJapan2016



平工祭



新東名ハイウェイ・モーターショー Produced by KURUMAG

Tokai International Communication Club

異文化を知って、日本や自分を見つめ直す

達成目標 多文化共生を意識してもらった人数のべ300人

学びのテーマ 多文化共生について自ら考え行動しその伝え方を学ぶ

湘南

国際交流

| | | | | |
|------------|------|-----|----------|----|
| プロジェクトリーダー | 永田聖 | 工学部 | 動力機械工学科 | 2年 |
| サブリーダー | 浪川唯奈 | 文学部 | アジア文明学科 | 2年 |
| サブリーダー | 内野大悟 | 工学部 | 動力機械工学科 | 2年 |
| 広報リーダー | 中里莉歩 | 文学部 | 広報メディア学科 | 2年 |
| 会計 | 中川咲恵 | 工学部 | 電気電子工学科 | 2年 |
| 参加人数 65名 | | | | |

4月13日～7月14日、9月14日～2017年 3月23日

「にこティー教室」を実施

■ 秦野市立南公民館(神奈川県秦野市)

「にこティー教室」とは「にこにこティーチャー」の略で、「外国につながるを持つ秦野市在住の子どもたち」に対し、日本語や普段の学習のサポートを提供する場として企画。4年目を迎えた今年度の春セメスターは計26回、秋セメスターは計51回実施しました。昨年度に引き続き、ペルーやブラジル、ボリビア、中国などにつながるの未就学児から高校生までの子どもたちがのべ1,000名以上参加しました。メンバーは、子どもたちから宿題や学校での様子を伺い、それぞれの授業の進み方やテスト範囲に合わせて学習を支援。子どもたちの得意・苦手科目や悩みを、支援する側全員が情報共有することで、それぞれに合わせたサポートや、元気がない子の相談にも応じることができました。



10月1・2日

「国際交流高校生をつどい2016」をサポート

■ 横浜市野島青少年研修センター(神奈川県横浜市)

“神奈川県に住む高校生たちが、留学生と交流する場を提供し、野外活動やワークなどの交流を通して広く国際理解を深める”ことを目的に実施。本プロジェクトはグループワークなどの企画・運営や、高校生と留学生の交流をサポートするスタッフとして初めて神奈川県高等学校国際教育研究協議会より依頼を受け、参加。当日は、高校生68名、留学生24名、プロジェクトメンバー7名の総勢99名が参加。1日目はウォークラリーと地図作りのグループワークを行いました。翌日は“理想の学校を考える”をテーマにグループワークを実施。メンバーは、うまく議論を進めることができていないグループに声をかけるなど、留学生とのコミュニケーションを活発化させるためファシリテーターを務めました。



8月5日、23・24日

「夏休み宿題サポートプロジェクト」を実施

■ 秦野市立南公民館(神奈川県秦野市)

『にこティー教室』の延長として、市内在住の外国につながるの小中学生を対象に実施し、今年度は、3日間でのべ33名の小中学生が参加しました。8月5日は、子どもたちの自主的な学習を促すため、参加者一人ひとりと話し合いながら期間中の学習計画を作成。8月23・24日の両日は、プランに沿って国語、算数の問題集や作文に取り組んできた子どもたちに、残った宿題などについてアドバイスを送りながら、「よくできたね」「次はこの問題を解いてみよう」と優しく声をかけました。そのほかにも、自由研究や工作などのテーマについて相談を受ける場面や、宿題を終えた子どもたちと、折り紙やけん玉といった日本ならではの遊びで交流を深める場面もありました。



11月8日

公益財団法人ソロプチミスト日本財団の「学生ボランティア賞」を受賞

■ シーガイアコンベンションセンター(宮城県宮崎市)

本賞は学生ならではの視点で、“よりよい社会の形成と発展を推進するための活動”“児童及び青少年の健全育成活動”といった、財団の定款に掲げる7分野に該当する活動を継続的にやり、誠実に責任を果たしている学生に対し授与されるものです。本プロジェクトは、“多文化共生”の理念のもと、外国籍の子どもたちへの学習支援や本学の留学生との交流会など、異文化理解を促進するための多彩な活動を展開。その実績が評価され、今年9月に受賞が決定しました。贈呈式には、2014年度リーダーの新倉和矢さん(政治経済学部経営学科4年次生)と2015年度リーダーの倉升克幸さん(工学部応用化学科3年次生)が出席。登壇した倉升さんに、賞状と副賞が手渡されました。



4月12日～7月5日、9月27日～2017年 1月17日

「Communication Lunch」を開催

■ 湘南キャンパス

学習した日本語を使って日本人と交流したい留学生や、留学生と交流してみたい日本人学生のために、“留学生と日本人学生と一緒に昼食をとりながら、簡単な英語や日本語を用いて交流ができる場”として計25回実施し、タイやモンゴル、イタリア出身の留学生のべ208名、プロジェクトメンバーを含む日本人学生のべ262名が参加しました。参加者は食事を通して、出身国の文化や好きな食べ物について話したり、折り紙で鶴や風船を作るなど日本の遊びを通して交流を深め、回数を重ねるごとに留学生が読めない漢字を日本人学生が教えたり、参加者同士が学内で挨拶し合えるほどの仲になりました。



9月24日、2017年 3月4日

「異文化理解ワークショップ」を開催

■ 秦野市立南公民館(神奈川県秦野市)

“子どもたちが外国に興味を持ち、将来的には国際的視野を持ってもらう”ことを目的に開催。9月24日はベトナムをテーマに設定し、本学の留学生グエンダットさん(当時：政治経済学部経営学科4年次生)を講師に招き、小学生15名、保護者10名、プロジェクトメンバー19名の総勢44名が参加しました。はじめにベトナム語での挨拶を参加者同士で交わしたり、ベトナム式のじゃんけんを行いました。3月4日は、2020年に開かれる東京オリンピックの関心が高いことから、過去の開催国(ブラジル、イギリス、中国、ロシア、カナダ、イタリア)をブース形式で紹介。目標の30名を大幅にこえる47名の親子連れが来場し、外国の文化に触れました。



7月5日、12月16日

「For the Future～グローバル化していく日本社会～」を開催

■ 湘南キャンパス8号館

“文化の違いを受け入れる”ことの理解を目的に、7月5日は「食から考える多文化共生『食』と『文化』と『感覚』と」と題し、ワークショップを行いました。当日はメンバーを中心とした本学学生41名が参加。講師に本学現代教養センター加藤泰教授を招き、「食べられるもの」、「食べられないもの」、「食べてはならないもの」について講演。続いて、参加者をグループに分け、食の文化について意見を交わしました。12月16日は「ハーフって呼ぶな!?!」と題し、ミス・コンテストや二重国籍問題など、「ハーフ」とよばれる人々に焦点を当てたワークショップを実施。ハーフの学生など15名とメンバー16名が参加しました。



2017年 1月12日

「新春もちつき大会」を開催

■ 湘南キャンパス8号館前

“留学生に日本の正月行事を体感してもらおうとともに、一般学生との交流を深めてもらう”ことを目的に実施。日本人学生77名、留学生17名、メンバー27名の総勢121名が参加し、全体の約半数は台湾やドイツ、ベネズエラなど8つの国や地域から留学生が参加しました。当日は臼や杵とともに8kgの餅米を用意。留学生や日本人学生が笑顔で餅つきを楽しみ、つきたての餅はあんこやきな粉など4種類の味付けをして参加者にふるまいました。メンバーの阿部響子さん(文学部英語文化コミュニケーション学科1年次生)は、「今回の活動を通じて、本プロジェクトの存在をより多くの人に知ってもらい、今後の活動に足を運んでもらえたら」と語りました。



9月9日

「日本文化交流会」を開催

■ 翰林日本語学院(神奈川県横浜市)

“日本語を学ぶ翰林日本語学院の留学生に対し、日本人との交流の機会を増やす”ことを目的に開催。今回は22名のメンバーと中国やロシア、ペルー出身の留学生20名が交流しました。はじめに『ジェスチャーゲーム』を実施。チームごとに野球やサッカーといった世界共通のスポーツや、相撲、カラオケなど日本にちなんだものを身体で表現。答え合わせの際にはメンバーが日本語の発音をレクチャーしました。次に日本の伝統文化として『日本食づくり』を実施。留学生のほとんどが食べたことの無いタコ焼きを作りました。タコの代わりにチーズやチョコレートを入れたアレンジレシピにも挑戦し、全員で楽しく味わいました。



2017年 1月30日

一般財団法人学生サポートセンターの「学生ボランティア団体」に採択

■ 株式会社学生情報センター(京都府京都市)

自由な発想と行動力で社会貢献活動を計画・実行している学生団体に対し、同センターが組織の活性化やネットワークづくりのための経済的支援を行うもので、「学生ボランティア活動支援選考委員会」の審査により、今年度は56団体が選出されました。表彰式には、サブリーダーの浪川唯奈さん(文学部アジア文明学科2年次生)と広報リーダーの中里莉歩さん(文学部広報メディア学科2年次生)が出席。浪川さんは、「さらにしっかりと活動しなければならないという責任を感じています。先輩が築いてきた地域の皆さんとの連携や根付かせてきたプログラムを大切にしながら、活動をステップアップさせたい」と語りました。



サイエンスコミュニケーター

湘南

社会貢献

実験を通して科学の楽しさや魅力を伝える

達成目標 理科離れを防ぎ、科学の楽しさを通して人と人とのつながりをつくる

学びのテーマ チーム間での連携を強め企画の運営方法を学ぶ

| | | | | |
|------------|------|------|--------------|----|
| プロジェクトリーダー | 小川沙羅 | 工学部 | 応用化学科 | 2年 |
| サブリーダー | 仲程望生 | 教養学部 | 人間環境学科自然環境課程 | 2年 |
| 広報リーダー | 佐藤愛弓 | 理学部 | 化学科 | 2年 |
| 会 計 | 迫田玲奈 | 理学部 | 化学科 | 2年 |

参加人数 61名

5月3日

「多摩センターこどもまつり2016」で真空実験ショーを実施

■ エリアベネッセ多摩センター(東京都多摩市)

「ガーデンシティ多摩センターこどもまつり2016」(主催:多摩センター地区連絡協議会)と合同で開催されたもので、本プロジェクトは“科学の楽しさ”を伝えようと、2014年から毎年出展。今回は“環境にやさしいエコ実験”と題し、ブースに365名の親子連れが来場しました。はじめにお菓子の入った袋を真空にする実験を披露しながら、真空の原理を説明。続けて真空パックや魔法瓶など、真空を応用した身近な技術について解説。空気を抜くことで食材の酸化を防ぎ、より食材を長持ちさせることや、魔法瓶には真空の空間があるため、熱が伝わりにくく中身の温度を保つことができることを紹介しました。また、フリーズドライ製法にも真空の技術が使われていることを伝えました。



6月18日

「こども食堂」で実験ショーを披露

■ だがしあたいエスマン(神奈川県相模原市)

こども食堂とは、家庭の事情で食事の栄養が偏る、1人で食事を取ることが多いなどといった子どもと保護者を対象に、低価格で食事を提供する取り組みの一つ。本プロジェクトは、イベントを主催するおださがこどもネットより依頼を受け、“科学の楽しさを通して人と人とのつながりをつくる”ことを目的に参加しました。当日は、小学校1～4年生の子どもと保護者15名が参加。メンバーは、子どもたちが実験に興味を持てるよう、馴染みのあるお菓子やジュースを使った真空実験をしました。また、実験に関するクイズを普段よりも多めに出席したり、実験を始めるタイミングで全員で声を合わせることで、参加者とのコミュニケーションを図りました。



5月4・5日

「子ども科学館フェスティバル2016」で実験ショーを実施

■ 伊勢原市立子ども科学館(神奈川県伊勢原市)

“科学の面白さを通じて地域の方々とのつながりをつくる”ことを目的に、同館が主催する本イベントに出展。『ブラックウォール』と『クルクルステンドグラス』の実験を行い、2日間合わせて842名が参加しました。『ブラックウォール』は、偏光板を筒型にしたもので、実際には存在しない壁が現れる不思議な現象を見ることができ、『クルクルステンドグラス』は、2枚の偏光板とセロハンテープを組み合わせることでステンドグラスのように様々な色や模様が見えます。メンバーは、これまでの課題であった科学のメカニズムの説明について、より参加者が理解しやすいように、今回から持ち手サイズのパネルや模型などを制作。事後アンケートでは8割以上の方に「説明が分かりやすかった」と回答をもらうことができました。



8月6日

「中高生のための理科体験授業」に協力

■ 湘南キャンパス18号館

学園の附属中等部2、3年生と高等学校1年生を対象に、“大学での体験授業や現役学生・大学院生との交流を通して理工系の楽しさに触れ、進学意欲を高めてもらう”ことを目的として本学のイベントに参加。付属の中等部4校、高等学校6校から45名の生徒が来場しました。本プロジェクト主催の科学教室では、中高生が科学に親しみを持てるよう“食の栄養と消化について”をテーマに、メンバーが講師となって、アルギン酸とカルシウムを溶かした水溶液で『人工イクラ』を作る実験や、大根おろし・シメジを使用した酵素の実験、スチールウールを用いたビタミンCについての講義を行いました。イベント後のアンケートでは、参加者の8割以上が「とても満足」と高い評価をもらいました。



8月28日

「世界一行きたい科学広場in湘南2016 summer」を開催

■ 湘南キャンパス2号館、14号館

“身近なものを使って子どもたちに科学の魅力を体験してもらう”ことを目的として、地域の幼児や小中学生、高校生とその保護者を対象に本学が各地で開催しているもので、今年度初めて本プロジェクトが企画・運営を担当。当日は、30名のメンバーが科学実験ショーや体験プログラムを行い、子どもや保護者ら530名が来場しました。14号館では、本プロジェクトのほか、ライトパワープロジェクト、Tokai Dream Space Team、ポリヘドロン工作隊、工学部の研究室、情報教育センターなどが出展。真空実験や燃料電池の作成、多面体作りといった多彩な企画で来場者を迎えました。各ブースでは学生や教員が実験の目的や方法について説明し、子どもたちは目を輝かせてプログラムに取り組んでいました。また、2号館では本学教育開発研究センターの滝川洋二教授が「実におもしろい実験ショー」を実施しました。



11月4～6日

「サイエンスアゴラ」に初出展

■ 日本科学未来館(東京都江東区)

国立研究開発法人科学技術振興機構が主催する本イベントに、“昨日何食べた?～ビタミンCと炭水化物のお話～”と題したブースを出展。プロジェクトメンバー15名はスチールウールを用いてビタミンCの抗酸化作用を調べる実験や、大根に含まれる消化酵素を用いて炭水化物の分解実験を行い、ブースには144名が来場しました。



11月12日

「PTA収穫祭」に初出展

■ 秦野市立北小学校(神奈川県秦野市)

農業の学習を通して児童がコミュニケーションを深められるよう毎年開催されているもので、秦野市立北小学校の依頼により理科実験のブースを出展しました。会場には、児童161名、保護者12名が来場。12名のメンバーが、箱の中を覗くと虹色に輝く『分光器』と、アルギン酸ナトリウム水溶液と塩化カルシウム水溶液を使用した『人工イクラ』の実験を実施しました。



10月22日

「第24回大根ふれあい祭り」に出展

■ 秦野市立大根小学校(神奈川県秦野市)

大根地区社会福祉協議会が主催する本イベントへ、“来場者へ理科実験の面白さを伝える”ことを目的に出展。当日は児童43名、保護者23名の計66名が来場しました。10名のメンバーはスライムの工作実験のブースを出展。参加者に赤、青、黄色の3色の中から好きな色を選んでもらいながら理科実験をレクチャーしました。何種類かの色を混ぜ合わせてオリジナルのスライムを作ったり、目の前で起きる化学反応に、子どもだけでなく保護者の方も興味を示していました。メンバーは、偏光板で作った『ブラックウォール』やペットボトルを使用した『雲の実験』の実験道具を持参し、屋外でもパフォーマンス。広報リーダーの佐藤愛弓さん(理学部化学科2年次生)は「スライムの工作実験に参加した多くが私たちに楽しそうに話かけてくれたことが印象的でした。活動を通して、子どもたちや地域の方々との交流が生まれることを嬉しく思います。」と語りました。



11月19日

「子ども大学ひらつか奏アカデミー」に初出展

■ 湘南キャンパス18号館

平塚市民・大学交流委員会(文化・生活学習部会)事業の主催で、“子どもの知的好奇心や感性を育てる”ことを目的に、教職員や学生が講師となり、小学生が楽しめる講座を実施。当日は小学生58名とメンバー8名が参加し、光に関する実験ショーと工作実験を行いました。会場を暗くして行った実験ショーでは、LEDを用いた光通信の実験や、ジュースに含まれる香料がブラックライトの出す紫外線に反応し発光する実験を披露。また、箱の中を覗くと虹色に輝く『分光器』の工作実験も行いました。広報リーダーの佐藤愛弓さん(理学部化学科2年次生)は「科学をより身近に感じられるよう、様々な光源を用意し、紹介した技術や現象が日常生活のどのようところに使われているのか織り交ぜて説明しました。参加者は興味深そうに、そして楽しそうに実験を見つめていたのが印象的でした」と語りました。



3.11生活復興支援プロジェクト

湘南

社会貢献

被災地の“持続可能な復興”を支援

達成目標 現地の今のニーズに応えた企画を行う

学びのテーマ 自分の役割を理解し、工程管理について学ぶ

| | | | | |
|------------|-------|--------|------|----------|
| プロジェクトリーダー | 武田宗一郎 | 工学部 | 建築学科 | 2年 |
| サブリーダー | 澤田侑大 | 工学部 | 建築学科 | 2年 |
| 広報リーダー | 滝澤慶幸 | 政治経済学部 | 政治学科 | 3年 |
| 会計 | 大村絵理 | 法学部 | 法律学科 | 2年 |
| | | | | 参加人数 60名 |

6月12日
「今だからできること
～復興の先を見据えて～」に初参加
■ 3331 Arts Chiyoda(東京都千代田区)

復興庁が、東日本大震災からの復興を目標に活動する学生団体を集めて毎年実施している催しで、“被災地の情報を共有し、ボランティア活動のあり方について考える”ことを目的としています。12大学、学生約30名が参加。はじめに本プロジェクトの活動内容を報告。続いて行われたワークショップでは、被災地の復興と地域活性化について話し合い、これから取り組むべき課題と解決策をメンバー3名が発表しました。



7月9・10日
「第66回湘南ひらつか七夕まつり」に初参加
■ 神奈川県平塚市内全域

地域とのつながりから今回初めて同実行委員会が主催する本イベントに参加。平塚駅近くの見附台公園に「東北物産展」と復興状況を発信する「復興ステーション」のブースを構えました。2日間で246名が本プロジェクトのブースに来場。東北物産展では総額107,219円を売り上げました。また、大船渡市泊地区より提供していただいた竹に七夕飾りを施し、来場者へ短冊に東日本大震災の被災地へメッセージをしたためてもらいました。



8月5日～9月5日、2017年 2月5日
「どんぐりハウス」を移設
■ 相川・小指地区(宮城県石巻市)

東日本大震災の津波により倒壊した地域の公民館の代用として、本プロジェクトが2011年6月に『どんぐりハウス』を建設。地区会議や地域の祭り会場など地域住民の交流の場として活用されてきました。メンバーは、破損した部品の修理や木材のやすりがけを行い、その後、追波湾にほど近い移設先に床、壁、ロフト、屋根の順に建設作業を行いました。2月5日には、相川・小指地区のお祭り「春祈禱」で地域住民らと完成を祝いました。



8月6日
「電子工作教室」を開催
■ 泊地区公民館(岩手県大船渡市)

ユニークプロジェクト・きらきら実験教室との共催で、“地域の人々との交流”を目的に実施。今年で6回目を迎えました。太陽光パネルの蓄電で夜道を照らす木製の看板を、地域の小学生9名と共に制作し、津波到達ラインと高台を結ぶ『結の道』の『みなと口』に設置しました。また、バーベキュー大会も開催し、参加者との親睦をさらに深めました。



8月17日
石巻市長へ表敬訪問
■ 石巻市役所(宮城県石巻市)

平塚市(本学と提携)と災害協定を結んでいる石巻市に対して、“本プロジェクトの5年間の歩み、そして活動拠点である相川・小指地区(石巻市)での取り組みを報告する”ことを目的に、本センター長の木村英樹教授とプロジェクトメンバー4名が、石巻市の亀山市長を訪問。メンバーは、解体・移設中の『どんぐりハウス』のことをはじめ、これまでのプロジェクト活動を伝えました。



11月13日
「結の道・第一期開通式」を開催
■ 三陸町起喜来泊地区(岩手県大船渡市)

“震災による防災集団移転促進事業で高台と低地に分断されてしまった住宅地間に新しく遊歩道を整備し、両地を結ぶ”ことを目的に、2014年8月から計画を進めてきました。式では泊区の林明区長、アドバイザーの杉本洋文教授(工学部建築学科)、リーダーの武田宗一郎さん(工学部建築学科2年次生)が挨拶。終了後には、地域の特産物を生かした料理で親睦を深める「食まつり」も開催しました。



キャンパスストリートプロジェクト

湘南

地域活性

より魅力ある街づくりを提案

達成目標 地域住民と学生の交流からこの街を知るきっかけの場を創出する

学びのテーマ 伝えたい情報を正確に相手に伝える力を学ぶ

| | | | | |
|------------|-------|--------|--------------|----------|
| プロジェクトリーダー | 福田尚史 | 工学部 | 機械工学科 | 3年 |
| サブリーダー | 有田健太郎 | 情報理工学部 | 情報科学科 | 2年 |
| サブリーダー | 木村春奈 | 文学部 | 広域メディア学科 | 2年 |
| 広報リーダー | 中村遼太郎 | 教養学部 | 人間環境学科社会環境課程 | 2年 |
| 会計 | 関口雄哉 | 法学部 | 法律学科 | 2年 |
| | | | | 参加人数 54名 |

5月10日
幼稚園で紙芝居を初披露
■ 秦野市立大根幼稚園(神奈川県秦野市)

“子どもたちが地域を知るきっかけとなる”ことを目的に、秦野市にまつわる体験イベントを、南矢名第一長老会と共に初開催しました。園児40名を対象に、プロジェクトメンバーが手作りの紙芝居『なおくん はだのっこになる』を披露。続いて南矢名第一長老会の方々による昔の遊びのレクチャーが行われました。メンバーもスタッフとして加わり、紙芝居の中で紹介した紙風船やあやとり、紙飛行機の遊び方を園児に伝えました。



4月14日～7月5日、10月4日～12月20日
「学内パン販売」を実施
■ 湘南キャンパス 1号館前・14号館前

社会福祉法人かながわ共同会秦野精華園と協力して実施。春セメスターでは4種類の新品を販売し、惣菜パンの『ミートピザ』は毎回完売するほどでした。秋セメスターは、新たにポイントカードを作成し、来店すると精華園で特典が得られる企画を行いました。今年度は41回販売を行い、総売り上げが423,940円、平均売り上げが10,340円となりました。なお、「学内パン販売」は今年度で終了となります。



6月28～30日
「TOKAI音食WEEK2016」を開催
■ 湘南キャンパス

“みっけ!!～交流からこの街の魅力を知らう～”をテーマに開催し、約1,000名が来場。噴水付近に特設したステージでは、昼の部と夜の部の1日2回、全6回のライブを実施。計11団体が会場を盛り上げました。8号館前の通りには、韓国、タイ、中華料理など、キャンパス周辺の10店舗が出店。また秦野精華園では手作りパンを販売した他、「アイシングクッキーを作ってみよう!」と題した体験イベントも初めて行いました。



10月9日、2017年3月5日
「東海大学駅前 花壇植栽～花でつながる秦野市と東海大学～」を実施
■ 小田急線東海大学前駅(神奈川県秦野市)

“地域と本学のつながりを発信する”ことを目的に、花壇のデザイン提案や、東海大学駅前商店会協同組合の方々との花の植え替えを実施。10月9日は、商店会の方18名、メンバー10名が参加し、黄色と紫色のパンジーを植えました。また、駅を利用されている方に向けて本企画を紹介する看板を設置しました。3月5日は商店会の方や地域の子もたち30名とメンバー5名が参加し、オレンジと黄色のパンジーを植えました。



12月5～26日
「クリスマスU-night2016」を開催
■ 小田急線東海大学前駅前広場(神奈川県秦野市)

駅前にクリスマスのシンボルとしてイルミネーションを施したツリーを設置し、地域のクリスマスを演出。11回目の開催となった今年は、“サンタからのプレゼント～魅力と交流届けます～”をテーマに企画・運営しました。12月5日には点灯式を開催し、地域の方々や学生ら約50名が参加。東海大学駅前商店会協同組合理事長の山口尚男氏、日の出自治会会長の和田正治氏の挨拶の後、メンバーの合図で、参加者全員でカウントダウン。2,400個のLED電球が散りばめられた高さ5mのツリーが金と銀に彩られ、ゴスペルやジャグリングなどのパフォーマンスが披露されました。12月10日、18日は、サイエンスコミュニケーターや環境キャラバン隊と共にクリスマスオーナメント作りのワークショップを開催。のべ280名ほどの親子連れが来場しました。



病院ボランティアプロジェクト

湘南

社会貢献

病院と社会をつなぐ架け橋となる

達成目標 企画を通して患者さんとのコミュニケーションを増やし、相手の立場を考えられるようになる

学びのテーマ 患者さんとボランティアの立場を考えることを学ぶ

| | | | | |
|------------|------|-----|-------|----|
| プロジェクトリーダー | 佐藤主樹 | 工学部 | 精密工学科 | 2年 |
| サブリーダー | 中村蒼平 | 文学部 | 文明学科 | 2年 |
| サブリーダー | 近藤美鈴 | 工学部 | 建築学科 | 2年 |
| 広報リーダー | 近藤美鈴 | 工学部 | 建築学科 | 2年 |
| 会 計 | 岩本直紀 | 工学部 | 精密工学科 | 2年 |
| 参加人数 50名 | | | | |

9月3日、12月4日

「癒しのイベント」を開催

■ 医学部付属大磯病院(神奈川県中郡大磯町)

“入院中の患者さんやその家族らに楽しんでもらう”ことを目的に、季節にちなんだコンサートを開催。9月3日は、「大磯発 ハワイ行き～見て、聞いて、体感するコンサート～」を企画・運営し、患者さんとその家族、病院関係者61名が来場しました。フラダンスチームの「Hoaloha Hula Studio」とウクレレユニットの「RIKE'S UKE」の2団体に出演いただき、メンバーは患者さんの体調に配慮しながら、コンサートの司会進行や入退場の誘導を行いました。12月4日は、「心温まる冬～音色に包まれるコンサート～」と題し、伊勢原市や秦野市、厚木市を中心に活動しているミュージックベルの演奏グループ「ミルクィウェイ」と、伊勢原キャンパスの学生による「アンサンブルサークル」が出演。約110名が来場しました。ミルクィウェイは、四季の童謡メロデーや「この広い野原いっぱい」「365歩のマーチ」などを披露。アンサンブルサークルは、フルートとクラリネット、サクソで、クリスマスソングなどを演奏しました。



6月6日～2017年 1月31日

「病棟ボランティア活動」を実施

■ 本学医学部付属病院(神奈川県伊勢原市)

計65回のボランティア活動を行い、のべ110名のプロジェクトメンバーが参加。メンバーは、「聞き役としてのコミュニケーション」を念頭に、気持ちの良い挨拶を全ての患者さんにすることや、誰にでも分かりやすい言葉で話すことを心がけ、総合内科病棟、脳神経外科病棟、形成外科病棟での食事介助や配膳下膳をはじめ、小児病棟では、乳児にミルクを与えたり、食事の付き添いを行いました。



2017年 2月18日

「第14回医療セミナー食べて健康～生活習慣病を予防しよう～」を開催

■ 伊勢原キャンパス松前記念講堂

“いざという時に備えて、病気に関する知識を身につけてもらう”ことを目的にセミナーを開催し、近隣住民や学生ら26名が参加。日本成人病予防協会認定講師の和田奈美佳氏をお迎えし、生活習慣病のリスクや食生活の正しい知識、食事を通じた生活習慣病の予防法についてご講演いただきました。事後アンケートでは、8割以上の参加者から「満足した」といった回答がありました。



7月15日、9月30日、11月29日

「絵本の読み聞かせ会」を実施

■ 秦野市立大根幼稚園(神奈川県秦野市)

“医療や健康について子どもたちにわかりやすく伝える”ことを目的に、保護者の迎えを待つ園児を対象にこれまでプロジェクトで手がけた絵本「チクッはがんばりのしるし～ちゅうしゃががんばるぞ」や「やさいきちんとたべれるかな?」をはじめ、歯みがき、手洗いの大切さを伝える絵本の読み聞かせを行い、のべ26名の園児が参加しました。



2017年 3月4日

絵本を2冊同時発刊

■ ちどりこどもクリニック(神奈川県厚木市)

“子どもたちに健康や医療についてわかりやすく伝える”ことを目的に、「みんなの げんきの ひみつは なあに?」(イラスト:小林諒美さん(教養学部芸術学科デザイン学課程2年次生))、「ハナちゃんどてんてき」(イラスト:ワタリナチャリヤ バンディタさん(同課程2年次生))を発刊しました。3月4日には、ちどりこどもクリニックで「贈呈式」を行い、来場した子どもたち19名に読み聞かせを行いました。



Tokai Formula Club

湘南

ものづくり

車体製作技術だけでなく、人間力もアップ

達成目標 第14回全日本学生フォーミュラ大会総合優勝

学びのテーマ 社会的実践力の獲得

| | | | | |
|------------|-------|-----|---------|----|
| プロジェクトリーダー | 小川和輝 | 工学部 | 動力機械工学科 | 3年 |
| サブリーダー | 津久井滉生 | 工学部 | 動力機械工学科 | 3年 |
| サブリーダー | 大橋勇太 | 工学部 | 動力機械工学科 | 2年 |
| 広報リーダー | 宮尾皇奈 | 工学部 | 動力機械工学科 | 3年 |
| 会 計 | 下田大 | 工学部 | 精密工学科 | 3年 |
| 参加人数 83名 | | | | |

6月5日、11月27日

「SHCCミーティングat大磯ロングビーチ」に出展

■ 大磯ロングビーチ(神奈川県中郡大磯町)

湘南ヒストリックカークラブが主催する本イベントに、6月5日は、9名のメンバーがイベントのサポートとして参加。プロジェクト紹介のブースも出展し、来場者に「第14回全日本学生フォーミュラ大会」についての意込みを伝えました。11月27日は、12名のメンバーが参加。イベントのサポートと共に、フォーミュラカー「TF2016」での「デモ走行」を計4回実施しました。



8月5・6日

「キッズエンジニア2016」に出展

■ パシフィック横浜(神奈川県横浜市)

公益社団法人自動車技術会が主催する、ものづくりの楽しさを子どもたちに伝える体験型学習イベントで、2014年度に製作した「TF2014」を展示。2日間で500名がブースに来場しました。メンバーは、体験コーナーや競技についての説明、全国大会に向けて毎年フォーミュラカー製作を行っていることなどを紹介しました。



9月6～10日

「第14回全日本学生フォーミュラ大会」に出展

■ 小笠山総合運動公園エコパ(静岡県袋井市)

“総合優勝”を目標に、「TF2016」で大会に出場。静的審査のコスト種目では、昨年の64位を大きく上回る23位となりました。動的審査の「スキッドパッド」では9位でしたが、得点配分が最も高い「エンデュランス」において、電装系統のトラブルによりコースを完走することができず、全92チーム中総合38位という結果となりました。



東海大学学生ロケットプロジェクト

湘南

ものづくり

ハイブリッドロケットを研究開発

達成目標 ロケットの高度化及び、それを持続・発展可能な開発体制の樹立

学びのテーマ より効率的な、ロケットの多人数開発の実践

| | | | |
|------------|------|-----|-----------------|
| プロジェクトリーダー | 小川誠仁 | 工学部 | 航空宇宙学科航空宇宙学専攻4年 |
| サブリーダー | 濃沼悠斗 | 工学部 | 航空宇宙学科航空宇宙学専攻4年 |
| サブリーダー | 田中舜己 | 工学部 | 航空宇宙学科航空宇宙学専攻4年 |
| 広報リーダー | 谷口友望 | 工学部 | 航空宇宙学科航空宇宙学専攻3年 |
| 会 計 | 八木功貴 | 工学部 | 航空宇宙学科航空宇宙学専攻4年 |
| 参加人数 61名 | | | |

8月18～25日

「第12回能代宇宙イベント」に出展

■ 落合浜海水浴場跡地(秋田県能代市)

“音速を超えたときにロケットにどのような影響が出るのかを調査する”ことを目的にハイブリッドロケット42号機の打ち上げ実験を実施。上空へ打ちあがったものの、海上に落下。詳細なデータを得られませんでした。



12月27日

「トワイライト2525A講習会」を開催

■ 湘南キャンパス実験6棟、ものづくり館

高校生33名を対象に、無線マイコンの講習会をメンバー8名が講師となり実施し、基盤の解析技術などを解説。モノワイヤレス株式会社の方々も技術アドバイザーとしてご協力いただきました。



10月22日～12月18日

特別展「知られざる平塚のロケット開発」に出展

■ 平塚市博物館(神奈川県平塚市)

“平塚を舞台に行われていたロケット開発の歴史を紐解き、多くの人にその歴史を伝える”ことを目的に開催された企画展に出展。来場者数は10,837名と賑わい、12月18日には講演会も実施しました。



2017年 3月2日

ハイブリッドロケット打ち上げ実験

■ 大樹町多目的航空公園(北海道広尾郡大樹町)

これまでで最軽量となる新型バルブシステムを搭載したハイブリッドロケット44号機を打ち上げ、高度約300mに到達。本実験の様子は地元のTVや新聞にも取り上げられました。



スポーツ社会貢献プロジェクト

湘南

社会貢献

スポーツ社会貢献の新しい形を発信

達成目標 スポーツ社会の発展に貢献する

学びのテーマ スポーツの多様性を学ぶ

| | | | | |
|------------|-------|------|-------------------|----------|
| プロジェクトリーダー | 齋藤愛 | 体育学部 | スポーツ・レジャーマネジメント学科 | 3年 |
| サブリーダー | 藤本裕和 | 体育学部 | スポーツ・レジャーマネジメント学科 | 3年 |
| サブリーダー | 金里優 | 体育学部 | スポーツ・レジャーマネジメント学科 | 3年 |
| 広報リーダー | 小久保良亮 | 工学部 | 材料科学科 | 3年 |
| 会計 | 山崎龍翼 | 体育学部 | 生涯スポーツ学科 | 3年 |
| 合計 | | | | 参加人数 69名 |

5月5日
「38回秦野子どもまつり」に参加
 ■ 秦野市中央運動公園陸上競技場(神奈川県秦野市)

“スポーツの楽しさを感じてもらい、家族間のコミュニケーションを促進する”ことを目的として秦野市子ども健康部子ども育成課の主催イベントにスポーツブースを出展。会場には多くの親子連れや小学生が来場しました。本プロジェクトでは、フリスビーを網でキャッチする『フラインゲット』をはじめ、6種類のブースを用意。ほかにも、メンバーが背負った籠に玉を投げ入れる『おっかけ玉入れ』や、キャピラ状の段ボールに入って速さを競う『コロコロリレー』も行いました。



5月21日・11月12日
「ノルディックウォーキング教室」を実施
 ■ 平塚市西部福祉会館(神奈川県平塚市)

“ウォーキングを通じた平塚市在住の高齢者との交流”を目的として、同館より依頼を受け、平塚市在住で60歳以上の方を対象に実施。5月21日は、快晴の中、10名が参加。JNWA公認インストラクターの資格を持った学生を含む、プロジェクトメンバー8名が指導にあたりました。11月12日は13名が参加。メンバー10名が歩き方のコツを教え、ボールを使用した準備体操をしたのち、前回と同様に、往復4kmの道のりを約2時間かけて歩きました。



6月25日
「いきいき柿生教室」を初開催
 ■ 柿生駅前町内会会館(神奈川県川崎市)

“みんなで作り出す笑顔の空間”をテーマに、高齢者でも可能な体操や遊びを通じた運動を行いました。当日は12名が来場。前半は本会場で体操教室を開催している前川由美子氏による有酸素運動と筋力トレーニングを40分ほど行いました。後半はメンバーが講師になり、椅子に座ったままでも行える運動として、手をリズムよく動かす遊びや、新聞紙玉入れなどを行いました。最後に、全員でスプーンを使用した『ピンポン玉リレー』を行いました。



10月1日、8日、29日
子どもの家でイベントを実施
 ■ みなと子どもの家、大野子どもの家、山城子どもの家(神奈川県平塚市)

平塚市より依頼を受け“身体を動かす楽しさを知ってもらう”ことを目的に、楽しい遊びを児童に紹介。10月1日はみなと子どもの家で、児童26名・メンバー13名が参加。『宝探しゲーム』や『お絵かきリレー』などに挑みました。10月8日は大野子どもの家で開催し、児童18名・保護者10名・メンバー13名が参加。10月29日の山城子どもの家は今回が初開催。児童30名・保護者10名・メンバー14名が参加し、『人間知恵の輪』、『新聞ピリピリミュージック』などを行いました。



10月2日
「第5回ニコニコ教室」を実施
 ■ 平塚市西部福祉会館(神奈川県平塚市)

“親子で楽しめる運動遊びを提供する”ことを目的として、同館より依頼を受けて開催。1~5歳の子供24名と保護者29名が参加。メンバーはダンスや動物のものまねゲーム、お菓子競争など4種目の運動を紹介しました。特に、『アイアイ』や『どんぐりころころ』などの童謡の歌詞に合わせて真似をする『リトミック』では、親子でペアになり、互いに同じ動きをして運動を楽しみました。



2017年 1月15日・21日、2月5日
「東海スポーツDAY」を開催
 ■ 湘南キャンパスサッカー場、本土屋野球場(神奈川県平塚市)、秦野市総合体育館(神奈川県秦野市)

“スポーツの楽しさを伝える”ことを目的に、1月15日に、本学男子バスケットボール部の協力のもと、小学生45名を対象に「バスケットボール教室」を開催。1月21日には、本学硬式野球部の協力による「野球教室」を行い、小学生108名が参加しました。2月5日の「サッカー教室」では、本学女子サッカー部によるレクチャーのもと、サッカー初心者の小学生68名がチームに分かれて試合を楽しみました。



DAN DAN DANCE & SPORTSプロジェクト

湘南

社会貢献

パフォーマンスや身体表現を通じて地域と交流

達成目標 「する(踊る)」「観る」「支える」の人たちが集い、1,000人以上で公演を創り上げる

学びのテーマ 身体表現パフォーマンスを通じて「集うこと」「繋がること」「創り出すこと」を学ぶ

| | | | | |
|------------|------|------|--------------|----------|
| プロジェクトリーダー | 門田菜々 | 教養学部 | 芸術学科美術学課程 | 2年 |
| サブリーダー | 平井貴瑛 | 教養学部 | 人間環境学科社会環境課程 | 2年 |
| 広報リーダー | 松岡南 | 文学部 | 広報メディア学科 | 2年 |
| 会計 | 大脇優里 | 工学部 | 応用化学科 | 2年 |
| 合計 | | | | 参加人数 61名 |

6月19日
オープンキャンパスでダンスを披露
 ■ 湘南キャンパス2号館前、掲示門前

“オープンキャンパスに来場した高校生に、本学の魅力や楽しさを伝える”ことを目的に実施。東海大学ジャグリングサークルSTAND、東海大学ディズニー研究会も参加し、総勢55名による大規模な『フラッシュモブ』を計8回披露しました。メンバーは、曲の途中でハイタッチを試みるなど、積極的に高校生とのコミュニケーションを心がけ、パフォーマンス後は毎回拍手をいただきました。



7月7日
「第1回ダンスワークショップ」を開催
 ■ 湘南キャンパス松前記念館講堂

“笑い”をテーマに、身体表現を楽しんでもらうことを目的としたもので、ダンサーの小笠原大輔氏を講師に招き開催。メンバーを含む本学学生や教職員、地域の高校生など35名が参加しました。はじめにペアになり“偉そうな動き”“女性らしい動き”などをリズムに合わせて行う準備体操を行ったのち、8名グループになり“自分を表す動き”を発表。最後に参加者全員で拍手やハイタッチを交わし、笑顔でワークショップを終えました。



8月6日
OSC湘南シティでイベントを初実施
 ■ OSC湘南シティ(神奈川県平塚市)

株式会社デン・コミュニケーションズの依頼により、『フラッシュモブ』と、子どもを対象にした『ダンスワークショップ』を実施。会場ステージには25名の観客が集まり、10名のプロジェクトメンバーは、オリジナルの動きを加えたラジオ体操や、メンバーの動きから何の動物か当てるクイズを行いました。また、8月11~15日はライトパワープロジェクト、8月11・12日、29日はサイエンスコミュニケーターがブースを出展しました。



9月27日
「ミニ公演2016」を開催
 ■ 湘南キャンパス松前記念館講堂

“ダンスを通して学生同士の交流を図り、身体表現の喜びを感じてもらう”ことを目的として開催。本学学生や教職員45名が来場しメンバー34名が会場スタッフとして運営を務めました。本学のジャグリングサークル「STAND」や社交舞踏研究会、フリースタイルフットボール「NEO」、よさこい「響」、本プロジェクトを代表して大浦朱生さん(体育学部体育学科1年次生)の創作ダンスなどのパフォーマンスが行われました。



11月30日
「心から楽しむ ヨガワークショップ」を開催
 ■ 湘南キャンパス音楽ホール

“身体表現の視点からヨガを体験し、共有する”ことを目的に、フリーのヨガインストラクターの中曽根きよみ氏を講師に招き、地域の方々や本学教職員、プロジェクトメンバーの総勢24名が参加しました。はじめに体幹をまっすぐにするための姿勢の取り方を教わりました。その後、四つんばいになり、背筋を伸ばす「猫のポーズ」や、両手を広げて片足を曲げる「英雄のポーズ」など、参加者は、多彩なポーズをとるヨガの世界にふれました。



2017年 1月22日
「第6回公演」を開催
 ■ 湘南キャンパス2号館大ホール

“身体表現の楽しさや所属団体、世代、ダンスのジャンルを超えて楽しむ”ことを目的に開催し、地元住民ら208名が来場。本学体育学部のダンスチームや厚木市、平塚市などのダンススクールに通う小・中学生、神奈川県内のダンス部所属の高校生ら13組がパフォーマンスを披露しました。プロダンサーの井田亜彩実氏もゲストとして登場。エンディングでは、本プロジェクトが考案した振り付けを、観客と共に楽しみました。



環境キャラバン隊

湘南

環境・動植物保護

エコ教室や出前授業を開催

達成目標 環境教室の参加者1,000人を目指す

学びのテーマ 活動を通して工程管理する方法を学ぶ

| | | | | |
|------------|-------|------|--------------|----------|
| プロジェクトリーダー | 木村勇輝 | 工学部 | 材料科学科 | 3年 |
| サブリーダー | 江崎琢哉 | 文学部 | 文明学科 | 3年 |
| サブリーダー | 難波龍太郎 | 工学部 | 材料科学科 | 3年 |
| 広報リーダー | 染谷侑 | 教養学部 | 人間環境学科自然環境課程 | 3年 |
| 会計 | 伊東玲奈 | 教養学部 | 人間環境学科自然環境課程 | 3年 |
| 合計 | | | | 参加人数 50名 |

2016年3月3日、2017年3月6日

「春季キャラバン」を実施

■ 本学付属静岡翔洋小学校(静岡県静岡市)

“小学生に環境問題を楽しみ理解してもらう”ことを目的として、3月3日には5年生約20名に、地球環境を守るヒーロー『エコウェブ』が「ゴミ問題」についてレクチャーしました。続いて、ダンボールや空き缶などのゴミを再利用したオリジナルスタンプを全員で製作。大きな一枚の布にスタンプを擦しながらエコへの理解を深めました。翌年の3月6日にも訪問し、“水と油”について天ぷら油を再利用した『エコキャンドル作り』を行いました。



5月28日

「フードロス削減料理会」を開催

■ 湘南キャンパス9号館・工学部電気電子工学科キッチンスタジオ

“まだ食べられる食品を廃棄する「フードロス」について考えるとともに、食材を無駄なく食べきるためのコツを学んでもらう”ことを目的に“～一人暮らしの自炊でも食材を余らせないコツを伝授!”と題して開催。本学の学生16名が参加しました。フードロスに関する勉強会や家庭で残りがちな食パンを使った料理実習、グループディスカッションのち、自治体や企業が実施しているフードロスを減らす取り組みを紹介しました。



7月16日、11月26日

「環境キャラバン隊とごみ拾いボランティア!」を初開催

■ 湘南キャンパス周辺地域

環境美化を推進するためのゴミ拾い企画としてプロジェクトメンバーと有志の学生計9名が参加しました。午前の部は、東海大学前駅から湘南キャンパス北門までの道のりや、キャンパス内の1/5にわたる敷地のゴミ拾いを行いました。午後の部はメンバーが講師となり、ゴミが捨てられることによって起きる問題などについて説明。その後、“これらのゴミ問題に対して自分たちができる対策”をテーマにディスカッションを行いました。



8月23日

「夏休み親子企画2016」に出展

■ ひらつか市民活動センター(神奈川県平塚市)

生活協同組合ユーコープ西湘2エリア会の主催によるもので、子どもと保護者25名が来場。3名のメンバーが、洗剤を使わなくても汚れが落ちやすい『アクリルたわし』の工作ブースと、豆電球とLEDの発電量を比較する『手回し発電機』のブースを出展しました。アクリルたわしは、プロジェクトで制作していた従来のものと比較して、より大きく使いやすいものに改良し、参加者に「ぜひ、おうちで使ってね」と伝えました。



9月8日

「夏季キャラバン」を実施

■ 秦野市立広畑小学校(神奈川県秦野市)

“ゴミの分別”をテーマにした環境教室をメンバー5名で実施し、30名の小学4年生が集まりました。はじめに、メンバーが「『エコ(eco)』という言葉には、『環境に配慮されている(ecology)』と『経済(economy)』の2つの意味があります」と説明。続いて、「限りある資源を長く使うために、ゴミの分別やリサイクルを心掛けましょう」と参加者に伝えました。その後、おさらいとしてリサイクルマークを覚えるゲームを行いました。



10月29日

「ハロウィンin多摩センター2016」に出展

■ 多摩センター駅周辺(東京都多摩市)

株式会社ベネッセ・コーポレーションの依頼を受け、ハロウィンを演出したブースを出展。628名の親子連れが来場し、魔法使い風の帽子を被ったメンバー5名は、洗剤のいらぬ『アクリルたわし』の工作教室や、豆電球とLED電球のエネルギー消費の違いを伝える手作りの装置『手回し発電機』を使って、エコの大切さを来場者に伝えました。広報リーダーの染谷侑さん(教養学部人間環境学科3年次生)は「保護者の方が真剣に耳を傾けていただけたのが特に印象的でした」と語りました。



Takanawa共育プロジェクト

高輪

地域活性

高輪地区の活性化を目指して

達成目標 大学と地域の一体化

学びのテーマ 地域貢献から工程管理を学ぶ

| | | | | |
|------------|------|--------|---------------|----------|
| プロジェクトリーダー | 松田功作 | 情報通信学部 | 組み込みソフトウェア工学科 | 3年 |
| サブリーダー | 川原浩生 | 情報通信学部 | 経営システム工学科 | 2年 |
| サブリーダー | 佐藤卓樹 | 情報通信学部 | 情報メディア学科 | 2年 |
| 広報リーダー | 森本実沙 | 情報通信学部 | 組み込みソフトウェア工学科 | 3年 |
| 会計 | 薬師寺創 | 情報通信学部 | 経営システム工学科 | 2年 |
| 合計 | | | | 参加人数 43名 |

4月～2017年2月

地域に向けた定期的な活動を実施

■ 高輪キャンパス周辺

長期休暇を除く毎月、高輪警察署と合同で「清掃活動」を実施。また、硬式テニス部と協力し「テニススクール」も毎月開催。“地域の共有財産である道路・公園等の緑化活動や清掃等を行うことにより、愛着を持てる街にすること”を目的として、地域のボランティア団体「桂坂を花いっぱいにする会」が主催の「桂坂の花植え・花配り」に参加。1年を通じて、地域住民と本学学生の交流を深めるための様々な活動を行いました。



5月4・5日

地元商店会と「のれん市」を開催

■ 高輪キャンパス

近隣の商店街「メリーロード高輪」が、高輪地区にある覚林寺の「清正公大祭」に合わせて実施している恒例のイベントです。両日で計30名のメンバーが、会場設営や交通整理、ゴミ回収などの清掃活動で運営をサポートしました。ブースでは、昨年度に続き東日本大震災復興支援活動を通して交流を深めてきた宮城県気仙沼市の物産展を開催。「気仙沼ホルモン」の屋台も出店し、両日で500名近くの来場者がありました。



5月14・15日

「浅草三社祭」に参加

■ 浅草神社(東京都台東区)

地域の祭りや建学祭などのイベントで親交を深めてきた高輪地区のみこし同好会の協力により、今年も参加。両日とも浅草神社の氏子町会のひとつである千束二丁目町会のみこしや、浅草神社の本社みこし「三ノ宮」を担いで練り歩きました。リーダーの松田功作さん(情報通信学部組み込みソフトウェア工学科3年次生)は、「この経験を11月に開催される建学祭などで生かしたい」と語りました。



7月31日、8月20・21日、8月27・28日、9月10・11日

高輪地区の夏祭りをサポート

■ 高輪キャンパス周辺

7月31日の「TAKANAWA盆ダンスフェスティバル」、8月20・21日の「高野山別院盆踊り」に参加。8月27・28日は「高輪泉岳寺商店会夏祭り盆踊り大会」と「麻布十番納涼まつり」の2つのイベントをサポート。9月10・11日は「高輪神社例大祭」に参加し、みこしを担いで大学前の道路を練り歩きました。それぞれに、地域の方々をはじめ、他団体・大学の方々とも力を合わせ、お祭りを支援しました。



10月8・9日

「みなと区民まつり」に参加

■ 芝公園・増上寺周辺(東京都港区)

港区が主催する本イベントに、5回目の参加。来場者は約19万人にもなりました。メンバーはゴミステーションに待機し、ゴミの分別作業などを通じて運営を支援。来場者やボランティアスタッフとして参加した区民の方や他大学の学生と交流を深めました。メンバーの毛利一裕さん(情報通信学部情報メディア学科2年次生)は「地域や他大学の方々と協力して街を盛り上げることができて嬉しく思います」と語りました。



12月6日～25日

「クリスマスイルミネーション」を開催

■ 高輪キャンパス1号館、2号館、学生食堂コモドール

ディズニー映画の世界観をイメージした配色でキャンパス内を飾り付け。12月6日の「点灯式」ではクリスマスツリーに、To-Collaboプログラムの一環として本キャンパス内に開設した「たかなわ子どもカレッジ」で交流を続けている近隣の児童ら約30名と手づくりオーナメントを飾り付けました。12月16日には、学生食堂コモドールにて昨年度に引き続き、キャンドルつくりのワークショップやJazz研究会による演奏会も行いました。



先端技術コミュニティACOT

熊本

ものづくり

先端技術を活用したシステム開発と社会貢献

達成目標 ETロボコン全国大会での上位入賞およびWRO技術支援やセキュリティ技術などの先端技術による活動をサポートすることで地域貢献につなげる

学びのテーマ 時代に求められる技術に対する挑み力とコミュニケーション力を学ぶ

| | | | |
|------------|------|-------|--------------|
| プロジェクトリーダー | 中島祐人 | 基礎工学部 | 電気電子情報工学科 3年 |
| サブリーダー | 福島卓哉 | 基礎工学部 | 電気電子情報工学科 3年 |
| サブリーダー | 東竜次郎 | 基礎工学部 | 電気電子情報工学科 2年 |
| 広報リーダー | 松尾晴輝 | 基礎工学部 | 電気電子情報工学科 2年 |
| 会計 | 本田祐士 | 基礎工学部 | 電気電子情報工学科 2年 |
| 合計 | | | 参加人数 34名 |

6月25日、7月9日、23日、30日

「1dayサマースクール」と「ロボットサマークラブ」をサポート

■ 本学付属熊本星翔高等学校(熊本県熊本市)

“プログラミングや機体の組み立て作業を、レゴブロックで楽しく学んでもらい、自分たちで作り上げる創造力を育ててもらおう”ことを目的に、非営利団体HITOプロジェクトが主催となり計4回実施。「1dayサマースクール」に参加した中で、さらに詳しく学習したい人は「ロボットサマークラブ」に参加することができ、イベントにはのべ74名が参加。のべ29名のメンバーがロボット組み立てやプログラミングについてレクチャーしました。



8月28日

「WRO(World Robot Olympiad Japan)九州地区大会高校生部の」運営をサポート

■ 熊本キャンパス2号館

“社会に出てからも生きものづくりを通した課題解決能力を高校生に育ててもらおう”ことを目的に本学基礎工学部が主催する本大会をサポート。市販のキットを用いてロボットを製作し、プログラムによる自動制御技術を競うもので、20校から36チーム99名が参加し、メンバーは競技運営や審判、会場設営などを行いました。参加した生徒たちは、ロボットの最終調整やプログラムを細かく調整しながら競技に臨み、福岡県立香椎工業高等学校が優勝しました。



6月28日、11月8日、2017年2月21日

「ロボット教室」を実施

■ 熊本市立西原小学校(熊本県熊本市)

“小学生にプログラミング体験を通してロボットに興味を持ってもらう”ことを目的として、西原小学校4～6年生30名を対象に本学付属熊本星翔高等学校の生徒と共同で開催しました。本プロジェクトからはのべ14名が講師として参加し、教材用ロボットのLEGO® Mindstorms NXTを用いてプログラミングをレクチャー。「ロボットを3秒間、前進させる」「ぐるぐる回転させる」などの動きを入力し、実際にロボットを動かしました。



Action Marketingプロジェクト

2016年度
新規採択

熊本

地域活性

スポーツと農業を軸にビジネス&企画力を育てる

達成目標 地域スポーツイベントへの参加者数の増加、アグリビジネス分野におけるブランド化の実現、地域コミュニティと連携した地域創生、貢献活動

学びのテーマ 地域創生の軸となるビジネスへ挑む力と創造性を集めた集い力を学ぶ

| | | | | |
|------------|-------|------|------|----------|
| プロジェクトリーダー | 原田幸奈 | 経営学部 | 経営学科 | 4年 |
| サブリーダー | 小崎桃華 | 経営学部 | 経営学科 | 4年 |
| サブリーダー | 玉田真亜子 | 経営学部 | 経営学科 | 4年 |
| 広報リーダー | 前田真季 | 経営学部 | 経営学科 | 4年 |
| 会計 | 宅万明日香 | 経営学部 | 経営学科 | 4年 |
| 合計 | | | | 参加人数 62名 |

10月23日、2017年1月8日

スポーツイベントを開催

■ 熊本キャンパス松前記念サッカー場、体育館

“地域活性”を目的として開催。10月23日は、小学生4～6年生30名を対象に本キャンパス第1グラウンドで、熊本県熊本市をホームタウンとするプロサッカー клуб「ロアッソ熊本」の選手を講師として招き、「サッカー教室」を実施。メンバーを含む参加者全員がゲームに加わり、サッカーを通して年代や性別をこえた交流の場となりました。1月8日は、小学生4～6年生47名を対象に本キャンパス体育館で、熊本県を本拠地とするプロバスケットボールチーム「熊本ヴォルターズ」の選手を講師として招き、参加者は選手と共にドリブルやレイアップの練習や、対抗試合を行いました。メンバーは、参加者がスムーズに会場できるよう、立て看板を設置したり駐車場の整理を行いました。会場には、本学をより知ってもらおうと「東海大学へようこそ」と書いた垂れ幕を設置し、さらにカラフルな風船でデコレーションを施しました。また、本学の広報担当より参加者全員に、本学ロゴが入ったハンドタオルのプレゼントも行いました。サッカー教室を担当した、広報リーダーの前田真季さん(経営学部経営学科4年次生)は「ロアッソ熊本の方々のご協力もあり、イベントの告知を公式ホームページやラジオ番組などでご紹介いただき、多くの小学生にアナウンスすることができ、とても嬉しく思います。また、事後アンケート結果では、26名中25名の方が「スタッフの対応に満足」とご回答いただけたことや、会場を本学の施設にすることで、より本学のことを地域の方々を知っていただけたことが成果となりました」と語りました。



9月24日

「CISSPチャリティーレビューセミナー1DAY」をサポート

■ 熊本キャンパス新1号館

国際セキュリティプロフェッショナル認定資格制度(通称:CISSP)を運営する(ISC)²、(ISC)²Japan Chapterが、熊本地震の支援の一環として、情報セキュリティへの知識を深めるための講習会が、九州在住の市民を対象に無償で開かれました。当日は、本学学生や一般から29名が参加。メンバー4名も受講者として参加する一方、スタッフとして会場の手配や設営、来場者への案内、片付けなどを行いました。



10月2日

「ETロボコン九州北地区大会」で準優勝

■ 九州産業大学(福岡県福岡市)

ETロボコン2016実行委員会が主催する、自律走行する機体のプログラミング技術を競う大会で、メンバー4名がチーム「EECS2016」を編成し、デベロッパー部門プライマリークラスに参加。コース前半は順調に走行しましたが、ゴール直前の急カーブでラインをはみ出て障害物に接触。その結果、タイムは優勝チームを上回ったもののモデル審査ではB評価で及ばず、総合2位という結果になりました。また、より上級のアドバンスクラスにも出場し、総合5位となりました。



11月22日

「サイバー防犯ボランティア」で感謝状を授与

■ 警察庁本部庁舎(東京都千代田区)

熊本県警察本部生活安全部サイバー犯罪対策課や熊本県情報セキュリティ推進協議会と協力し、インターネット上の違法・有害情報をパトロールするなどの活動に対して贈られたもので、当日は全国9県・15大学の学生代表が集結。リーダーの中島祐人さん(基礎工学部電気電子情報工学科3年次生)が出席し、生活安全局情報技術犯罪対策課長の今村剛警視長から感謝状を受け取りました。



10月5日

「ヨガ教室」を開催

■ 熊本キャンパスコミュニティハウス

“本学教職員に日頃の疲れを癒してもらおう”ことを目的に、ストレス解消や免疫力を上げることに効果的とされるヨガを、笠井妙美講師(体育学部体育学科阿蘇教養教育センター)による指導のもと実施しました。当日は、11名の教職員が参加し、デスクワークによる肩こりや身体の疲れをほぐすメニューを行いました。参加者からは「リフレッシュできた」「年齢性別を問わないのでよかった」といった感想をいただきました。



11月1日

フリーペーパー「STYLEvol.1」を発行

“本学学生に、快活な学生生活を提案する”ことを目的に、フリーペーパーを創刊。本号では“阿蘇でしたい5つのこと”をテーマに、学生の目線から、ファッションやグルメ、温泉、アクティビティなど熊本の魅力を発信しています。また、熊本・阿蘇キャンパスの魅力について、プロジェクトメンバーと本学職員による対談形式で紹介しています。



メカトロマイスタープロジェクト

熊本

ものづくり

技術の融合から新しい社会を考える

達成目標 ロボットコンテストおよびソーラーカーレースで上位入賞

学びのテーマ 新マシンの製作と改良を通して、PDCAに基づいた工程管理やチームマネジメントを学ぶ

| | | | | |
|------------|------|-------|-----------|----------|
| プロジェクトリーダー | 富田恭平 | 基盤工学部 | 電気電子情報工学科 | 3年 |
| サブリーダー | 梅津圭佑 | 基盤工学部 | 電気電子情報工学科 | 3年 |
| サブリーダー | 竹原洋志 | 基盤工学部 | 電気電子情報工学科 | 2年 |
| 広報リーダー | 本田貴顕 | 基盤工学部 | 電気電子情報工学科 | 2年 |
| 会計 | 竹原洋志 | 基盤工学部 | 電気電子情報工学科 | 2年 |
| 合計 | | | | 参加人数 34名 |

8月5・6日

「ソーラーカーレース鈴鹿」に出場

■ 鈴鹿サーキット(三重県鈴鹿市)

震災を乗り越え、「FIAオリンピアクラス」にエントリー。メンバー6名と教職員4名が現地入りし、本センター長の木村英樹教授らがマシンの調整に協力しました。本戦では16周を終えたところで、マシンから振動と異音を感じピットイン。懸命な整備を行い、再びコースへ送り出しましたが、その周回でモーターが回転しなくなり、残念ながらリタイアとなりました。



2017年 1月7・8日

「八代子ども科学フェア」に出展

■ やつしろハーモニーホール(熊本県八代市)

“ロボットに関心を持ってもらう”ことを目的に、八代市が主催する本イベントに出展。会場には約3,000名の親子連れが訪れ、本プロジェクトのブースでは、オリジナルのレスキューロボットや三脚ロボット、ロボットに操縦者と同じ動きをさせるマスターズレブロボットの操作体験を行いました。



2017年 3月4日

「東海大学CHALLENGE CUP 2017 第5回マイコンカーラリー熊本大会」に参加

■ 熊本キャンパス2号館

東海大学熊本キャンパスが主催する、本大会の「Advanced Class 一般の部」と「Basic Class」に出場。数秒の僅差で予選での敗退となりました。大会出場選手以外のメンバーは、先端技術コミュニティACOTと協力し、大会の運営スタッフとして大会運営のサポートや、本大会と同時に開催された小・中学生対象の「マイコンレーサー・プログラム入門教室」のスタッフとして活躍しました。



熊本地域プロデュースプロジェクト

熊本

地域活性

熊本の街をブランディング・外部への発信

達成目標 ①地域交流及び魅力発信のためのイベントを年4回実施②地域の魅力を発信するためのフリーペーパーを年2回発行③着地型観光論の実践を行う

学びのテーマ 地域の魅力発信のノウハウを習得し実践することを学ぶ

| | | | | |
|------------|------|------|----------|----------|
| プロジェクトリーダー | 大庭悠登 | 経営学部 | 観光ビジネス学科 | 3年 |
| サブリーダー | 小笠原楓 | 経営学部 | 経営学科 | 3年 |
| サブリーダー | 内野友希 | 経営学部 | 観光ビジネス学科 | 3年 |
| 広報リーダー | 福田貴仁 | 経営学部 | 観光ビジネス学科 | 2年 |
| 会計 | 岡優希 | 経営学部 | 観光ビジネス学科 | 3年 |
| 合計 | | | | 参加人数 31名 |

2016年 3月27日

「里山の春を楽しもう!東海大学生バスツアー!竹林ピクニック」を初開催

■ 熊本県御船町水越地区

“熊本県内の里山の魅力を発信する”ことを目的に、熊本キャンパス周辺地域の小学生と保護者17名を対象に実施。当日は、地域の方々にもご協力いただきながら、竹水筒作りや竹林の散策をしました。散策ではメンバーがガイドとなり、竹は重要な資源であるということクイズ形式で紹介。間伐整備の見学や、筍掘り体験も行いました。



10月1日

フリーペーパー「望逢noah vol.04」を発行

■ 熊本キャンパスカフェテリアSiesta

“被災地の今 復興に向けて奮闘する人”をテーマに、熊本地震による被災の現状と復興への歩みを、熊本城や水前寺公園に関わる方々にインタビューしました。そのほかにも、観光ビジネス学科エコツーリズム研究室主催の「被災地スタディーツアー」や、3月に本プロジェクトが開催した「竹林ピクニック」についても紹介しています。



12月17日

「親子で楽しむ!クリスマスパーティー」を開催

■ 熊本キャンパスカフェテリアSiesta

昨年度に引き続き、本学付属星翔高等学校サイエンス部、先端技術コミュニティACOTと共に、小学生を対象にクリスマスイベントを開催。小学生40名、保護者15名が参加し、キャンドル作りのワークショップをはじめ、傘袋ロケット、割り箸鉄砲の工作教室、LEGOロボットの展示を行いました。



阿蘇援農コミュニティプロジェクト

阿蘇

地域活性

農業の実態を学び、発展を考える

達成目標 ①農家さんの作業負担を軽減する②援農の意義、現在の農業について考える③自らの知識と技術の向上④学外への広報活動

学びのテーマ 農業の現状や問題などを、農家さんとの対話や作業、広報活動を通して学ぶ

| | | | | |
|------------|-------|-----|---------|-----------|
| プロジェクトリーダー | 狩野幸花 | 農学部 | 応用植物科学科 | 3年 |
| サブリーダー | 松本卓佑 | 農学部 | 応用植物科学科 | 3年 |
| サブリーダー | 森田敦士 | 農学部 | 応用植物科学科 | 3年 |
| 広報リーダー | 三宅川綺音 | 農学部 | 応用植物科学科 | 3年 |
| 会計 | 宇都朱音 | 農学部 | 応用植物科学科 | 3年 |
| 合計 | | | | 参加人数 138名 |

通年

援農活動

■ 南阿蘇村、西原村、産山村、高森町(熊本県阿蘇郡)、阿蘇市

“各地区の農家を訪ね、農作業を手伝いながら農業の生きた知識や技術を習得するとともに、農業や農家の現状について学ぶ”ことを目的として、一年を通じて阿蘇地域の農家の支援を行いました。3月25～29日は、南阿蘇村の林業農家に10名のメンバーが訪問。造林用の苗木となる杉の挿し穂の採取作業を、スムーズに作業が進むように工夫して行いました。4月には熊本地震の影響を受けたものの、例年通りの活動を目指し、約130名が準備を進めました。夏の援農では、各地区の農家を7月23日～9月14日まで9回に分けて訪ね、アスパラガスやハウレンソウの収穫、イチゴの定植といった農作業を実施。8月19～21日の産山村での活動には22名が2泊3日で同地区の公民館に宿泊しながら、10軒の農家に分かれ、農家の方々とともに農作業に汗を流しました。10月1日は、西原村のサツマイモ農家で新品種「シルクスweet」の収穫を手伝いました。参加した3名のメンバーは、

コンテナ約80個分に及ぶサツマイモの蔓を切り落とし、貯蔵庫へ運搬。8日は南阿蘇村のイチゴ農家で、4名のメンバーが、植えられている苗を切り込み口から出す作業を行いました。1月7・8日は、阿蘇郡西原村のアスパラガス農家で、のべ23名のメンバーがビニールハウス内の枯れ葉の回収や除草を実施。2月5日は、農機具を置いている納屋の片付けを行いました。1月9日は、南阿蘇村のクヌギ林業家で10名のメンバーが、3万本におよぶクヌギの苗を回収。その後、根を軽く土に被せる「仮植」を行いました。また、2月19日は「くまもと農人プロジェクト」と共に援農活動を行いました。

- ◇春の援農: 3月25～29日
- ◇夏の援農: 7月23日、30・31日、8月19～21日、23・24日、26・27日、30・31日、9月2・3日、7～9日、10日、14日
- ◇秋の援農: 10月1日、8日
- ◇冬の援農: 1月7～9日・2月5日、7～12日、19日



2016年 3月5日

「大同窓会」を初開催

■ ホテルニューオータニ熊本(熊本県熊本市)

“2015年度で8周年を迎えた本プロジェクトに所属する学生と卒業生が交流を深め、農業に関する情報を交換するとともに、活動でお世話になった教職員や農家の方々に感謝の気持ちを伝えよう”と卒業生と学生が協力して実施したものです。現メンバー5名、卒業生、教職員、農家の方々約40名が参加。日ごろの活動や農作業に関する話に花を咲かせました。卒業生から2016年度に卒業する学生4名からプレゼントが贈られるサプライズもありました。



11月5日

農家との「交流会」を初実施

■ 南阿蘇村(熊本県阿蘇郡)

“農業は工夫次第でやりがいもあり、楽しむこともできる仕事である”をテーマに、イチゴ農家を営む野田さん宅において、農家の方3名とメンバー7名で実施。野田さんは「JAでは、個人で販路を確保しなくても、基準をクリアすれば出荷ができますが生産者と消費者のコミュニケーションがありません。観光農園は、消費者の声を間近で聞きながら、経営そのものを自由に考えることができます」と、農業の可能性をメンバーに伝えました。



11月20日

「ゆうきフェスタ」に出展

■ 熊本県農業公園カントリーパーク(熊本県合志市)

同実行委員会が主催する本イベントに出展し、ブースには58名が来場しました。5名のプロジェクトメンバーは、“援農”という言葉の周知や、これまでの活動について自作したパネルや、スライドショーを用いて来場者に伝えました。また、イベントのステージにも登壇し、農業ボランティアの活動について有識者と共に、ディスカッションを行いました。



あにまるれすきゅープロジェクト

阿蘇

環境・動植物保護

1匹でも多くの捨て犬・猫の命を救う

達成目標 捨てられる犬猫を増やさないために多くの人に伝える

学びのテーマ 捨てられた犬猫に関する知識や現状を、多くの人に広報する力を学ぶ

| | | | | |
|------------|-------|-----|---------|----|
| プロジェクトリーダー | 片岡岳志 | 農学部 | 応用動物科学科 | 3年 |
| サブリーダー | 田中瑞希 | 農学部 | 応用動物科学科 | 3年 |
| サブリーダー | 井上奈緒子 | 農学部 | 応用動物科学科 | 3年 |
| 広報リーダー | 野村若菜 | 農学部 | 応用動物科学科 | 3年 |
| 会 計 | 西村美佑 | 農学部 | 応用動物科学科 | 3年 |
| 参加人数 81名 | | | | |

8月7日、9月25日、12月11日

「譲渡会」をサポート

■ 熊本県動物管理センター(熊本県熊本市)

“熊本地震によりやむを得ず飼えなくなったペットの新しい家族を探し譲渡する”ことを目的に、熊本県動物管理センター主催で実施。“犬や猫の殺処分を減らす”ことを目標に、のべ19名のメンバーが、犬猫への世話をはじめ、会場設営、里親への説明をセンター職員の方で行い、計犬8匹、猫12匹の里親を見つけることができました。



8月～2017年 3月

震災で離れ離れになった犬猫をケア

■ ビッグベア動物病院(熊本県熊本市)

ビッグベア動物病院では、震災から半年以上が経った現在も、飼い主との暮らしの再開を待ち望むペットが預けられており、本プロジェクトは“震災における動物福祉の考慮と同院の負担軽減”を目的に8月14日より訪問。ゲージ内にいるペットたちのストレス軽減のための遊びをはじめ、排せつ物の処理、給水、給餌などを行いました。



2017年2月26日

ペットと暮らす被災者へ 支援物資の「贈呈式」を実施

■ 大津町室仮設団地(熊本県菊池郡大津町)

“熊本地震の影響により仮設住宅でペットと暮らす被災者の、精神的・経済的負担軽減”を目的に、12月に対象者へアンケート調査を実施し、飼育管理に必要な物資をリスト化。学内で物資の提供を募ると同時に、支援の充実を図ろうとペット用品を扱う株式会社ペティオにもご協力をいただき、2月26日にはペットシーツやペットフードといった支援物資の「贈呈式」を行いました。



阿蘇は箱舟プロジェクト

阿蘇・湘南

環境・動植物保護

希少野生生物保護の最前線

達成目標 阿蘇地域における希少な生物種の棲みやすい環境をつくる

学びのテーマ 保全活動を通じて広報活動、計画力の重要性を学ぶ

| | | | | |
|------------|-------|-------|--------------|----|
| プロジェクトリーダー | 福村拓哉 | 農学研究科 | 農学専攻修士課程 | 1年 |
| サブリーダー | 井手脩人 | 農学部 | 応用植物科学科 | 4年 |
| サブリーダー | 伊東玲奈 | 教養学部 | 人間環境学科自然環境課程 | 3年 |
| 広報リーダー | 高氏葉月 | 農学部 | 応用植物科学科 | 4年 |
| 会 計 | 益田幸太郎 | 農学部 | 応用植物科学科 | 4年 |
| 参加人数 63名 | | | | |

7月24日、9月25日、12月11日

除草活動

■ 熊本県阿蘇郡南阿蘇村

熊本県の特定希少野生動植物に指定されている蝶「オオルリジミ」をはじめ、“阿蘇の自然に生息する希少な動植物の生息環境を復元する”ために実施されたもので、7月24日は、30名のプロジェクトメンバーが、9月25日は36名が参加。はじめに、プロジェクトリーダーの福村拓哉さん(農学研究科農学専攻修士課程1年次生)が、後輩のメンバーに対し、活動地域で見られる希少植物「クララ」や「タマボウキ」について解説しました。その後、セイタカアワダチソウをはじめとする外来植物を、刈り払い機や大鎌を用いて除草し、オオルリジミが生息するのに十分な環境を整えることができました。参加したメンバーは「オオルリジミの生息地域が、震災の影響を受けていないか心配でした。久しぶりに阿蘇の自然と触れあうことができ嬉しく思います」「自然保護につながる活動ができてよかった」といった感想を述べました。12月11日は、アドバイザーの村田浩平教授(農学部応用植物科学科)と5名のプロジェクトメンバーが、希少植物の自生の確認をはじめ、土砂崩れの有無や、車両の通行、毎年実施していた野焼きの可否について細かくチェックし、阿蘇地域の自然環境保全に努めました。福村さんは「震災の影響により例年に比べ2ヶ月ほど除草活動が遅れ、オオルリジミは見られませんが去年見ることのできた昆虫たちを今年も確認することができました。オオルリジミの個体数増加を図り、オオルリジミが阿蘇の復興のシンボルになるような活動をしていきたいと考えています」と語りました。



札幌ボランティアプロジェクト(旧 福祉除雪プロジェクト)

札幌

地域活性

ボランティアを通じて、一回り大きな自分になる

達成目標 除雪作業のボランティア活動を中心に、社会貢献や地域貢献に尽力する

学びのテーマ プロジェクト活動を通して安全安心な街づくりに貢献し、地域の方々とのコミュニケーションを図り社会性を学ぶ

| | | | | |
|------------|-------|--------|---------------|----|
| プロジェクトリーダー | 佐野加奈子 | 生物学部 | 生物学科 | 3年 |
| サブリーダー | 齋藤佑里子 | 生物学部 | 生物学科 | 3年 |
| サブリーダー | 佐藤晴香 | 生物学部 | 生物学科 | 3年 |
| 広報リーダー | 小林茜莉 | 国際文化学部 | デザイン文化学科 | 2年 |
| 会 計 | 藤盛将仁 | 国際文化学部 | 国際コミュニケーション学科 | 2年 |
| 参加人数 55名 | | | | |

5月8日、7月8日

「花壇の除草・植栽作業 ボランティア」に参加

■ 札幌キャンパス周辺

“地域の方々との交流をさらに深める”ことを目的に実施。5月8日は本プロジェクトメンバー4名、7月8日はメンバー9名が、約100名の町内会の方々と共にキャンパス周辺約200mにわたる同町内会のラベンダー花壇の整備や、除草を手作業で行いました。メンバーの木元麻莉花さん(生物学部海洋生物科学科1年次生)は「札幌キャンパス周辺にお住まいのお子さんや中高年の方々と世代をこえた交流ができました」と語りました。



10月8日

「大学生とあそぼう～とうかい ぴくにっく～」を初開催

■ 札幌キャンパス、南の沢児童会館(北海道札幌市)

“地域の小学生との交流”を目的に開催。18名の児童と10名のメンバーが参加し、児童館内では指示役の後に全員で真似をする『いうこと一緒にやること一緒にゲーム』や、決められた人数を集める『仲間集めゲーム』を行い、初対面の児童同士交流しました。続いて児童たちに秋を楽しんでもらおうと、本学光風園を案内。ドングリや落ち葉を集め、フォトフレームなどを一緒に作成。楽しい秋のピクニックを楽しみました。



6月5日

「いちご豚肉まつり」をサポート

■ 豊浦海浜公園(北海道虻田郡豊浦町)

豊浦町と本学は2007年に両者の交流の発展と地域の総合的な振興に資するため「地域総合交流協定」を締結。その一環として、豊浦町の特産品であるいちごや豚肉などが提供される同実行委員会主催の本イベントをサポートしました。当日は、メンバーや有志の学生30名と教職員5名が、委員の方々と一緒に、会場ステージ周辺のテーブルやテントの片付け、ゴミ拾いを実施。例年以上の多くの人々で賑わい恒例の餅まきで盛況のうちに終了しました。



11月24日、12月9日～2017年 2月13日

「除雪活動」を実施

■ 札幌市内

キャンパス周辺の町内会会員から除雪を希望する世帯を募り、主に自力での除雪が困難な世帯を対象に除雪ボランティアを展開しています。今年度は53名の学生がメンバーとして参加し、授業の合間などを利用して33世帯での除雪を実施しました。11月24日に開催した「出陣式」では、プロジェクトメンバー25名、教職員8名、学外協力者5名の総勢38名が出席。プロジェクトリーダーの佐野加奈子さん(生物学部生物学科3年次生)は「一人ひとりが責任を持ち、怪我のないよう気を引き締めて除雪活動に臨みたい」と活動開始に伴う決意表明をしました。12月10日の札幌市内では積雪65cmを記録する大雪となり、地域の高齢者から多数寄せられた要請に応えるため、当初の予定よりも活動日や人員を増やし、12月9日～2月13日の期間で計36回除雪作業を行いました。

7月17日

「第9回南沢ラベンダーまつり」に初出展

■ 札幌キャンパスラベンダー畑

日本のラベンダー栽培発祥の地として、本キャンパスでは2002年度から3カ年計画で「ラベンダーキャンパス化計画」を推進。そのラベンダーが咲き誇る7月中旬、地域振興を目的に、同実行委員会が開催しました。見ごろを迎えたラベンダー畑には約2,000名が来場。本プロジェクトは「札幌軟石」を活用した「ミニ盆栽づくり」やラベンダーを使った「しおりづくり」のワークショップを行い、地域の魅力を来場者に発信しました。



ユニークプロジェクト活動報告

【湘南キャンパス】

きらきら実験教室

子どもたちにもつくりの楽しさと理科に対する興味をもってもらうための企画を実施する。

TOKAI DESIGN PROJECT

デザインを通じて東海大学をアピールすると共に、社会貢献・地域貢献が出来る作品づくりに取り組む。

☆Tokai Air Racers Order

ドローン技術の普及と質の向上を目指し、レース参加による技術・知識の習得や学生に向けて講習会を行う。

☆Egyptian Project

学内の古代エジプト・中近東コレクション文化財調査などを行い、地域活性化や社会貢献活動を行う。

Tokai Dream Space Team

高校生・大学生・企業の連携で、信頼性の高いものづくり技術を習得するイベントを企画・実施する。

ポリヘドロン工作隊

子どもたちに主体的に図形作り体験に取り組んでもらうことで、科学への理解を深めてもらう。

★Beijo Me Liga

在日ブラジル人・ペルー人が日本でより良い暮らしができるように、異文化理解のためのイベントや小学生に向けて学習支援活動を行う。

★東海魅力宅配便

本学の魅力を知ってもらうために、魅力の発信方法やイベントの企画立案・運営のためのプロセスを学ぶ。

【代々木キャンパス】

よよさんぽ

学生や住民参加型のイベントを開催するとともに、地域イベントへ積極的に参加することで代々木周辺の魅力を発見し情報を発信していく。

【高輪キャンパス】

ロボP

ソフトウェア開発を通じて、組み込みの世界を知らない人達にもつくりの楽しさを伝える。

☆安心情報コミュニティプロジェクト

災害時の安否確認方法など、人々の安心につながる情報通信システムやアプリケーションを考案・開発する。

★U-map

高齢者や移動制約者の方も利用できるお店の情報やバリア情報を含む“知図”を制作する。

【清水キャンパス】

ワンダフル・マリンアニマルズ

海洋生物の外見的特徴などをとらえた生物型ロボットを製作し、講演や出展を積極的に行っていく。

三保活性化プロジェクト

三保半島を中心として地域の人達との交流を通して地域活性化に貢献する。

海の森プロジェクト

乾燥昆布など、さまざまな製品を生産・活用し、地域の方により魅力的な情報を発信する。

☆ATLAS

清水港に豪華客船が入港する際のボランティアとして、外国人観光客向けのミニツアーを開催する。

サンゴを守るプロジェクト

駿河湾に生息するサンゴの現状を調査し、サンゴ生息情報として公開する。

【清水・湘南キャンパス】

☆気仙沼シャークプロジェクト

気仙沼のサメを商品として有効活用し、地域の人々の生活再建支援を行う。

【伊勢原キャンパス】

★TOKAI HEALTH DESIGN PROJECT

学生と市民の相互交流を通して、地域におけるヘルスケアの新たな取り組みをデザインする。

【阿蘇キャンパス】

★阿蘇復興への道

南阿蘇と学生の繋がりや後世に伝える。

【札幌キャンパス】

地域連携プロジェクト

地域の方々と一緒に、地域活性化のための活動を企画・実行し、発信する。

★札幌ビオトープをつくらう会

グラウンドへの融雪水の流入阻止、エゾサンショウウオの産卵・孵化促進のためにビオトープを造り、グラウンドでスポーツと自然の両立を目指す。

★北の海プロジェクト(HSCAP; Hokkaido Sea-Coast Learn-Activate Program)

日本海沿岸で海洋生物の生態系を調査し、小・中学生に向けて環境保全の啓蒙活動を行う。

★は今年度新規プロジェクト

☆は名称を変更したプロジェクト

12月18日

Tokai Dream Space Teamが[Intel Genuino 101 Competition 2016]を開催

湘南

■ 湘南キャンパス

“高校生や大学生にもつくりの魅力を伝える”ことを目的に、関東圏内及び静岡県の高中生と大学生に模擬人工衛星を搭載した全長約1mのペットボトルロケットを製作してもらい、打ち上げるコンペティションとして実施。10月16日には、湘南キャンパスで事前説明会も開催。教育用マイクロコンピュータ「Genuino101」のプログラミングの方法などをまとめたオリジナルの開発マニュアルを配布するなど、参加者を後押ししました。当日は打ち上げを補助しながら、会場でのアナウンスなどの進行を担当。ペットボトルロケットが打ちあがるたびに、会場は歓声に包まれていました。



6月3日

よよさんぽが「ハチミツの初絞り」を実施

代々木

■ 代々木キャンパス4号館

代々木キャンパスでは、渋谷区内にあるビルの屋上で養蜂に取り組み、ハチミツの採取をはじめ環境問題に関する勉強会などを行う「渋谷みつばちプロジェクト」に賛同。ハチミツ専門店の株式会社ラベイク養蜂部の協力を得て、3月18日に巣箱を設置しました。初絞りとなった当日は、渋谷区立富ヶ谷保育園の園児20名を招待。園児の安全を考慮して、会場は巣箱から離れた2号館と4号館の間に設営。大型のスクリーンを用意し、巣箱の様子を中継しました。その後、ハチを取り除いた巣板を会場へと運び、およそ13ℓのハチミツを採取しました。



6月11・12日

ワンダフル・マリンアニマルズが「信州夢街道フェスタ2016」で魚ロボットを披露

清水

■ 信州スカイパークやまびこドーム(長野県松本市)

内陸県で普段海に馴染みのない長野県の子供たちに、“海と山は、川や地下水でつながっていて、山を守ることは海を守り、そして多くの海洋生物を守ることに繋がる”ことを発信するために同実行委員会が主催する本イベントに出展。プロジェクトのブースには、両日合わせて約2,000名が来場。海に漂着したペットボトルや発砲スチロールなどの廃棄物を材料にメンバーが製作した、サメやウミガメ、ペンギン、クマノミといった水中生物そっくりのロボットを、直径3mの円形プールで泳がせ、子どもたちに海の魅力を伝えました。用意したスクリーンに、水中でロボットが遊泳する様子を映し出し、来場者を沸かせました。



12月27日

三保活性化プロジェクトが「子どもわくわくランド」を開催

清水

■ 折戸生涯学習交流館(静岡県静岡市)

“地元の小学生と交流をもつことにより、地域との連携を深め盛り上げる”ことを目的に、昨年度から行っているもので、本学公認団体の水族応用生態研究会、JAZZ研究会、大道芸サークル「TRICK-ARTS」の学生も参加し、イベントを盛り上げました。当日は、『ブンブンゴマ』の工作体験を実施したほか、水族応用生態研究会は海の生き物に直接触れることができる『タッチプール』や魚の生態に関するクイズ大会を行いました。昼食後には、JAZZ研究会による生演奏、TRICK-ARTSによるジャグリングなども披露され、参加した約40名の小学生とともに楽しみました。



6月25・26日

Egyptian Projectが文化財保存修復学会にあわせて「特別展示会」を開催

湘南

■ 湘南キャンパス松前記念館

文化財保存修復学会の第38回大会が湘南キャンパスで開かれたのに併せて企画したもので、メンバーは今年4月から毎日のように勉強会を実施し、古代エジプトへの理解を深めるとともに、展示物を選定して説明文をつけたほか、説明用の資料をまとめるなど準備を進めてきました。期間中は学会に参加した専門家が展示会場にも多数来場。メンバー約10名が交代で説明員を務め、遺物の特徴や書かれている文字の意味、年代による違いなどについて質問されると、資料を片手に熱心に解説しました。



8月20・21日

ポリヘドロン工作隊が「青少年のための科学の祭典大阪大会2016・サイエンスフェスタ」で優秀賞を受賞

湘南

■ ハービスHALL(大阪府大阪市)

“子どもたちに主体的に多面体作り体験に取り組んでもらうことで、幾何学への興味や理解を深めてもらう”ことを目的として、同実行委員会が主催する本大会に昨年度より参加。当日は約80の団体が出展し、本プロジェクトの工作教室には2日間で約120組の親子が来場しました。参加した子どもは小学校低学年が多く、学生たちは普段見慣れない形を分かりやすく説明することを意識し、それぞれにきれいな凧形二十四面体を制作。“未来を担う子どもたちが科学・技術に興味を持つ上で大きな貢献を果たした団体”として、2年連続となる優秀賞を受賞しました。



11月20日

阿蘇復興への道が「南阿蘇大復興祭」を開催

阿蘇

■ 道の駅あそ望の郷ぎの(熊本県南阿蘇村)

熊本地震からの復興支援活動に取り組むメンバーが中心となり、南阿蘇村や村内の団体などの実行委員会に参加。当日は農学部学生をはじめ熊本キャンパスの学生サークルや本学卒業生、地元の飲食店が約30の屋台を出店しました。ステージでは、メンバーによる「餅まき」や阿蘇キャンパスの農学教育実習センターで収穫した野菜などが当たる抽選会を実施。「書道同好会」や「三線の花同好会」、「ハーフウェイミュージッククラブ」「ストリートダンス同好会」らもパフォーマンスを披露し、来場者から大きな歓声を浴びていました。



熊本復興支援プロジェクト



プロジェクトサプリーダー
■ 塚田龍洋
詳しい活動報告は P7
体育学部
スポーツ・レジャーマネジメント学科
4年次生

チャレンジセンターが緊急に立ち上げた特別プロジェクトに参加し、私が初めて熊本を訪れたのは8月でした。その時にはすでに、震災に関するTVニュースを生活の中で目にするのが少なくなっていました。友人がアパートの下敷きになり救出され、命を救われたこともあり、この震災は私にとって大きな出来事でした。そのこともあり、僅か4ヶ月しか経過していない8月の時点で、震災に関する情報をあまり目にしなくなった事に違和感を覚え、実際に震災の復興状況を自分の目で確かめたいと思いました。活動でおとずれた南阿蘇村では、水道が復旧しておらず住民の方は全員、避難所での生活を余儀なくされていました。震災の爪あとが深く残ったままの南阿蘇村に立ち、TVでは放映されていない状況を目の当たりにしました。共に活動を行った現地NPOの方からは、学生である私たちがボランティアに訪れたことを、とても喜んでくださいました。また、私の友人や活動中に交流した阿蘇キャンパスの学生の中には、生活環境の変化によって、周りへの気遣いを優先してしまい、自分の思いを伝えられなかったことが印象的でした。短い活動期間において、現地NPOや阿蘇・熊本の学生からは震災体験について聞く機会がありましたが、仮設住宅に住んでいる方や他のボランティア団体の体験談を聞くことはできなかったことが心残りとなりました。今後、まず私たちにできることは熊本の現状を多くの方々に伝えることだと考えています。現在は、まだ力不足でメンバー間の情報共有、プロジェクトの認知度向上など多くの課題を抱えていますが“被災者の声を全国に届ける”という目的を強く自覚し、被災者の声を聞くため、被災した方々と文を通じた交流を始めます。日常生活の話から震災当時のことまで、自由に話し、学生からの手紙の返信を楽しみに感じていることが出来れば、被災者と学生との間に繋がりが生まれると考えています。



被災した農家におけるボランティア活動

Tokai International Communication Club



プロジェクトサプリーダー
■ 浪川唯奈
詳しい活動報告は P11
文学部アジア文学科
2年次生

法務省・日本政府観光局の調査によると、在留外国人数は223万2,189人(2016年)、訪日外国人数は1,973万7,409人(2015年)となっています。世界は急速なグローバル化が進み、日本も例外ではありません。私たちTokai International Communication Clubでは、このような状況から、本学在学中の留学生や、外国につながる子どもたち、秦野市在住の小学生とその保護者、本学の学生などを対象に、国籍や民族などの異なる人々が互いの文化的違いを認め合い対等な関係でいられる社会、“多文化共生社会の実現”を目指し活動しています。本プロジェクトの活動を通して、普段接点のない留学生と仲良くなることや、身近な世界に関する話題を真剣に議論すること、公的な文書の書き方など、本プロジェクトに所属していなければ得られない多くの経験を得ることができました。今年度は外国につながる子どもたちを対象に学習支援を行っている「にこティー教室」(にこにこティーチャーズの略)という企画や、学内の留学生と交流をする企画で、外部の方から多く取材をしていただきました。これは日頃から継続的に活動し、秦野市や本学内といった地域に根差した活動を行ってきた結果ではないかと思えます。また、継続して行う企画以外にも新たな企画を作り、新しいことに挑戦した年でもありました。神奈川県の高校生を対象とした「国際交流高校生の集い」では、本プロジェクトとして初めて依頼を受け、イベントを開催しました。新しい物を作り出すことの難しさを実感し、失敗を繰り返す経験も大切だと学んだ一年でもありました。本プロジェクトの活動はメンバー、参加者、地域の方、どこが欠けても成り立たないものです。今後は地域の方々と留学生が交流できるイベントや、より多文化共生を身近に感じてもらえるようなイベントを作っていきたいと思えます。



国際交流高校生のつどい



にこティー教室

サイエンスコミュニケーター



プロジェクトリーダー
(2015年度)
■ 中山梓
詳しい活動報告は P13
工学部応用化学科
3年次生

“理科離れを防ぎ、科学の楽しさを通して人と人のつながりをつくる”という目標を掲げて活動しています。これを目標とした理由は、私たちの生活は科学技術に支えられているにも関わらず、子どもたちの間では理科離れという現状が生じているためです。これまで、本プロジェクトが子どもたちの理科離れを防ぐために取り組んできたことは、“体験を通して科学が楽しいものであると感じてもらおう”という事です。「百聞は一見にしかず」ではありませんが、実際に科学の面白さを体験することは理科離れを防ぐ上で非常に有効な手段です。そのため、実験ショーや実験工作教室を、湘南キャンパスの近隣地域をはじめ全国各地で実施しています。今年度は大きな試みとして、8月に湘南キャンパスで「世界一行きたい科学広場」という大規模な科学イベントを主催しました。これまでの活動では本プロジェクト単独開催での実験教室などが主でしたが、学内外の科学系の団体との複合イベントを開催することで、来場された方々に科学の様々な側面に触れてもらうことができました。開催時期が8月ということもあり、多くの小学生が来場し、「楽しい実験がたくさんあった」「不思議、どうしてこうなるんだろう」といった科学を楽しむだけでなく、科学に対しての興味関心を持ってたという非常に好意的な声を多くいただきました。また、単独で開催している実験教室も、これまでの活動が実を結びリピーターの方が来場されることも多くなりました。これらのことを通して、少しずつですが活動の成果が現れているように感じられます。今後も現状に満足することなく、新しい科学の和を広げ、理科離れを防ぐことに貢献できる活動を続けていきたいと思えます。



世界一行きたい科学広場



しゅぼしゅぼ真空実験

東海大学学生ロケットプロジェクト



プロジェクトリーダー
■ 小川誠仁
詳しい活動報告は P18
工学部航空宇宙学科
航空宇宙学専攻
4年次生

学生による自作ロケットの設計・開発を行っています。学生団体の中でも例の少ない自作ロケットエンジンの開発や、大型機体の設計企画化など、独自のロケットシステムの開発にも注力しています。これらの成果を生かし2016年夏には学生団体として初の音速突破に挑戦、他大学や一般企業からも注目を受けました。当団体では技術開発だけでなく、一般の方に向けた広報活動も積極的に取り組んでいます。2016年度は学会やものづくり系のイベント、高校の文化祭への出展に加え、平塚市博物館での展示を行いました。特に博物館での展示には幅広い年齢層の方にご来場頂き、帰り際に多くの方が質問や感想をお話し下さったのが印象的でした。展示以外にも実際に手を動かすことを通じて、航空宇宙分野に興味を持って頂ける様なイベントを開催しています。2016年度は地域の小学生を対象として、簡単な実験からロケット飛翔の原理を学ぶフィルムロケット教室の企画を行いました。また外部企業にご協力頂き、これから電子工作を始める高校生や教員の方を対象とした小型無線機の講習会を実施しました。中でも無線機の講習会には、遠く北海道から関東圏まで幅広い地域から多くの高校生、及び教員の方々が集まりました。講習会の盛況ぶりや実施したアンケートの結果から、このような技術導入に適した講習会が必要とされている事を実感しました。以上のような日頃の活動をご評価頂いたか博物館での展示に合わせて、NHKの全国放送や平塚市の広報誌などに、私たちの活動を取り上げて頂くことができました。放映(発行)以降は、イベントだけでなく日常生活の中でも、メディア出演に触れてご声援を頂く事が増えました。少しずつですが、私たちの活動が広く社会で認知されつつあることを実感しています。



ハイブリッドロケット42号機の打ち上げ



講演したプラネタリウムのドームに投影された過去の機体

メカトロマイスタープロジェクト



プロジェクトリーダー
■ 富田恭平
詳しい活動報告は P25
基礎工学部
電気電子情報工学科
3年次生

ソーラーカーやレスキューロボットを製作してレースやコンテストに挑戦する一方で、「ものづくり講習会」や「ロボット教室」などの社会貢献活動も積極的に行っています。ものづくり講習会では小中学生とその保護者を対象にミニソーラーカーキットの製作や、ソーラーカー「Tokai Nextage」の見学や説明、コックピットへの搭乗体験を行なっています。毎年リピーター参加する親子も多く、「自分も将来ソーラーカーを作りたい、乗ってみたい」という声が寄せられています。ロボット教室ではレスキューロボット、マスタースレーブロボット、三足ロボット等を出展し、遠隔操作型ロボットの操縦体験を通じてロボットと触れ合う楽しさを子どもたちに伝えています。これらの活動は熊本県内では新聞やTVニュースでも紹介され、ものづくりの楽しさやエコ技術の大切さを地域社会に伝える大きな役割を担っていると自負しています。特に熊本県は太陽光などの再生可能エネルギーの普及に地域を挙げて取り組んでいて、究極のエコカーであるソーラーカーへの関心は高く、本プロジェクトの成果を地域社会に発信する意義は大きいと考えています。2016年は4月の熊本地震によって熊本・阿蘇周辺地域社会が大きな被害を受けました。当時、私たちは8月の「ソーラーカーレース鈴鹿」に向けた新車製作に取り組んでいる最中で、授業が再開されるまで1ヶ月に渡り活動中断を余儀なくされました。このためレースまでにマシンの完成が困難な状況になりましたが、地元企業の方々が短期間で部品加工や溶接等を引き受けて頂き、何とかレースに出場することができました。これらの経験から、私たちの活動もまた多くの方々に支えられていることがわかり、今後も私たちの活動を社会に役立てたいとの思いを強くしました。最後に、各方面からのご心配や励ましの言葉に対しまして、プロジェクトを代表して心から感謝申し上げます。



「ソーラーカー鈴鹿」に出場



ソーラーカーを整備

阿蘇援農コミュニティプロジェクト



プロジェクトリーダー
■ 狩野幸花
詳しい活動報告は P26
農学部応用植物学科
3年次生

現在の日本農業・農村の問題として、農業従事者の減少や高齢化による人手不足、後継者不足があげられます。全国的農業従事者のうち6割以上が65歳以上の高齢者であり、その方々が日本の農業を担っているのが現状です。本プロジェクトでは、そのような人手不足に悩む農家さんのところへお手伝いに行き、作業負担を軽減するとともに農作業や農家さんとの対話の中で学んだことを社会に向けて発信していく活動を行っています。農家さんと地域とのつながりを大切に、交流を広げていくことで地域の活性化にもつながると考えています。2016年度の活動は、熊本地震の影響により活動拠点であった阿蘇キャンパスから離れ、熊本キャンパスから車で2時間ほどかけて阿蘇地域で行いました。援農活動が継続できたのは、「これからも活動を続けてほしい」と思ってくださる多くの農家さんの想いのご協力があったおかげです。また、2008年度プロジェクトが始まって以来、築き上げた農学部学生と農家さんとの信頼関係を大切にしてきた結果であると思えます。今年は新入生約60名がメンバーに加わり、全体で約130名の大所帯となりました。活動再開の7月から、26軒の農家さんの所でのべ233名のメンバーが活動を行いました。農家さんからは、「震災で気分が沈んでいたけど、来てくれたおかげで元気になった」、「なくてはならない活動で今後活動にも大いに期待する」などの声があり、改めて本プロジェクトの意義や阿蘇地域での存在の大きさを感じました。これからの社会を担っていく私たちが援農活動で農業が抱える問題に向き合い、解決を模索してきたことは、地域社会にも影響を与えた活動であると思えます。これからも農業の更なる発展のために、学生のパワーでさらに活気のある活動となるよう取り組んでいきます。



スズ農家での援農活動



イチゴ農家での援農活動

チャレンジセンターの活動

学生への研修(リーダー研修会、広報講習会)

7月4日 「第16回チャレンジセンターセミナー」を開催

■ 湘南キャンパス松前記念館講堂

NPO法人都留環境フォーラム代表理事の加藤大吾氏を講師に迎え、「やりたいことをやってみよう！～自分にも世界はつくれる～」をテーマに講演。湘南・代々木・高輪・清水・熊本・札幌の6キャンパスをテレビ会議システムでつなぎ、304名が聴講しました。加藤氏は、東京から山梨県都留市の山林に丸太小屋を建て移住。農業に従事するかたわら、環境教育者、企業研修講師、大学の非常勤講師としても活躍しています。講演の前半では山間に移住した今の生活を紹介。後半は「周りの人のために願っていること」など9項目について加藤氏が参加者に質問。それぞれが答えを書いた後、席の近い人同士で互いに発表しました。



10月15日 「2016年度チャレンジプロジェクト中間報告会」を開催

■ 湘南キャンパス8号館

湘南、代々木、高輪、清水、熊本・阿蘇、札幌の計6キャンパスをテレビ会議システムで結び、全キャンパスを合わせて664名の学生や教職員が参加。山田清志学長のあいさつの後、21プロジェクトの代表学生が登場し、プロジェクト目標や上半期の活動を通じて学んだこと、今後の活動内容について発表しました。熊本・阿蘇両キャンパスからは、これまでの活動で被災地支援に役立った事例を報告。また、今年7月に発足した「熊本復興支援プロジェクト」は、被災者やボランティア参加者の精神面に配慮した事前研修の内容や、被災地でのニーズ調査、瓦礫やビニールハウスの撤去といった活動について報告しました。



12月20日 「第17回チャレンジセンターセミナー」を開催

■ 湘南キャンパス松前記念館講堂

「第1回WBSC U-23ベースボール・ワールドカップ」で優勝した日本代表チームのコーチを務めた本学文学部卒業生の安藤強氏を講師に迎え、「侍ジャパン 社会人代表監督が語る～世界一のチームのつくりかた～」をテーマに講演。湘南、代々木・高輪・清水・熊本・札幌の6キャンパスをテレビ会議システムでつなぎ、400名をこえる学生や教職員、近隣住民らが聴講しました。硬式野球部で内野手として活躍した安藤氏は本田技研工業株式会社に入社し、選手、マネージャー、コーチを経て監督を務め、第80回都市対抗野球大会で優勝。礼儀や責任、信頼を重視しながら選手らと理解しあえる関係を築き、指導、育成した日々を振り返りました。



2017年 2月4日 「2016年度チャレンジプロジェクト最終報告会」を開催

■ 湘南キャンパス8号館

今年度採択された21プロジェクトの代表メンバーが、地域の方々や学生、教職員を対象に、昨年4月から現在まで全国各地で展開したもののつくり、国際交流、社会貢献、環境、動植物保護、地域活性などさまざまな分野の活動から得た成果や学びについて報告するもので、湘南、代々木、高輪、熊本・阿蘇、清水、札幌の6キャンパスをTV会議システムでつなぎ、全体で約620名が来場しました。各プロジェクトを代表するプレゼンターはそれぞれの活動について、スクリーンに写真やテキスト、図表を映しながら報告。それぞれに来場者らの質問に答えました。プレゼンテーション終了後、審査員を務めた本学連合後援会の田畑日出男会長、本学同窓会東京ブロックの宮原孝夫会長、株式会社高見沢サイバネティックスの高見澤和夫氏、株式会社マイスターエンジニアリングの長安元和氏、株式会社アビストの柳澤宏美氏、本センターの木村英樹センター長(工学部教授)がメンバーの発表や活動内容を審査。特に高い評価を得たプロジェクトに贈られる「グッドプレゼンテーション賞」には、阿蘇援農コミュニティープロジェクト、サイエンスコミュニケーター、病院ボランティアプロジェクトが選ばれ、木村センター長が代表者に賞状を授与しました。



リーダー研修会

キャンパスをこえたプロジェクト学生同士の交流および「プロジェクトリーダー」の育成を通じて、プロジェクト活動を活性化することを目的に実施。今年度は6キャンパスの学生41名が一堂に会しました。

2017年 2月15日～17日 「2016年度チャレンジセンターリーダー研修会」を実施

- 目的とねらい** : ①キャンパスをこえたプロジェクト学生同士の交流、およびプロジェクトリーダーの育成を通じて、プロジェクト活動を活性化する
②プロジェクトリーダーとしてメンバーを統率し、プロジェクト目標を達成するために必要な力を育む
- ▶リーダーとしての課題を捉え、リーダーシップとは何かを考える
 - ▶リーダーに必要なスキルとして、ファシリテーションを学ぶ
 - ▶リーダーとしての目標を考え表明する

実施場所 : 湘南キャンパス 8号館4階8-411教室
宿泊場所 : 湘南キャンパス クラブハウス
対象者 : 2017年度チャレンジプロジェクトリーダー・サブリーダー・他 計41名 (幹部候補の中から選出し、1プロジェクト1～2名参加)
講師 : 木村英樹(チャレンジセンター長)・二ノ宮リムさち(現代教養センター准教授)・田島祥(現代教養センター講師)・高橋操・島村祐太(以上チャレンジセンター)
事務局 : 佐藤多嘉雄、島村祐太、村井健太郎(以上チャレンジセンター)



研修プログラム

| DAY1 10:00～17:30 | DAY2 9:00～17:30 | DAY3 10:00～13:30 |
|---|--|--|
| ▶10:00～10:05 【開会式】 【講師:二ノ宮リム】 ▶10:15～12:00 お互いを知りつなごう(アイスブレイク・チームビルディング) ▶13:00～13:20 ファシリテーションってなに?(講義) ▶13:20～14:20 課題や不安を共有し対策を考えよう①(グループディスカッション) ▶14:20～14:45 ディスカッションのファシリテーション(講義) ▶15:00～15:30 課題や不安を共有し対策を考えよう②(グループディスカッション) ▶15:30～16:15 ふりかえり①:課題・不安と考えられる対策(グループ発表) ▶16:15～16:45 ふりかえり②:ファシリテーターの役割とスキル(講義) ▶17:00～17:30 チャレンジセンター長からのメッセージ | ▶9:00～10:00 「チャレンジセンターについて説明」 担当:チャレンジセンター 高橋 【講師:田島】 ▶10:15～11:45 目標達成のためのリーダーシップ(講義・グループワーク) ▶12:45～14:15 リーダーシップとコミュニケーション(講義・シェアリング) ▶15:15～16:45 プロジェクトの課題を通してリーダーシップを考える(ディスカッション・シェアリング) ▶16:45～17:00 振り返りとまとめ ▶17:00～17:30 「チャレンジセンターが課す提出物について」 担当:チャレンジセンター 島村 | 【講師:二ノ宮リム】 ▶10:00～11:00 研修をふりかえろう(ワールドカフェ・発表) ▶11:00～12:00 リーダーとしての目標を考えよう(ワーク・発表) ▶13:10～13:30 修了式(修了証書授与) |

広報講習会

「プロジェクト活動の広報を見直すきっかけになる」ことを目的に、湘南キャンパスで初めて実施。プロジェクト広報リーダーをはじめとするのべ97名のメンバーが参加しました。

6月18日 「第1回広報講習会～ポスター制作の基礎～」を開催

■ 湘南キャンパス1号館

11プロジェクト35名のメンバーが参加。自分が気に入ったポスターを持ち寄り、どういった部分が良いのかを自己紹介を交えて説明。続いてセンター職員が「なぜ広報が必要なのか」「ポスターをデザインする際に注意すべき点」について解説しました。その後、各自でイベントに使用する告知用ポスターのラフ案を作成。メンバーが用意したキャッチコピーや、プロジェクト活動の写真などアイデアを盛り込んだデザインを基に制作に取り組みました。



11月30日 「第2回広報講習会～プロジェクトのための情報発信～」を開催

■ 湘南キャンパス15号館

12プロジェクト35名のメンバーが参加。本センター職員が「広報とはそもそもどんな意味か」「園児と高齢者と大学生、発信手段は一緒が良いのか」とメンバーに問いかけながら、対象に応じたプロジェクトに関する積極的な外部発信が、社会との信頼関係の構築につながることを解説しました。次に、個別で取り組んだ事前課題(所属プロジェクトに似た団体の広報活動を分析し、実際に生かせることを見つかる)をグループで共有しました。



2017年 1月17日 「第3回広報講習会～プロジェクト広報活動における工夫とポイント～」を開催

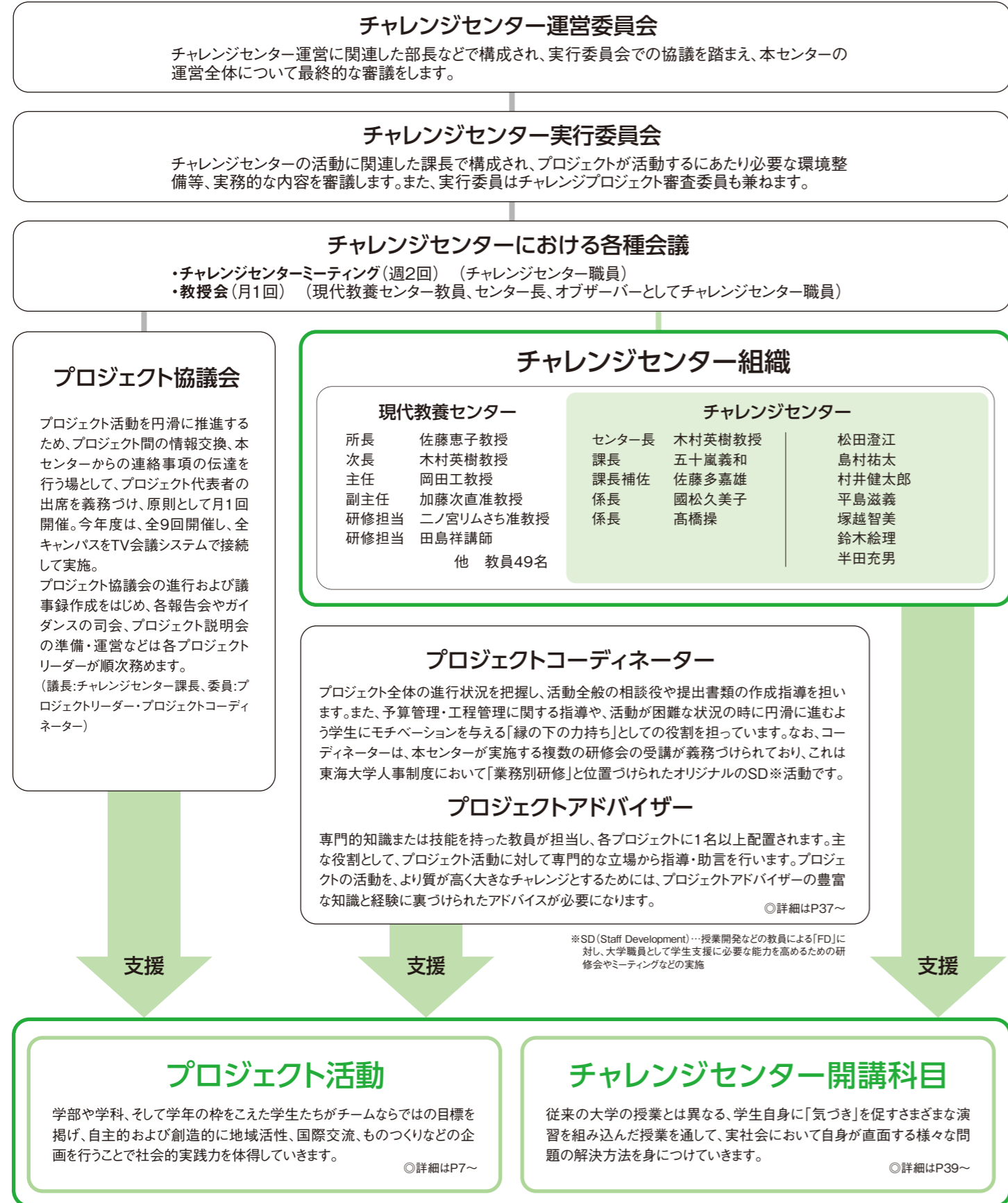
■ 湘南キャンパス14号館

11プロジェクト27名のプロジェクトメンバーが参加。3名のプロジェクトメンバーが、実体験を通じた広報における工夫を発表。広報における情報発信について、ホームページやSNSをプロジェクトに投影しながら紹介しました。その後、3つの事例をもとに参加者全員で、質疑応答や意見交換を行い、「一緒に悩みや疑問を解決できると、メンバー同士の意識が高まります」などが述べられ、プロジェクトの枠をこえた、交流の場となりました。

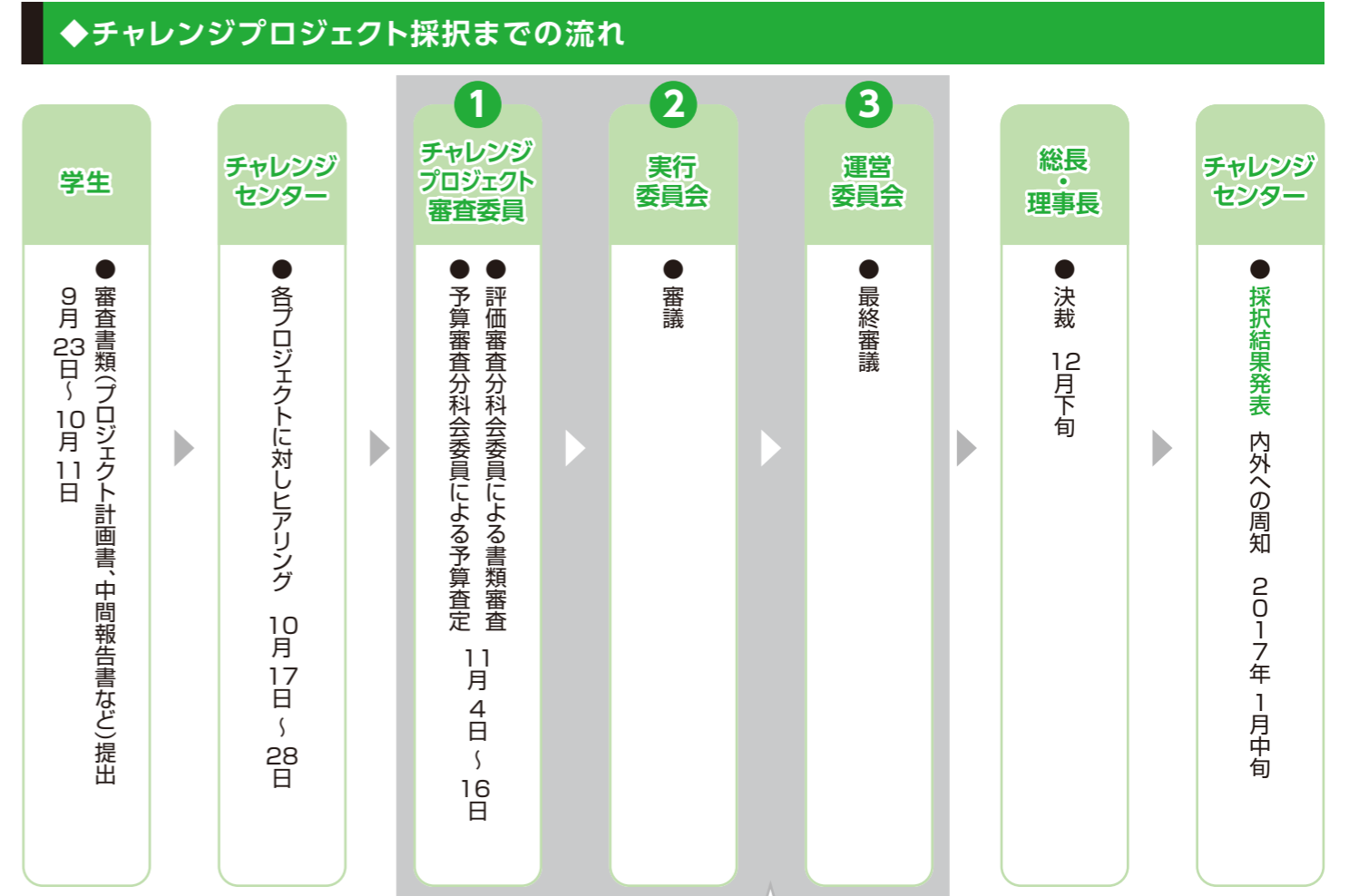


チャレンジセンターの支援体制・運営体制

本センターでは、学生たちがより大きな目標を成し遂げられるように、様々な面できめ細かくバックアップ。チャレンジセンターミーティングや教授会、プロジェクト協議会を通じて、組織内での情報交換や連携を図るとともに、プロジェクト活動の質を高めるための人的な支援として、各プロジェクトにコーディネーターとアドバイザーを配置しています。原則として、コーディネーターおよびアドバイザーは本学の教職員から選抜。安心して活動に取り組みることができるサポート体制が整っています。



本学では、チャレンジプロジェクト採択をはじめとする本センターの事業計画や修了認定、チャレンジセンター科目に関することなどについて審議・決定を行う、チャレンジセンター運営委員会および実行委員会を設置しています。本センターの取り組みは、これら委員会の承認を得て実施されました。



2016年度の会議開催と審議事項

| | 実行委員会 | 運営委員会 | 審議事項 |
|-----|----------|-----------|---|
| 第1回 | 5月12日(木) | 5月16日(月) | <ul style="list-style-type: none"> ●2016年度チャレンジプロジェクト支援金審査について ●松前重義記念基金「2016年度ユニークプロジェクト」選考について |
| 第2回 | 8月4日(木) | 8月10日(水) | <ul style="list-style-type: none"> ●2017年度チャレンジプロジェクト募集要項について ●松前重義記念基金「2017年度ユニークプロジェクト」募集要項について ●2017年度チャレンジプロジェクト審査方法について |
| 第3回 | 12月6日(火) | 12月12日(月) | <ul style="list-style-type: none"> ●2017年度チャレンジプロジェクト審査について |
| 第4回 | 3月2日(木) | 3月13日(月) | <ul style="list-style-type: none"> ●2016年度チャレンジプロジェクト修了認定について ●2017年度チャレンジセンター学年暦について |

- 1 チャレンジプロジェクト審査委員**

〈評価審査分科会委員〉
実行委員、付教員、学園校友課長、現代教養センター教員、チャレンジセンター職員による書類審査(8キャンパス26名、うち教員8名、職員18名による)

〈予算審査分科会委員〉
事務課長、事務課(会計担当課長補佐)、チャレンジセンター長、チャレンジセンター課長
- 2 実行委員会**

委員長 : 木村英樹チャレンジセンター長
委員 : 高等教育室長、入試広報課長、事務課長、事務課(人事担当課長)、施設管理課長、教務課長、学生課長、キャリア就職課長、代々木教学課長、高輪教学課長、清水教学課長、伊勢原教学課長、熊本教学課長、阿蘇教学課長、札幌教学課長、チャレンジセンター課長
- 3 運営委員会**

委員長 : 梶井龍太郎副学長
副委員長 : 木村英樹チャレンジセンター長
委員 : 大学運営本部長、大学広報部長、研究推進部長、事務部長、入学センター所長、教学部長、教育支援センター所長、キャリア就職センター所長、国際教育センター所長、現代教養センター所長、学部事務室長、To-Collabo推進室長

プロジェクトコーディネーター・アドバイザー

本学は教員と職員による協働体制で教育支援を推進しています。その一環として、本センターでは、プロジェクト活動の質を高め、より高度な目標を成し遂げられるよう各プロジェクトには本学教職員から選抜されたコーディネーターとアドバイザーを配置しています。チャレンジプロジェクトにおいては、コーディネーターとアドバイザーが必ず配置されますが、ユニークプロジェクトでは学生からの支援要請に基づき本センターで審議の上、配置を決定します。

【2016年度 プロジェクトコーディネーター 担当者一覧】

| 担当プロジェクト名 | 氏名 | 所属 | 担当プロジェクト名 | 氏名 | 所属 |
|--|--------|---------------|--------------------------|-------|------------|
| チャレンジプロジェクト | | | | | |
| 熊本復興支援プロジェクト★ | 高橋操 | チャレンジセンター | 熊本地域プロデュースプロジェクト | 高倉智之 | 熊本事務課 |
| 病院ボランティアプロジェクト | 矢後麗子※ | キャリア就職課 | Action Marketing プロジェクト★ | 石原弘慎※ | 熊本事務課 |
| スポーツ社会貢献プロジェクト | 原田千穂 | 教務課 | 阿蘇援農コミュニティプロジェクト | 石川真之 | 熊本事務課 |
| サイエンスコミュニケーター | 森川真希 | 技術共同管理室 | 阿蘇は箱舟プロジェクト | 中野宏美※ | 熊本教養課 |
| 環境キャラバン隊 | 中嶋清香 | 教育支援課 | あにまるれすきゅープロジェクト | 高橋誠二 | 阿蘇教養課 |
| キャンパスストリートプロジェクト | 岩城希美※ | To-Collabo推進室 | 札幌ボランティアプロジェクト★ | 金子博 | 農学教育実習センター |
| Tokai Formula Club | 村井健太郎※ | チャレンジセンター | (旧 福祉除雪プロジェクト) | 神鷹孝至 | 農学教育実習センター |
| ライトパワープロジェクト | 平島滋義 | チャレンジセンター | ユニークプロジェクト | 伊藤貴人 | 九州キャンパス復興課 |
| 東海大学学生ロケットプロジェクト | 佐藤多嘉雄 | チャレンジセンター | よよさんぽ | 番場浩※ | 札幌教養課 |
| Tokai International Communication Club | 奥山三喜※ | 事務課 | ワンダフル・マリニアニマルズ | 松島佑介 | 札幌教養課 |
| 3.11生活復興支援プロジェクト | 雨木秀文 | 入試広報課 | 三保活性化プロジェクト | 佐野直哉 | 代々木教養課 |
| DAN DAN DANCE & SPORTSプロジェクト | 島村祐太 | チャレンジセンター | 海の森プロジェクト | 加藤大貴 | 代々木教養課 |
| Takanawa共育プロジェクト | 三橋雅之 | 図書課 | ATLAS★ | 舟尾隆 | 清水教養課 |
| 先端技術コミュニティACOT | 佐藤邦夫 | 高輪教養課 | サンゴを守ろうプロジェクト★ | 舟尾隆 | 清水教養課 |
| メカトロマイスタープロジェクト | 渡部真紀 | 高輪教養課 | 地域連携プロジェクト | 日置純子 | 清水図書館 |
| | 福岡恵 | 熊本教養課 | | 舟尾隆 | 清水教養課 |
| | 佐藤行祥 | 熊本事務課 | | 平野庸彦 | 札幌事務課 |
| | 六嘉孝裕 | 熊本教養課 | | | |
| | 高橋大優※ | 熊本教養課 | | | |

★…新規および改名 ※…新任

【2016年度 プロジェクトアドバイザー 担当者一覧】

| 担当プロジェクト名 | 氏名 | 所属 | 担当プロジェクト名 | 氏名 | 所属 |
|--|---------|----------------------|--------------------------|-------|---------------------|
| チャレンジプロジェクト | | | | | |
| 熊本復興支援プロジェクト★ | 二ノ宮りもさち | 現代教養センター | メカトロマイスタープロジェクト | 清田英夫 | 基盤工学部電気電子情報工学科 |
| 病院ボランティアプロジェクト | 児玉千代子 | 健康科学部看護学科 | 熊本地域プロデュースプロジェクト | 高橋将徳 | 基盤工学部電気電子情報工学科 |
| スポーツ社会貢献プロジェクト | 萩裕美子 | 体育学部スポーツレジャーマネジメント学科 | Action Marketing プロジェクト★ | 佐松崇史 | 基盤工学部電気電子情報工学科 |
| サイエンスコミュニケーター | 瀧川洋二 | 教育開発研究センター | 阿蘇援農コミュニティプロジェクト | 高野誠二※ | 経営学部観光ビジネス学科 |
| 環境キャラバン隊 | 岡田工 | 現代教養センター | 阿蘇は箱舟プロジェクト | 鈴木康夫 | 経営学部観光ビジネス学科 |
| キャンパスストリートプロジェクト | 小栗和也 | 教養学部人間環境学自然環境課程 | あにまるれすきゅープロジェクト | 小林寛子 | 経営学部観光ビジネス学科 |
| Tokai Formula Club | 藤野裕弘 | 教養学部人間環境学自然環境課程 | 札幌ボランティアプロジェクト★ | 中嶋卓雄 | 経営学部経営学科 |
| ライトパワープロジェクト | 室田憲一 | 教養学部人間環境学自然環境課程 | (旧 福祉除雪プロジェクト) | 鈴木康夫 | 経営学部観光ビジネス学科 |
| 東海大学学生ロケットプロジェクト | 北野忠 | 教養学部人間環境学自然環境課程 | ユニークプロジェクト | 木之内均※ | 経営学部経営学科 |
| Tokai International Communication Club | 藤吉正明 | 教養学部人間環境学自然環境課程 | TOKAI DESIGN PROJECT | 儀間敏彦 | 経営学部経営学科 |
| 3.11生活復興支援プロジェクト | 成川忠之※ | 現代教養センター | Tokai Air Racers Order★ | 田中靖久※ | 経営学部経営学科 |
| DAN DAN DANCE & SPORTSプロジェクト | 吉永昌史 | 工学部動力機械工学科 | Egyptian Project★ | 田中孝幸 | 農学部応用植物科学科 |
| Takanawa共育プロジェクト | 森下達哉 | 工学部動力機械工学科 | Tokai Dream Space Team | 村田浩平 | 農学部応用植物科学科 |
| 先端技術コミュニティACOT | 加藤英晃 | 工学部動力機械工学科 | Beijo Me Liga★ | 岡田工 | 現代教養センター |
| | 成田正敬※ | 工学部動力機械工学科 | 東海魅力宅配便★ | 青木孝子 | 現代教養センター |
| | 高橋俊※ | 工学部動力機械工学科 | | 小貫大輔 | 教養学部国際学科 |
| | 山本建※ | 工学部動力機械工学科 | | 岡田工 | 現代教養センター |
| | 木村英樹 | 工学部電気電子工学科 | | 末延吉正 | 文学部広報メディア学科 |
| | 福田植夫 | 工学部航空宇宙学航空宇宙学専攻 | | 遠藤晃弘 | 観光学部観光学科 |
| | 池田知行※ | 工学部航空宇宙学航空宇宙学専攻 | | 清水尚彦 | 情報通信学部組み込みソフトウェア工学科 |
| | 那賀川一郎 | 工学部航空宇宙学航空宇宙学専攻 | | 情報原雅明 | 情報通信学部組み込みソフトウェア工学科 |
| | 森田貴和 | 工学部航空宇宙学航空宇宙学専攻 | | 宇津圭祐 | 情報通信学部通信ネットワーク工学科 |
| | 中藤恭一 | 工学部航空宇宙学航空宇宙学専攻 | | 森山弘海 | 情報通信学部経営システム工学科 |
| | 田口香奈恵 | 国際教育センター | | 瀧川郁久 | 清水教養教育センター |
| | 杉本洋文 | 工学部建築学科 | | 園田由紀子 | 教育開発研究センター |
| | 堀本麻由子※ | 現代教養センター | | 福崎稔 | 熊本教養教育センター |
| | 浅川駿 | 情報理工学部コンピュータ応用工学科 | | 植田俊 | 国際文化学部地域創造学科 |
| | 田巻以津香 | 体育学部生涯スポーツ学科 | | 竹中万紀子 | 生物学部生物学科 |
| | 中村なおみ | 体育学部体育学科 | | 河野時廣 | 生物理工学部海洋生物科学科 |
| | 崔一英 | 高輪教養教育センター | | 堀越由紀子 | 健康科学部社会福祉学科 |
| | 佐藤弘幸 | 情報通信学部通信ネットワーク工学科 | | | |
| | 田畑智章 | 情報通信学部経営システム工学科 | | | |
| | 中嶋卓雄 | 経営学部経営学科 | | | |
| | 松本欣也 | 基盤工学部電気電子情報工学科 | | | |
| | 村上祐治 | 基盤工学部電気電子情報工学科 | | | |
| | 阿久津雅子※ | 基盤工学部電気電子情報工学科 | | | |

★…新規および改名 ※…新任

教職員のプロジェクト支援のスキルアップ

チャレンジプロジェクトのコーディネーターおよびアドバイザーを対象にプロジェクト支援に活用できるスキル向上を目的とした研修や意見交換会をTV会議システムを活用し実施しています。特に、プロジェクトコーディネーターに対する研修は、多様な学生の成長に応じられるよう、職員が「教育の担い手」である認識を深める本センター独自のSDとなっております。

| 開催 | 研修名 | テーマ・内容 | 担当 | 場所・人数 |
|------------|----------------------|---|---|--|
| 4月12日 | コーディネーター事務研修 | ①プロジェクトコーディネーターの役割 ②支援金の留意事項について ③センターの業務担当および勤務管理について | ①高橋操(チャレンジセンター係長) ②島村祐太(チャレンジセンター職員) ③五十嵐義和(チャレンジセンター課長) | 28名※ |
| 5月20・21日 | コーディネーター能力研修 | ◆1日目 【講義】ファシリテーションってなに?どうやるの? 【グループワーク】「プロジェクトコーディネーターにとって大切なこと」を話し合おう 【全体ワーク】「プロジェクトコーディネーター宣言(湘南宣言2016)」にまとめよう ◆2日目 【講義】ケーススタディについて 【グループワーク】新任コーディネーターのケース | ◆1日目 二ノ宮りもさち准教授(現代教養センター) ◆2日目 田島祥講師(現代教養センター) | 湘南キャンパス 14名 熊本地震の復旧対応によりコーディネーター能力研修に熊本・阿蘇キャンパスのコーディネーターは欠席 |
| 6月20日 | アドバイザーミーティング | 阿蘇・熊本校舎のチャレンジプロジェクト再開および被災地支援活動における留意点について ①「被災地ボランティア参加の心構え」木村 ②「プロジェクト再開にあたり被災した参加学生へのケアと被災地域ボランティア参加のメンタル面の留意点」芳川 ③意見交換(質疑応答) ファシリテータ:岡田 | ①芳川 玲子教授(文学部心理・社会学科) ②木村英樹教授(現代教養センターチャレンジセンター長) ③岡田工教授(現代教養センター主任) | 21名※ |
| 10月19日 | コーディネーター中間研修 | プロジェクト支援の課題共有と改善について | 二ノ宮りもさち准教授(現代教養センター) 田島祥講師(現代教養センター) | 25名※ |
| 2017年3月22日 | コーディネーター・アドバイザー意見交換会 | メンバー間の引き継ぎにおける課題と支援について | DAN DAN DANCE & SPORTSプロジェクト アドバイザー 田巻以津香(体育学部生涯スポーツ学科) コーディネーター 三橋雅之(中央図書館図書課) | 30名※ |

※湘南、高輪、熊本、阿蘇、札幌の4キャンパスをTV会議システムにて接続

5月の「コーディネーター能力研修」では、参加者全員でプロジェクトコーディネーターである「わたしたちの使命／わたしたちの役割／わたしたちの行動」を定めた『東海大学チャレンジプロジェクトコーディネーター湘南宣言2016』(以下:湘南宣言)を作りあげました。能力研修後には、研修に参加した各コーディネーターが湘南宣言を実践するための担当プロジェクトに応じたアクションプランを策定し、2016年度の学生支援に役立てました。さらに、10月の「コーディネーター中間研修」では、湘南宣言に基づいたアクションプランを振り返るワークを実施し、前期のプロジェクト支援で生じた課題や、後期での支援の工夫や改善について話し合いました。一方、熊本地震による諸対応のため能力研修に参加できなかった熊本・阿蘇のコーディネーターらは、「プロジェクトの復興支援活動における学生支援」をテーマに現状について語り合いました。

研修以外のプロジェクトコーディネーターを対象とした支援として、本センターでは職員の東海大学コミュニケーション&コラボレーションシステムのT365内にネット上の掲示板として「プロジェクトコーディネーターの広場」を開設しました。研修のワーク以外でも自由にプロジェクトコーディネーター同士が情報交換できることを目的としているもので、今年度の試験運用を経て2017年度よりコミュニケーションの場として本稼働する予定です。



チャレンジセンター開講科目

2016年4月に総合教育センターとチャレンジセンターが統合し、新組織である現代教養センターが発足しました。2016年度は、チャレンジセンター科目として、「社会的実践力科目」と「ジャーナリズム実践教育科目」の2つの科目群が開講されています。

【社会的実践力科目】

目標を見つけ、計画を立て、実行する方法を体験的に学ぶための科目群(「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」「プロジェクト入門」「プロジェクト実践」など)を「社会的実践力副専攻」として開講。目標を見つけ、計画を立て、実行する方法を体験的に学ぶことによって、社会に出てから通用する実践力を身につけます。

【2018年度新カリキュラムについて】

2018年度にカリキュラム改編が予定されており、必須科目である現代教養科目が開講予定です。現代教養とは、人々が現在の複雑化した社会を生きるために必要な力です。

本センターでは、東海大学の建学の精神を通じて現代社会を生きるために必要な力を教育します。

1. 文系・理系の垣根を取り払った文理融合的なものの見方、人間・社会・自然・歴史・世界などに対する幅広い視野を培い、人生の基盤となる思想を養う
2. 市民として社会に主体的に働きかけて生きていくための実践力を養う

この2つの教育方針を歯車のようにかみ合わせ、現代教養科目、自己形成科目において、時代に即した教養教育を提供していきます。

現代教養科目は、基礎教養科目(「人文科学」「社会科学」「自然科学」と発展教養科目(「シティズンシップ」「ボランティア」「地域理解」「国際理解」)とに分かれています。基礎教養科目では、知の力の修得を念頭に置き、発展教養科目では、実践力の修得を念頭に置いて、いずれも市民としての教養につながる導的な授業を展開します。

これらの科目を基に、さらに現代文明論、学部学科の主専攻科目、他の教養科目や自己学修科目などを学び、またチャレンジプロジェクト活動なども連携することにより、東海大学の教育目標の達成に向かっていきます。

成し遂げ力(入門)

担当:岡田工(現代教養センター)

2018年度新カリキュラムでの「地域理解」「シティズンシップ」を試行的授業として、「成し遂げ力(入門)」を開講しました。この授業では、地域社会で生活している人々の目線に立って地域の課題を掘り起こす問題発見能力と、「市民」として生きていく上で必要となる知識や、地域社会の諸課題に参画していくための方法について学びました。湘南キャンパスが隣接する秦野市の特徴や自治体あるいは各コミュニティの実態や課題について講義し、グループワークにて学生自らが論じ、考えることを通して、市民参加・参画の前提となる知識や観点を養いました。

グループ発表では、各グループで地域と問題点を決め、討論と発表を行いました。ごみや放置自転車など身近な問題について注目するグループが多い中、「公共施設の若者利用を促進したい」と地域課題を注目したグループもありました。受講学生からは、「地域の問題解決には、自治体や町内会などコミュニティに参加し、積極的に様々な活動に参加することが重要です。」といった前向きな感想を聞くことができました。



履修者状況一覧

(社会的実践力科目)

| 校舎 | 授業科目名 | 担当教員名 | 開講クラス数 | 履修者人数 |
|-----------|------------|-------------------------------|--------|-------|
| 湘南 | 集い力(入門) | 園田由紀子・田島祥・二ノ宮リムさち・村松香織 | 7 | 702 |
| | 集い力(演習A) | 田島祥 | 2 | 93 |
| | 集い力(演習B) | 岡田工 他 | 3 | 58 |
| | 挑み力(入門) | 堀本麻由子・園田由紀子・二ノ宮リムさち | 8 | 716 |
| | 挑み力(演習A) | 堀本麻由子・園田由紀子 | 2 | 91 |
| | 挑み力(演習B) | 田島祥・青木孝子・二ノ宮リムさち | 12 | 378 |
| | 成し遂げ力(入門) | 岡田工・堀本麻由子・二ノ宮リムさち | 4 | 425 |
| | 成し遂げ力(演習A) | 堀本麻由子・青木孝子 | 6 | 167 |
| | 成し遂げ力(演習B) | 二ノ宮リムさち・広川美津雄 | 8 | 212 |
| | プロジェクト入門A | 岡田工・堀本麻由子・園田由紀子・二ノ宮リムさち・結城健太郎 | 10 | 267 |
| | プロジェクト入門B | 堀本麻由子・園田由紀子・青木孝子・日向寺祥子 他 | 7 | 189 |
| | プロジェクト入門C | 岡田工・渋谷猛久 他 | 2 | 62 |
| | プロジェクト実践A | 木村英樹・福田航大 | 1 | 18 |
| | プロジェクト実践B | 木村英樹・堀本麻由子・福田航大・成川忠之 | 3 | 48 |
| プロジェクト実践C | 岡田工・堀本麻由子 | 2 | 6 | |
| プロジェクト実践D | 岡田工 | 1 | 13 | |
| 合計 | | | 78 | 3,445 |

| 校舎 | 授業科目名 | 担当教員名 | 開講クラス数 | 履修者人数 | |
|-----------|------------|------------|--------|-------|-------|
| 代々木 | 集い力(演習A) | 田島祥 | 1 | 55 | |
| | 挑み力(演習B) | 田島祥 | 1 | 9 | |
| | 成し遂げ力(演習A) | 堀本麻由子 | 1 | 26 | |
| | 集い力(入門) | 田島祥 | 1 | 68 | |
| | 集い力(演習A) | 田島祥・崔一英 | 2 | 86 | |
| | 集い力(演習B) | 崔一英 | 1 | 37 | |
| | 挑み力(演習A) | 堀本麻由子 | 1 | 34 | |
| | 挑み力(演習B) | 田中紀代子 | 5 | 97 | |
| | 成し遂げ力(入門) | 堀本麻由子 | 1 | 34 | |
| | 成し遂げ力(演習A) | 田中紀代子・太田民夫 | 5 | 159 | |
| | 成し遂げ力(演習B) | 太田民夫 | 2 | 49 | |
| | プロジェクト入門A | 倉持和夫 | 2 | 36 | |
| | プロジェクト入門B | 田中紀代子 | 6 | 67 | |
| プロジェクト入門C | 崔一英 | 1 | 36 | | |
| プロジェクト実践A | 崔一英 | 1 | 13 | | |
| プロジェクト実践B | 田丸智也 | 1 | 23 | | |
| プロジェクト実践D | 田中紀代子 | 2 | 28 | | |
| 高輪 | 集い力(入門) | 園田由紀子 | 1 | 49 | |
| | 集い力(演習B) | 園田由紀子 | 1 | 31 | |
| | 挑み力(入門) | 園田由紀子 | 1 | 52 | |
| | 成し遂げ力(演習B) | 園田由紀子 | 1 | 13 | |
| | 集い力(演習A) | 鹿田光一・福崎稔 | 1 | 31 | |
| | 挑み力(演習A) | 鹿田光一・福崎稔 | 1 | 49 | |
| | 成し遂げ力(演習A) | 鹿田光一・福崎稔 | 1 | 39 | |
| | プロジェクト入門A | 片岡正実・鹿田光一 | 1 | 6 | |
| | 成し遂げ力(演習A) | 片岡正実 他 | 1 | 31 | |
| | プロジェクト入門A | 増岡智加子 他 | 1 | 27 | |
| | 札幌 | 集い力(演習B) | 田島祥 | 1 | 9 |
| | | 合計 | | 45 | 1,194 |

【ジャーナリズム実践教育科目】

ジャーナリズムコースは、2016年度から特定プログラムの募集を停止、副専攻指定科目へと大幅に衣替えしました。読売新聞東京本社との協定終了に伴うもので、25科目(50単位)の科目から18科目(36単位)になりました。ジャーナリストを目指す学生中心のコースから広く一般の学生にも開放され国内外の広範な問題を学べるコースになりました。

読売新聞社とは新たに業務委託契約を交わし、春学期、秋学期それぞれ1科目に講師を派遣してもらいました。減った科目を補うため、春は政治、経済、医療・福祉、科学の4分野、秋は文化、スポーツ、デジタル、報道写真の4分野のオムニバス授業として開講、読売からそれぞれの専門記者を講師派遣してもらいました。以前から履修希望者の多い人気コースだった秋学期の「文化ジャーナリズム」には、300名以上の履修希望者が詰めかけ、履修制限を実施せざるを得なくなるほどの人気ぶりでした。一方、コースの中でも選抜を伴う特別な履修登録方法を取っていた特定プログラムの対象科目については受講者が極端に少ない科目がありましたが、秋学期から他と同じようにWEB履修登録できるようになったため受講希望者が適正規模に増加しました。前年度、3名しか受講者のいなかった「時事問題研究B」が、今年度35名に増えたようにバランスの取れたコースになりました。

ジャーナリズム・ゼミナールA/B

担当:岩田伊津樹(文学部広報メディア学科教授)

実践的な取材を目指すゼミナールとして現場の学外授業を重ねました。春学期には、靖国神社や千鳥ヶ淵戦没者墓苑、秋学期には、東日本大震災の翌年から続けている福島定点観測取材の一環として福島、宮城県を回りました。定点を引き受けていただいている同県鏡石町の果樹農家・柳沼家は、風評被害からの立ち直りを感じ始めていた矢先の2016年2月に自宅が全焼するという新たな困難に直面しましたが、頑張っって再建を目指しています。

また、一審判決が出たばかりの宮城県石巻市・大川小学校の被災地跡や町全体が高台造成工事で一変した南三陸町にも足を延ばしました。さらに東京オリンピックのカヌー競技開催地候補として一時名前があがった宮城県登米市・長沼ボート場でも現地の人から話を聞きました。参加した学生たちにとっては、現地での声を聞くことがいかにジャーナリズムにとって重要かを実感する旅になったようです。



読売講師派遣科目

担当:永田和男、福永聖二(読売新聞東京本社)

春学期は、「政治ジャーナリズム」の中で「民主主義の危機」や「伊勢・志摩サミットと日本外交の課題」などの政治分野、「ユーロと欧州債務危機」「デフレと非伝統的金融政策」などの経済分野など日々起きている問題を読売新聞東京本社のベテラン記者が講義しました。

また、秋の「文化ジャーナリズム」では、映画記者を長く担当している福永聖二・調査研究本部主任研究員が、ヒッチコック監督の「サイコ」や小津安二郎監督の「東京物語」など映画史に残る名作を取り上げ、他の映画に与えた影響や作品の中の細部に込められた監督の意図などをプロの視点で講義、学生は熱心に画面を見、説明に聞き入っていました。



履修者状況一覧

(ジャーナリズム実践教育科目)

| 校舎 | 授業科目名 | 担当教員名 | 開講クラス数 | 履修者人数 |
|----|------------|-------|--------|-------|
| 湘南 | 時事問題研究A | 岩田伊津樹 | 1 | 14 |
| | 時事問題研究B | 岩田伊津樹 | 1 | 35 |
| | 論文作法A | 岩田伊津樹 | 1 | 2 |
| | 論文作法B | 岩田伊津樹 | 1 | 11 |
| | 時事英語演習A | 山口勉 | 1 | 4 |
| | 時事英語演習B | 山口勉 | 1 | 19 |
| | ジャーナリズム演習A | 山口勉 | 1 | 4 |
| | ジャーナリズム演習B | 山口勉 | 1 | 8 |
| | ジャーナリズム史 | 末延吉正 | 1 | 192 |
| | 合計 | | | 18 |

※読売新聞講師派遣科目

| 校舎 | 授業科目名 | 担当教員名 | 開講クラス数 | 履修者人数 |
|----|----------------|---------|--------|-------|
| 湘南 | 国際ジャーナリズムA | 山口勉 | 1 | 116 |
| | 国際ジャーナリズムB | 山口勉 | 1 | 102 |
| | 政治ジャーナリズム | 永田和男 他※ | 1 | 103 |
| | マスコミ倫理 | 岩田伊津樹 | 2 | 228 |
| | 環境ジャーナリズム | 岩田伊津樹 | 2 | 249 |
| | メディア概論 | 末延吉正 | 1 | 400 |
| | 文化ジャーナリズム | 福永聖二 他※ | 1 | 155 |
| | ジャーナリズム・ゼミナールA | 岩田伊津樹 | 2 | 5 |
| | ジャーナリズム・ゼミナールB | 岩田伊津樹 | 2 | 5 |
| | 合計 | | | 18 |

2016年度は、現代教養センターとしてFD研究会を2回開催しました。第1回は、「学生の能動的な学びを深める実践的な教育の成果に対する評価方法について」と題して堀本麻由子准教授と岡田工教授に報告していただきました。第2回は、「様々な指標を活用した教育活動の質の向上」と題して前田泰樹教授に報告していただきました。

2016年度 第1回現代教養センターFD研究会 学生の能動的な学びを深める実践的な教育の成果に対する評価方法について

日時：2016年7月13日(水)
場所：東海大学湘南キャンパス 15号館 4階 第2会議室

発表①

「学生自身の振り返りに基づく評価—学習成果の社会的活用を目指す—」

現代教養センター 堀本麻由子准教授

1) 評価に関する問題意識の背景—生涯学習論、成人学習論からの視点—

2) 何を評価するのか—実践的能力育成のために—

(1) 「学び方を学ぶ」—振り返りの多重構造による学生の考え方、学び方にゆさぶりをかける

(2) 評価の観点

3) 課題

振り返りの内容を教員が評価することへのジレンマや「自らの学習目標(課題)」を設定する力に、ばらつきが多いことが挙げられた。また、参加者より「学生による総合評価のやり方」についてなど質疑応答がなされた。

発表②

「学生同士の相互作用に基づく評価—授業支援システムを利用した相互評価—」

現代教養センター 主任 岡田工教授

科目「プロジェクト入門」における実践例を元に、学生同士の評価、つまり学生が学生を評価することの重要性を如何に引き出すか、といった問題に対する取り組みについてお話を頂いた。特に今回は、授業支援システムを利用した創意工夫の例を取り上げて、その方法と効果について述べられた。その結果、以下の内容が得られたと報告された。

① 学生による相互振り返りは効果が高いと考えられる。

② 学生の評価点数の公平性については、彼らなりに真剣につけていると考えられる。

③ 成績評価は、毎回の振り返りや報告書などと合計し、総合的に判断するべきであると考えられる。

2016年度第2回現代教養センターFD研究会 議事録 「様々な指標を活用した教育活動の質の向上」

日時：2016年12月14日(水)
場所：東海大学湘南キャンパス 18号館サイエンス・フォーラム

「GPAと授業の質を両立する」

現代教養センター 前田泰樹教授

1) 講義設計の方針について

これまで「ふつうに頑張った学生がAになるように」という経緯があるが、AということはGPA=3.0が設定目標であるので、私は学科間の差を出来るだけ考慮し、2.5~3.5に収めるようやってきた。ただしGPAを上げるために授業の質を下げることは断じて行っていない。

・文理共通科目と基礎教養科目について。

文理共通科目での「知識とコミュニケーション」は、哲学・言語学・心理学を盛り込みながら、コミュニケーションについて話を基本としている。それに対し新カリでは真逆で、基礎教養科目の「社会科学」では、「社会学」は法学・政治学・経済学・経営学・社会福祉学・心理学・教育学等のディシプリンの集合の一つであり、相対化して全てが見えるようにしなければならないので、方向性がこれまでとは異なるが、評価の方法として考えるならば、基本的には同じように対処出来ると考えている。

・成績評価方法について

GPAの安定に向け、成績評価資料を分担する。毎回の課題評価を積み上げることで成績向上を目指せると考え、1回の講義において60分講義を行い残り30分で課題を行わせる。1回につき5点配分とすれば10回で50点となる。これはあくまでも課題点であり、出席ではない。出席していても課題が解けなければ得点にはならない。さらに解けるまで終了させない方針で行っている。

2) 講義実演の説明

第1回と第10回に配布するプリントを参照する。もう1枚は課題の回

答用紙。まず課題1について説明。3×3で9回分の講義とまとめの1回を合わせ10回の講義をそれぞれのテーマに添って60分ずつ行い、その後30分間で課題を行わせる。料理教室に例えるならば、始めに講師が60分の実演を行った後、生徒に同じように演習させるような方法で、10回の講習を行うようなもの。後は日常から自分たちの見つけたコミュニケーションに関する事例をとってきて、料理してもらうように話をしている。

3) 授業内容課題の授業時間内評価の紹介

・インタラクティブ性について

・学習達成度について

・学習達成度を学生自身が実感できる

・成績評価について

4) 成績評価方法への問題提起

・成績評価のゆるやかな統一について

・成績評価にともなうリスク管理について

質疑応答の後、グループディスカッションを行い、「ミニッツペーパーや授業支援システムなどを利用し、ある意味で自動的に採点ができるようにすれば、教員の負担も軽減できるし学生にも理解しやすい評価をだせるのではないか。」などお互いの意見を交換した。

プロジェクト活動を通じた学生の成長について、PROGとルーブリックを用いて評価した。PROGでは基礎力(ジェネリックスキル)について、ルーブリックでは4つの力について検討した。

基礎力測定テストの実施について

1 目的と狙い

本センターにて、年間を通して行われるプロジェクト活動を通して、「自ら考える力」「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」の育成を行っている。上記、能力育成に対して、プロジェクト活動がどの程度、効果があったかを基礎力(ジェネリックスキル)の側面から客観的に測定し、プロジェクトの効果検証を行う目的で実施。

基礎力測定実施対象者は、湘南校舎チャレンジプロジェクトから抽出した1年から4年までの学生(4プロジェクト)を招集し、測定を実施。測定時期・人数は2016年12月に、154名受験した。尚、154名の受験者のうち、昨年受験した90名の学生の能力において、どのような変化があったかの検証を実施した。

2 測定に用いた基礎力測定テストPROGについて

PROGテストとは、株式会社リアセック、河合塾の共同開発したジェネリックスキル測定テスト。

知識を活用して問題解決する力(リテラシー)と経験を積むことで身についた行動特性(コンピテンシー)の2つの観点で構成されている。

「リテラシー」:知識を基に問題解決にあたる力で、知識の活用能力や学び続ける力の素養をみるもの。

「コンピテンシー」:経験から身に付いた行動特性で、どんな仕事にも移転可能な力の素養をみるもの。

今年度は、コンピテンシー領域のテストのみ使用。

3 今回の測定結果より(成長分析)

● 前回と今回を比較すると、対人基礎力、対自己基礎力、対課題基礎力、全てが伸長している。特に対課題基礎力の伸長が大きい。

● 各学年別に差分を見ると、3年生の伸長が大きい。(特に対課題基礎力は0.85の伸長。)

● 各学年の今回の結果を見ると、対人基礎力、対課題基礎力においては、3年生が高く、対自己基礎力においては、4年生が高いスコアとなっている。

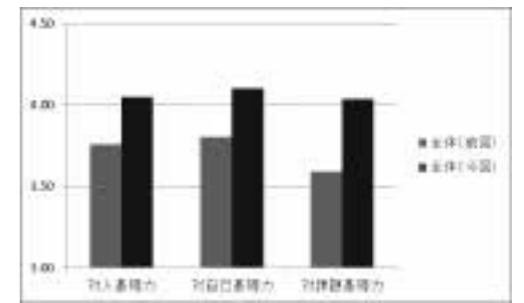
4 今回の測定結果より(学年別)

■ 学年内訳 ・1年生:57名 ・2年生:37名 ・3年生:29名 ・4年生:31名

● 対人基礎力、対自己基礎力においては、1,2年生と比較して、3,4年生の方が押しなべて高い。

● 4年生の自信創出力が、他学年と比較して上回っている。

● 4年生の計画立案力が1年生、3年生と比較して下回っている。



成長分析(総合) レベル分布の推移 (前回:2015年12月 今回:2016年12月)

ルーブリックを活用した振り返り

2015年度に引き続き、ルーブリックを活用したプロジェクト活動の振り返りを行った。今年度は、病院ボランティアプロジェクト、環境キャラバン隊、キャンパスストリートプロジェクト、ライトパワープロジェクトの学生が参加した。ルーブリックは年度内に3回実施し、7月に4~6月の活動を、10月に7~9月の活動を、1月に10~12月の活動を振り返った(順に、初期・中期・終期)。各自が、4つの力に沿った12の観点について、9段階で自己評価を行った(項目の詳細は2015年度活動報告書を参照のこと)。本稿では、3度ともルーブリックを記入した95名の学生(1年生46名、2年生25名、3年生24名)のデータをもとに、初期・中期・終期での変化について、全体の傾向をとらえていく。

学年ごとの結果を比較すると、1年生がもっとも変動が大きいことがわかる(図1)。1年生の初期はプロジェクトに加入したばかりの時期である。特にプロジェクトの中で自分の役割や貢献の仕方を見出す「アイデンティティ獲得」やプロジェクトの企画の準備や実行のために必要な資源(人材・物資・時間・資金など)について予測し、管理する「工程管理力」の評価が高くないことは、この時期の実情が反映された結果であるといえよう。中期・終期になるとプロジェクトにも馴染み、継続的な参加によりいくつかの活動を経験し始めることで自信や達成感が生まれ、評価も高まったのだと考えられる。2年生の結果は、中期・終期の「自ら考える力」や「集い力」を中心に、他の学年よりも評価が低い点に特徴がある(図2)。2年生になると、徐々に主たる活動に参加しはじめるようになる。専門的な内容に触れたり、様々な困難を経験したりすることを通して、自身の力量に真摯に向き合った結果の評価ではないかと考えられる。3年生は、他の学年に比べると全体的に評価が高く、年間を通しての変動が少ない点に特徴がある(図3)。2年間の継続的な活動の成果や、よりコアな活動に加わることによる成長などが反映していると考えられる。

本稿では学年ごとの平均を算出したが、プロジェクトや個人によって活動のスタイルは異なることから、より個人内での変化に着目していくことが重要である。ルーブリックでは、9段階での評価に加え、その根拠となる行動や経験を記録している。また、学生は月間活動報告書にも活動を記録している。これらの記録を活用し、振り返りを促す働きかけをすることで、今後も学生の学びと成長をサポートしていきたい。

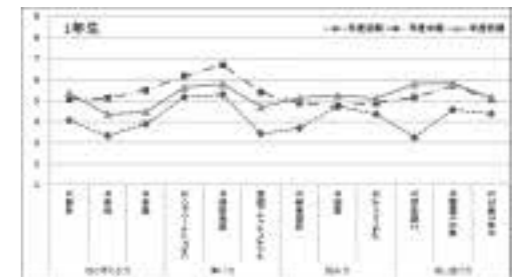


図1. 1年生の結果

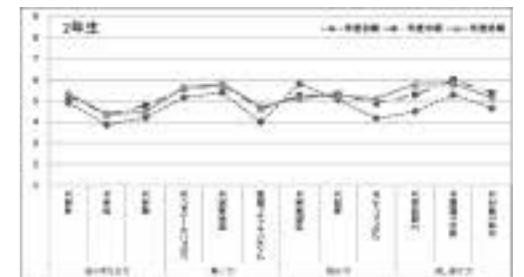


図2. 2年生の結果

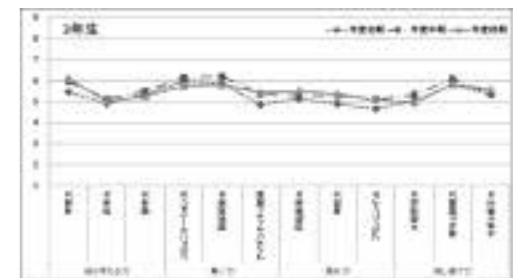


図3. 3年生の結果

広報媒体 (ポスター・チラシ・パネル・広報誌)

〈ポスター〉



熊本復興支援プロジェクト

〈ポスター〉



ライトパワープロジェクト

〈ポスター〉



Tokai International Communication Club

〈ポスター〉



3.11生活復興支援プロジェクト

〈ポスター〉



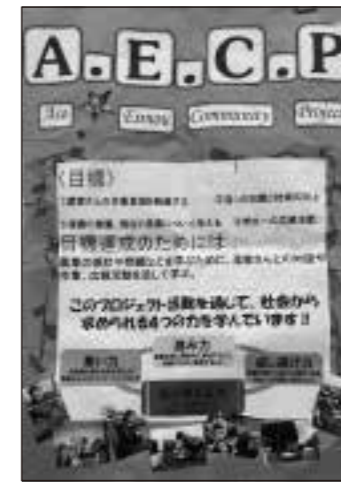
先端技術コミュニティ ACOT 熊本地域プロデュースプロジェクト

〈広報誌〉



Action Marketing プロジェクト

〈パネル〉



阿蘇援農コミュニティプロジェクト

〈チラシ〉



あにまるれすきゅープロジェクト

〈ポスター〉



キャンパスストリートプロジェクト

〈パネル〉



〈パネル〉



病院ボランティアプロジェクト

〈パネル〉



Tokai Formula Cub

〈パネル〉



札幌ボランティアプロジェクト

〈チラシ〉



チャレンジセンター

〈チラシ〉



〈ポスター〉



DAN DAN DANCE & SPORTS プロジェクト

〈ポスター〉



環境キャラバン隊

〈ポスター〉



Takanawa共育プロジェクト

〈ポスター〉



先端技術コミュニティ ACOT

〈ポスター〉



チャレンジセンター

〈ポスター〉



〈ポスター〉



〈ポスター〉



チャレンジプロジェクト活動一覧

通年/[湘]LPP:地域イベントに出展 通年/[阿]阿蘇援農:援農活動 4月~2017年2月/[高]Takanawa共育:地域に向けた定期的な活動を実施 4月12日~7月5日,9月27日~2017年1月17日/[湘]TICC:「Communication Lunch」を開催
4月13日~7月14日,9月14日~2017年3月23日/[湘]TICC:「にここティー教室」を実施 4月14日~7月5日,10月4日~12月20日/[湘]C.A.P.:「校内パン販売」を実施 6月6日~2017年1月31日/[湘]病ボラ:「病棟ボランティア活動」を実施

| 3月 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 |
| | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 |
| | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 |
| | 28 | 29 | 30 | 31 | | | |

| 4月 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 |
| | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 |
| | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | |

| 5月 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| | | | | | | | 1 |
| | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
| | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 |
| | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 |
| | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 |
| | 30 | 31 | | | | | |

| 6月 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| | | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 |
| | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 |
| | 27 | 28 | 29 | 30 | | | |

| 7月 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 |
| | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 |
| | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 |

| 8月 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 |
| | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 |
| | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 |
| | 29 | 30 | 31 | | | | |

| 9月 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| | | | | 1 | 2 | 3 | 4 |
| | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 |
| | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 |
| | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 |
| | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | | |

8月~2017年3月/[阿]あにまる:震災で離れ離れになった大猫をケア 8月5日~9月5日,2017年2月5日/[湘]3.11:「どんぐりハウス」を移設 8月21日~9月17日/[特]熊本復興:被災地ボランティア活動を実施
10月22日~12月18日/[湘]ロケット:特別展「知られざる平塚のロケット開発」に出展 11月24日,12月9日~2月13日/[札]札幌:除雪活動を実施

| 10月 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 |
|-----|----|----|----|----|----|----|----|
| | | | | | | | |
| | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
| | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 |
| | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 |
| | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 |
| | 31 | | | | | | |

| 11月 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 |
|-----|----|----|----|----|----|----|----|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 |
| | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 |
| | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 |
| | 28 | 29 | 30 | | | | |

| 12月 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 |
|-----|----|----|----|----|----|----|----|
| | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 |
| | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 |
| | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 |
| | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | |

| 1月 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
| | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 |
| | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 |
| | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 |
| | 30 | 31 | | | | | |

| 2月 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| | | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 |
| | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 |
| | 27 | 28 | | | | | |

| 3月 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| | | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 |
| | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 |
| | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | | |

熊本復興:熊本復興支援プロジェクト LPP:ライトパワープロジェクト TICC:Tokai International Communication Club サイエンス:サイエンスコミュニケーター 3.11:3.11生活復興支援プロジェクト C.A.P.:キャンパスストリートプロジェクト 病ボラ:病院ボランティアプロジェクト

TFC:Tokai Formula Club TSRP:東海大学学生ロケットプロジェクト スポーツ:スポーツ社会貢献プロジェクト DANCE:DAN DAN DANCE & SPORTS プロジェクト 環キャラ:環境キャラバン隊 Takanawa共育:Takanawa共育プロジェクト ACOT:先端技術コミュニティACOT

Action:Action Marketing プロジェクト メカトロ:メカトロマイスタープロジェクト 熊プロ:熊本地域プロデューサープロジェクト 阿蘇援農:阿蘇援農コミュニティプロジェクト あにまる:あにまるれすきゅープロジェクト 箱舟:阿蘇は箱舟プロジェクト 札幌:札幌ボランティアプロジェクト

湘南キャンパス…湘 阿蘇キャンパス…阿
高輪キャンパス…高 札幌キャンパス…札
熊本キャンパス…熊 清水キャンパス…清
湘南:清水・代々木・札幌・伊勢原キャンパス…特

